

平成23年度

社会貢献者の記録



公益財団法人

社会貢献支援財団

Foundation for Encouragement of Social Contribution

平成23年度
社会貢献者の記録



公益財団法人

社会貢献支援財団

Foundation for Encouragement of Social Contribution



目次

まえがき	3
平成23年度 表彰式次第	4
平成23年度 社会貢献者表彰	23
社会貢献者表彰について	24
表彰選考委員会	26
平成23年度 社会貢献表彰受賞者の索引	28
人命救助の功績	30
社会貢献の功績	48
特定分野の功績	128
資料編	134

まえがき

平成 23 年度の社会貢献者表彰につきましては、皆様のご協力のもと、49 件の社会貢献者の皆様を表彰させて頂くことが出来ました。ご推薦者の方々、ご後援を賜った内閣府・総務省・外務省・文部科学省・厚生労働省・国土交通省、そして事業助成を頂いた日本財団はじめご協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

本年度の表彰は、東日本大震災の発生から 8 ヶ月を迎えるなかで開催させて頂きました。亡くなられた皆様のご冥福をお祈り申し上げますとともに被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

さて、表彰の候補者は「人命救助の功績、社会貢献の功績、特定分野の功績」の三部門 187 件の多くの方々をご推薦頂きました。選考につきましては、表彰選考委員会により厳正に行われ、人命救助の功績 8 件・社会貢献の功績 39 件・特定分野の功績 2 件、計 49 件（39 名、15 団体）の皆様の選考を行ないました。

受賞者の皆様の中で、宮城県で集落が壊滅した名取市での活動をはじめ 4 件の皆様が、大震災による被害を受けられましたが、いずれの皆様も悲痛な思いの中で、活動を再開されています。

表彰式典は、平成 23 年 11 月 21 日（月）、帝国ホテルで挙行し、受賞者の皆様を表彰させて頂くとともに、日本財団賞をお贈りいたしました。

受賞者の最年少は 20 歳、最年長は 90 歳の方でした。人命救助の功績の受賞者は、自らの危険を顧みず人命の救助に当たられた皆様です。また社会貢献の功績の受賞者は、多年にわたり社会貢献活動に取り組まれ著しい功績を挙げられた皆様です。そして特定分野の功績の受賞者は、海に関わる功績を挙げられた皆様を表彰させて頂きました。

受賞者の皆様は、勇気をもって行動され、また多年にわたって困難を乗り越えて活動を続けられるなど、よりよい社会の発展のために尽くされました。

このたびの表彰によりまして、受賞者の皆様の輝かしいご功績がより広く知られ、それによって、さらに社会の善行活動を豊かにすることが出来れば、これに優る喜びはありません。

平成23年度 表彰式次第

第1部 表彰式（平成23年11月21日）

9：50 開 場

10：30 オープニング

表彰式開会

会長挨拶

表彰選考委員会委員挨拶

表彰状並びに副賞の贈呈

来賓挨拶

12：00 表彰式閉会

第2部 祝賀会

12：20 開 宴

13：30 閉 宴

主 催 公益財団法人 社会貢献支援財団

後 援 内閣府 総務省 外務省 文部科学省 厚生労働省 国土交通省

協 力 公益財団法人 日本財団

会 場 帝国ホテル

会長挨拶

会長の日下でございます。一言挨拶を申し上げます。
昨夜開催いたしました受賞者の皆様の懇談会におきまして、受賞なさる方49名、それぞれ自己紹介をなさいました。

伺っておりますと、皆様大変謙虚で、まるで悪いことでもしたようなお話の仕方でありまして、「ああ、これが日本だな、外国とは全然違う。外国とは正反対だ。」と大変感動いたしました。

私の友達でパリに30年とか、ニューヨークに20年住んでいる友達に話を聞きますと、今回の東日本大震災の後、町を歩いていると、全く知らない人から抱きつかんばかりにして声をかけられる。「お前日本人か、頑張れよ、世界で一番良い人間は日本人なんだからな。」というふうに言われたと。フランス人はそう思っていてくれたか。ニューヨークにもそう思っている人が沢山いたのか。これは新聞、テレビで言っていることとまるで正反対ではないかと、思ったとその友達は言うておりました。新聞が間違っているんですね。日本は世界から笑いものになっているとか、恥ずかしいとか、孤立するとか。どうも全然違うらしい。庶民の世界では、世界の庶民は日本の普通の人々がどんなに偉いか、いつの間にか知っているわけでございます。

今日集まっていたら受賞者の皆様はそういうヒーローであると。ヨーロッパ人、アメリカ人が考えるようなヒーローではなくて、日本人の中で偉いと思われるような人たちであると、そう思いました。

社会貢献支援財団の仕事を致しております、実は表彰する方を選ぶのに毎年大変苦労致しております。それはどうしても40人、50人と絞り込むわけでありまして、絞り込むという神経は私たちの気持ちとは違うんですね、良い人は皆良いのだと。それを選んで絞り込むなんて言うのは心の持ち方が違うわけでありまして、なんでこんなに苦労するかというわけがわかりました。それは、日本人は皆偉いんだということだからでございます。

今日受賞された方は特に偉い方でございますが、そういう偉い方がますます増えるように、また、お互いに知り合って元気を出して、良いことをたくさんして下さるように、そして私たちもそれを見習って後についていこうと、そう思っております。

表彰に関しますお金は、日本財団から頂戴しておりますが、やがてはまた日本中の方からもいろいろ応援して頂きたいとも思っております。

今日はお顔を見せて下さいまして、ありがとうございます。



公益財団法人 社会貢献支援財団
会長 日下 公人

表彰選考委員 挨拶



ただいまご紹介に預かりました、内館牧子でございます。

本日、塩川委員長は、ご出席でいらっしゃいますけれども、代わってご挨拶をとということで、選考状況を含めまして、私からひと言ご挨拶を申し上げたいと思います。

受賞者の皆様、本当におめでとうございます。

本日は、後ろに国旗がございますけれども、日本国内からのみならず、アメリカ、ラオス、タイ、カンボジア、エクアドル、そして遠くアフリカからも受賞者の皆様にいらしていただいております。

今年度は、「人命救助」、「社会貢献」、「海の貢献」の三分野に、合計 187 件の功績が推薦されました。先ほど会長からも、選ぶのがすごく大変なのだというお話がございましたけれども、まず選考委員は、その 187 件の選考資料を、大変分厚いファイルになるのですけれども、自宅に持ち帰りまして全て丁寧に読ませていただきます。そして、質問や調査して欲しい点が出て参りましたら、改めて事務局に伝え、それを調べてもらいます。ですから、何日間かはその分厚いファイルと格闘するという日が続きます。その後、各自がそれぞれに選考した案件を持ち寄りまして、選考の審議会が開かれます。すんなりと全員一致で決まることもありますけれども、大抵の場合は、相当な激論を戦わせることになります。ですから、かなり屈強な選考委員が揃っておりますが、終わった後はどっと疲れが出るという状態です。

そのような選考を経まして、本年は人命救助 8 件、社会貢献 39 件、そして海の貢献 2 件の計 49 件の受賞を決定いたしました。

当然ながら、187 件には優劣が付くはずもありませんし、やっとの思いで選び出した 49 件であり、それ以外の方々にも心から感謝と称賛を申し上げたいと思います。

受賞者の皆様の中には被災地、仙台市や石巻市そして名取市などで、難病患者の支援をなさったり、一人暮らしの高齢者を支援したりという方々がおられます。また、故郷の海を取り戻すために、島をもう一度再興するために、活発に活動していらっしゃる方もいらっしゃいます。3 月 11 日の東日本大震災により、ご自身も多くのものを流されたり、大切なものを失った中で、活動を続ける皆様もいらっしゃいます。どれほどの精神力でそれらのことをなさっているのかと、言葉もありません。ご自分も被災されていますのに、さらに弱い者のために立ち上がる人々がいるということ、選考委員一同、染み入るよう感じさせられました。

今回の、東日本大震災に際し、私たち日本人の見事な秩序と思いやり等が海外で絶賛されました。本当にこんな国民はいるのか、信じられない、という海外の反響がたくさん報道されま

した。震災直後、水も電気も食べ物も全く無く、ライフラインが戻らない中、若い人たちは老人をいたわり、物資の配給や救助もまず老人や子どもを優先させました。それを受けた老人たちは、感謝を言葉にしました。時には涙ぐんだり嘆いたりする老人たちに、若者が、「僕たちはきっとこの町を再建します」と言っている姿をわたしはテレビで幾度も見えています。そして幼い子どもたちまでが大人を手助けし、言うことを守り、自分よりもっと小さい子のお守りをする、という状況が続きました。

考えてみれば、いつもは「最近の若い男は草食系で情けない」と言われ、「若い女は自分の事しか考えていない」と言われてきました。そして「中高年は羨ひとつ出来ないから、あんな子たちが生まれて、こんな日本になったのだ」言われてきたわけです。ところが、諸外国からこれほど絶賛される日本人であったということ、今回私たちは再確認致しました。

私は、国の復興構想会議のメンバーでもあり、被災地を度々訪れておりますが、悲惨な中で周囲に気を配り、敢然と立ちあがった人たちをいつもいつも目にしてきました。そんな時、明治天皇が作られた歌を思い出しました。それは、「しきしまの大和心の雄々しきは ことある時ぞあらわれにける」という歌です。日本人の心の雄々しさとは、何か事に直面した時にあらわれるのだという、明治天皇のこの御製は、まさに今回寄せられた187件すべての行動にも当てはまると思います。我が身を顧みずに後回しにしても、他人のために咄嗟に体が動いていたり、社会のために力を尽くしていたり、それは事に直面した時に、雄々しく立ち上がった日本人の心そのものだという気が致します。

そこで、そんなお働きをなさった受賞者の皆様様に、最後に一つだけどうしても申し上げておきたいことがございます。

どうぞ、今回の賞金は、ご自身やご家族そしてスタッフの方々のためにお使いいただきますようお願い致します。これは、曾野綾子元委員長が最初におっしゃったことで、私はその言葉を聞いたときに感動いたしました。全くその通りだと思います。皆様のことで、頂いた賞金は社会のために還元しようとか、人々のために役に立てようとか、そうお思いになる方が多いのではないかと思います。けれども、どうかスタッフとゆっくり温泉にお出かけになったり、ご家族で美味しいものを召し上がったたり、ずっと欲しかったものをお買いになったり、そういうことにお使いいただきたいと思います。それによってまた皆様が活力を得て、そして、また社会や人々のために立ち上がろう、尽くそうと思って下さるなら、私たちはこれほど良い賞金の使い方はないと考えております。

どうか、再び得た活力を是非また社会のために、人々のためにお役立て下さいますよう、改めてお願い申し上げます。

本日は本当におめでとうございました。

脚本家
公益財団法人 社会貢献支援財団

副会長 選考委員 内 館 牧 子

来賓挨拶



本日、世のため人のために行った活動や行動が評価されて表彰を受けられた皆様方、本当におめでとうございます。

お一人お一人の顔を拝見しておりましたが、本当に美しいお顔でございました。決して美男・美女ではないにもかかわらず、なぜこのような美しいお顔になれるのか。きっと崇高な精神のもとに強い意志を持って人々のために取り組んでおられるからだろうと、しみじみと感じておりました。

私もハンセン病の制圧やアフリカの食糧増産など、様々な取り組みを長年にわたって行っていますが、皆様方の活動ぶりやその成果を見ますと、自分の足らざる点や反省すべき点の多いことに改めて気付かされました。皆様方の驥尾（きび）に付して私も努力をして参りたいと思っております。

ご承知のように、日本国は1000兆円という膨大な財政赤字を抱えており、国や行政の手の届かない分野が段々と出てきています。その部分を本日表示された皆様方がグラスルーツからしっかり支え、埋め合わせて下さっているのです。

イギリスBBC放送で「世界に良い影響を与える国のランキング」を毎年発表していますが、2006年から3年連続で日本がトップ、以降も全て上位に位置しています。私はやはり、皆様のような方々の絆によって素晴らしい日本人の心というものが世界に広がり、世界から評価されるまで昇華させているのではないかと、今、あらためて感じていたわけでございます。

この度の震災においても「日本人の絆」が大きな話題となりました。そして皆様方のような方によって日本人の絆をしっかりと繋いで頂いているということも分かりました。私はこの輪をさらに大きく強くして、そして、本来日本人が持っている相互扶助の精神をさらに発展させていかなければいけないと思っています。

その取り組みの一つとして、日本財団では今、企業の社会貢献活動を評価・公表しています。これからの企業は単に利益を上げるだけではいけません。今回の震災復興を見

でも分かるように、企業が社会に果たすべき役割はますます大きくなっているのです。

既に若い学生の中には、CSR 活動に積極的な企業に勤めたいという人がたくさん出てきています。従って、企業は優秀な学生を採用したいと思えば CSR 活動をしっかりやらないと人材が集まらないという時代になってきているわけです。そこで私は、そのような企業が NPO やボランティア団体、或いは皆様方のように第一線の現場で活動されている方々を支援するようなスキームを作りたいと思い、試行錯誤しながら日々取り組んでいるところです。

今回は海外でご活躍の方々も随分表彰を受けられたようでございます。日本の ODA が減り、海外での日本の存在が地盤沈下しているというような報道も多くみられますが、私は 120 ヶ国を超える国々を訪れたなかで、日本の方々が現地に溶け込んで地道に仕事をされているお姿を行く先々で拝見してきました。このご努力というものは派手なものではありませんしメディアで取り上げられることもめったにございません。しかし、日本という国、また日本人の心というものが彼らの中に確実に浸透している姿を拝見しますと、決して ODA で箱物を作るだけが海外援助ではないということが良く分かります。日本人の心を通じてそれぞれの国の人材を養成し、困った方々に救いの手を差し伸べる。そのような日本人の心、ソフトパワーというものがどれほど大きなものであるかということは、実は日本に住んでいる方々にはほとんど知られていません。

今回、社会貢献支援財団の選考委員の先生方にはこのような点にまで目配りしていただき活動を評価して頂いたということは、海外で支援活動をしている身から申しましても大変嬉しいことですし、このようなことはもっともっと日本中に知ってもらう必要があると思います。

何はともあれ、世界から尊敬される日本人の心の原点が、本日表彰された皆様であろうと思います。これからもお体にご留意しながら活動をお続け頂きたいと願うと同時に、多くの方々の参画を促し、この輪を広げ、更に力強い日本の原点を作っていくことを期待しています。

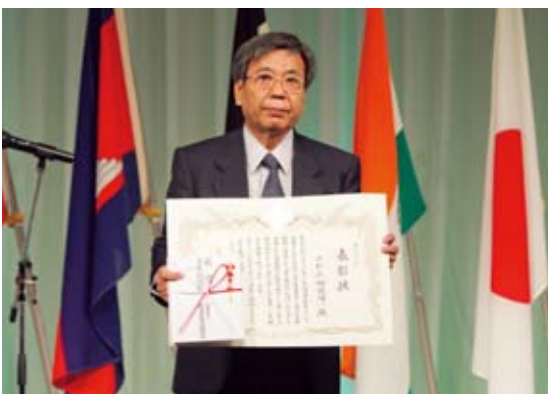
2011 年 11 月 21 日

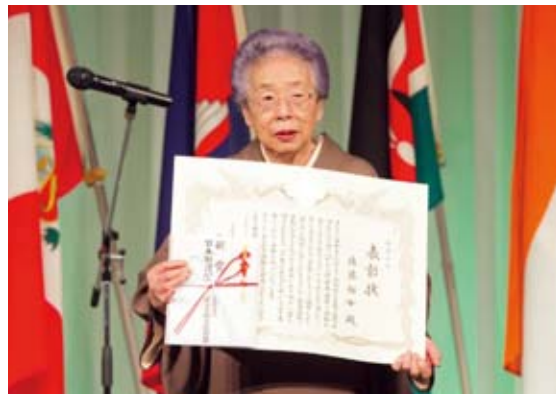
公益財団法人 日本財団

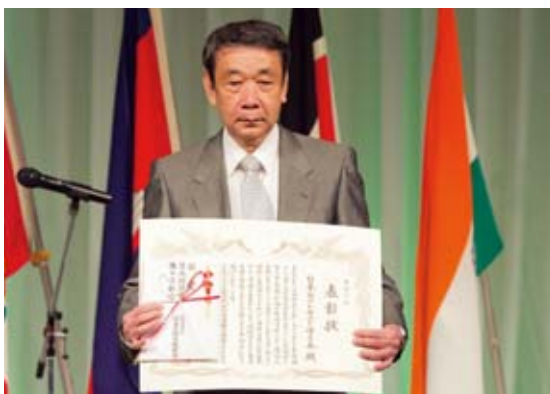
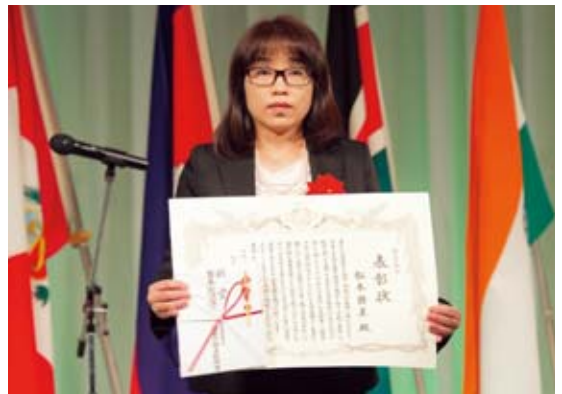
会 長 笹 川 陽 平

表彰式









記念写真



リチャード・ハウエル
三上美紀
田中久美子
小寺悠太
清水裕一
徳野孔人
野村純
立本敬三
松倉昌昭
武末慎
吉田秋一
森亮太
徳島県知事

白石睦也
日明リサイクル研究所
野口義弘
杉田優子
子どものための会
森山誉恵
ユウアドの会
石崎克雄
松本雅美
須原玖仁子
日・タイ親善交流クラブ
岡田博勝
中山真理子
斯波千秋
八徳クラブ
武田美江子
あかぎグループ
富永幸子
楊正武
京都中国料理師協会の会
岩附由香
岩附由香の会
澤田正一

根岸美智子
竹内健二
片桐昭吾
片桐和子
及川晴彦
あいち国際交流協会
前田延英
美島康男
印旛野さいごの会
大橋信彦
全阪ハマサビの会
伊藤富夫
日本クワソウを守る会
武内幸次郎
徳田安子
呉山良雄
黒川妙子
三輪憲功
三輪の会
高山良二

高橋秀治
牟田靖子
牟田一郎様代理
佐藤初女
茂木幹央
高橋実
徳島県徳島市役所 総合センター
バーバラ・ホーガン
内館副会長
塩川委員長
日下会長
中川一郎
吉田愛一郎
吉田千鶴
ジョゼリア・ロンガット
伊集盛元
阿部春代

祝賀会



受賞者代表挨拶

皆様、こんにちは。

ご紹介いただきました、名取ハマボウフウの会の大橋信彦と申します。

東北は宮城県名取市、太平洋に面した^{ゆりあげ}閑上という小さな海岸からやって参りました。

この度の災害では、多くの皆様から励ましの言葉や、直接、間接のご支援を頂きまして、誠にありがとうございました。そしてこの度、社会貢献支援財団様より名誉ある賞を頂くことになり、誇りに思いますとともに、受賞者の皆様を代表して心より感謝申し上げます。

さて、ここでハマボウフウの話をし少しさせて頂きます。この植物は、北は北海道から南は沖縄まで、どこの海岸にも自生しておりました日本古来の海浜植物で、濃い緑の葉と夏に咲く白い小花、そして垂直に長く伸びた根、そのような特徴を持った海浜植物の一種です。

私たちが子どもの頃は、春先になりますと、浜のあちこちに出てきた新芽を摘んでは親のところに持って帰り、それを酢味噌和えにして食べるのがどこの家庭でも習わしになっておりました。また夏には、熱い砂の上でハマボウフウの葉っぱに裸足の足を乗せ、冷やしながら波打ち際まで駆けて行ったあの感触を、私たちの足の裏がはっきりと覚えています。

いつの頃からでしょうか、ハマボウフウが私たちの海岸から姿を見せなくなってしまいました。それはどうやら日本の経済の復興と歩調が合っていて、開発や乱獲がどこの海岸でも頻繁に起きていた、そんな時代の出来事でした。そしていつしか、彼らの姿が海岸から消え、土地の人もその存在を忘れてしまうようになってしまったのです。

どのぐらいの年月が経ったのでしょうか、ある時、私たちの海岸で幻のハマボウフウが見つかりました。正直、胸が躍り、血が騒ぐのを覚えました。盗掘を恐れた私たちは、それを地域内の農業高校に運んで保護と増殖の願いをしました。ハマボウフウは農業高校の畑に程なく根付いて、翌年には花を咲かせるようになりました。そして、平成13年8月15日、私たち「名取ハマボウフウの会」は発足いたしました。会員20名



でのスタートでした。

目的は、美しく健康な海岸を再生させること、地域の人たちが親しんできたハマボウフウを新しい食材として育てること。ちょっと欲張っているようですが、この二つの目標をもって会の活動がスタートして、以来10年。本日、たくさんの皆様が40年、50年の長きにわたって活動しておられる、そんなお姿を拝見し、お話をお聞きするにつけ、私たちの活動はまだまだかわいらしいものではありませんが、しかしながら、10年が経ってみますと、ハマボウフウたちが保護区内に無数に繁殖し、ある時には種が勝手に防護柵の外に飛び散って小さな群落をつくる、そのような姿が海岸に現れるまでになりました。

そして、この春の大きな波が、町も人も私たちの保護区も全て押し流してしまったのです。

しかし、ひと月経ったその時、浜にハマボウフウの新しい芽が出て参りました。私たちは「復興のシンボルか！」そんな風に感じながら、この6月、開催が危ぶまれた「ふるさと海辺フォーラム」（ハマボウフウ交流会）を名取市の海岸で実施いたしました。そこには、志を同じくする全国の仲間が集まってくれました。私たちは大きな感動に包まれました。

今回このような大きな賞を受賞出来ましたのも、災害にめげずに小さなイベントを地域で催した、そのようなことが評価されたのかと、だとすれば、それは私たちだけの力ではなく、全国のネットワークを結んでいる皆さん、そして地域の小中学生や高校生、町内会の皆さんの友情や支援の力が働いてのこと、そんなふうに感じております。

今回の災害は、確かに大きなダメージを私たちに与えましたけれども、私たちはこれからも地域の人、ネットワークを結んでいる仲間、そして陰になり日向になって私を支えてくれた家族とともに、海岸での活動を続けて行こうと思っています。

皆様、本当にありがとうございました。

名取ハマボウフウの会

代表 大橋 信彦

祝賀会 乾杯のご発声

屋山でございます。

いつも政治講演をしているので、事務局の方から今日祝辞を、乾杯の音頭を取れといわれて、非常に戸惑っています。私は30年ほど記者をやって、そのあと政治評論の道に入りました。どういうわけだか講演を受けると、切りなく毎日みたいに注文が来るもので、そこでひとつ区切りをつけました。それは、警察と自衛隊からあったときには受けるわけですが、タダで良いというと、取



らないと向こうが困るというのです。例えば1万5,250円とか、そういう講演料を頂くのですが、どうして警察と自衛隊に行くかといえば、日本を支えているのは彼等だと思いうからです。障子に見立てれば、棧になる人たちがしっかりしていないと、いくら紙を張ってもきっちりした障子にならない、そういう認識で警察と自衛隊という人たちに何か役に立てばやりたいと、そう思っずとやってきました。

そうしたら、日下会長から社会貢献のこの事業に参加して貰いたいと聞いて、障子と棧、これは障子と棧を支える人たちだな、それならば何がしかお手伝いしたい、と思いました。今日、先ほど日本財団の会長、笹川陽平さんがおっしゃられたように、さすがに今日の障子と棧の人たちは本当に立派な顔をしているな、そういうふうにも思いました。ここで祝辞を述べるということを受けて良かったなと思いました。

それから、私はヨーロッパに7年ほど居て、色々な国、あの辺の国はあらかた見たり、調べたりしましたけれども、やはり、日本の国の素晴らしさというのは、向こうにいたときは、必死になって我慢して仕事をしていましたが、日本に帰ってきたら、こんなに居心地の良い国はないですね。とにかく言葉がどうのこうのいうよりも、人々が基本的に優しいですね。

この前の震災について、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授が、「震災について考えようという授業をやっていましたが、その時の結論がこの日本の人々の振る舞いは、人類の最高のモラルを示している、一つの誇りだ」と、こう言っていました。彼ら外国人から見ると、非常に規律正しい、節度ある、優しい。ああいう気持ちを、彼らも持っているんですが、上の方の人たちに限られる。騎士道なんていうのを捉える人たちは、皆持っている。しかし、日本の方は下の方まで詰まっている。本当にぎっちりそういう人たちが詰まっていて、その間にこの障子の棧の人たちがきちっと居る。そういう安定した社会なんですね。

私も大学時代に剣道をやっておりました、度胸試しはやったし、人一倍度胸はあると、こう思っていました。震災の時に電車に乗っていたのですが、電車が物凄く揺れるんですね。もうちょっとでこれは車輪が外れるなっていうほど揺れた。後ろに転がったらどうなるかと振り返って見たら、高架線の上だった。私はすぐ諦めました。こういう時に諦めがいいのは、とにかく自己満足ですが、さっぱり死ぬときは死ぬと、諦めたのですけれども、しかしその車内に乗っている誰も声も出さなくて、ただしがみついているだけでした。わたしは人一倍度胸があるつもりでいたのですが、少女までがしっかり黙っていました。

その時被害がどのくらい出るか知りませんでした、日本人で凄いなあとまずその時思いました。その後震災の様子をテレビで見ましたが、凄いなことになっているなど、しかし被災地の方々も泣き叫ぶとか、そういったことがない。これが日本なのだなあと、日本精神はたいしたものだと感嘆しました。

我々が教わった教育というのは、1945年8月15日に日本の歴史が終わって、新しい日本が始まるのだ、ということを教えられました。日教組の人たちはそういう歴史観を我々に一生懸命教えてくれましたけれども、今見る日本、東北で見たあの日本人、あれは千何百年も前から二千年近い年数ずっと経てきた日本であって、1945年というのは別に歴史の一コマということで、日本人は全然変わっていないなと思いました。そういう意味で今年は大変な悲惨なことがあった、しかし一面、日本人を、自分が思っていた日本というのはまだ存在していると、はっきりそういう自覚が持てたということが非常に喜びでありました。

今日は皆様方、この障子の棧になっていてくださる方に感謝の言葉とともに、乾杯を差し上げたいと思います。

それでは、皆様方、日本を支えてくださっている方々のために、ご健勝とご健康をお祈りして乾杯を捧げたいと思います。

どうぞご唱和頂きたいと思います。乾杯。

政治評論家
公益財団法人 社会貢献支援財団

理事 屋山太郎

祝賀会







選考手順

平成23年度第41回社会貢献者表彰

- 選考手順
- 人命救助の功績
 - 社会貢献の功績
 - 特定分野の功績（海の貢献賞）

募集告知

- 新聞、雑誌等での告知広告・記事掲載
- ダイレクトメール
- 当財団ウェブサイト

推薦者

- 個人
- 団体
- 公益財団法人 社会貢献支援財団 事務局

選考委員会

平成23年6月20日

会長による承認

平成23年9月2日

受賞者：49件

	候補	受賞
総数	187	49
人命救助	34	8
社会貢献	142	39
特定分野 (海の貢献賞)	11	2

表彰式典

平成23年11月21日

社会貢献者表彰について

社会貢献者表彰は、公益財団法人 社会貢献支援財団の中核的な事業です。内閣府、総務省、外務省、文部科学省、厚生労働省、国土交通省の後援の下、公益財団法人 日本財団の助成を受けて行われています。

目的：社会の各分野において著しい貢献をされながら、その功績が広く知られていない方たちを表彰し、その労に報いること、そしてそれによって社会貢献活動の推進と社会の進展とに寄与することです。

歴史：社会貢献者表彰は、昭和 46（1971）年の財団設立以来、毎年行われています。

対象：平成 23 年度現在、表彰の対象となる功績は、次の 3 つの部門です。

<人命救助の功績>

- 海難・水難、交通事故、遭難等に際し、身命の危険を冒して救助・救援に尽くされた功績
- 犯罪等の発生に際し、身命の危険を冒してその解決に協力された功績
- 災害・事故・犯罪の発生を未然に防いだ功績

<社会貢献の功績>

- 精神的・肉体的に著しい苦勞、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- 困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
- 先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績

<特定分野の功績>

「海の貢献賞」

- 海の安全確保、環境保護、汚染防止等に尽くされた功績
- 海に関わる産業分野において
傑出した技能による同分野への貢献と技能の伝承に尽くされた功績
優れた発明・考案・改良等により同分野の発展に尽くされた功績
- 海に関わる文化の発展・保存・伝承等に貢献された功績

候補者資格：社会貢献によって顕著な功績を上げながら、社会的に報われる機会の少ない方。年齢・職業・性別・信条・国籍などの制限はありません。また、同一または同種の功績による受賞者でなければ何回でも候補者となることができます。ただし、候補となった功績と同一または同種の功績により、既に国の栄典（叙勲、褒章）または大臣表彰を受賞されている方は、後順位となります。

選考：学識経験者で構成されている表彰選考委員会が、寄せられた推薦の功績内容を審査のうえ候補者を選考します。選考委員会の選考結果は財団の会長により承認され、最大で50件の受賞者が決定します。選考の過程は公表されません。

表彰：表彰は年1回行われます。受賞者には、表彰状と副賞として日本財団賞（賞金50万円）および記念品が贈られます。また、その功績は記録集（本冊子）としてまとめられ、全国の都道府県立図書館等に贈られます。

表彰選考委員プロフィール



塩川 正十郎

選考委員長

Mr. Masajuro Shiokawa

元財務大臣

Former Minister of Finance

1921 年生まれ

学校法人 東洋大学総長ほか

著書：「佳き凡人をめざせ」「ある凡人の告白」ほか多数



内館 牧子

Ms. Makiko Uchidate

脚本家

Playwright

1948 年生まれ

東京都教育委員会 教育委員ほか

脚本：「ひらり」「てやんでえッ!」「私の青空」「毛利元就」ほか多数



大武 健一郎

Mr. Kenichiro Otake

大塚ホールディングス株式会社 代表取締役副会長

Otsuka Holdings CO.,LTD.Vice Chairman,Representative Director

1946 年生まれ

関西大学客員教授ほか

著書：「平成の税・財政の歩みと21世紀の国家戦略」

「税財政の本道一国のかたちを見すえて」ほか多数



山根基世

Ms. Motoyo Yamane

元 NHK アナウンサー
Former NHK Announcer
1948 年生まれ

著書：「これで解決！好感度を上げる話し方」「いま子どもが危ない」
「ことばで『私』を育てる」ほか多数



吉永みち子

Ms. Michiko Yoshinaga

ノンフィクション作家
Nonfiction Author
1950 年生まれ

著書：「気がつけば騎手の女房」「性同一性障害」
「26の生きざま」ほか多数



米長邦雄

Mr. Kunio Yonenaga

公益社団法人 日本将棋連盟 会長
Chairman of The Japan Shogi Association
1943 年生まれ

著書：「人間における勝負の研究」「人生一手の違い」
「幸せになる教育」ほか多数

平成23年度 社会貢献者表彰受賞者の索引

人命救助の功績

野村 純	32
リチャード・ハウエル	34
立本 敬三	36
徳野 孔人・清水 裕一	38
小寺 悠太・田中 久美子・三上 美紀	40
松倉 昌昭	42
武末 慎	44
吉田 秋一	46

社会貢献の功績

澤田 正一	50
京都中国料理厨师会 琢磨会	52
茂木 幹央	54
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター	56
NPO 法人 六星 ウイズ	58
笹島診療所	60
バーバラ・ホーガン	62
特定非営利活動法人 あかねグループ	64
徳田 安子	66
のわみ相談所	68
石崎 克雄	70
竹内 健二	72
前田 延英	74
武内 幸次郎	76
高橋 秀治	78
日明リサイクル工房	80
高山 良二	82

片桐 昭吾・片桐 和子	84
富永 幸子	86
吉田 愛一郎・吉田 千鶴	88
特定非営利活動法人 ACE	90
特定非営利活動法人 エクアドルの子どものための友人の会	92
日・タイ親善交流グループ	94
根岸 美智子	96
阿部 春代	98
黒川 妙子	100
呉山 良雄	102
野口 義弘	104
伊集 盛元	106
ジョゼリア・ロンガット	108
松本 雅美	110
中山 眞理子	112
特定非営利活動法人 3keys	114
牟田 昭一郎	116
岡田 博勝	118
あじ朗志組	120
NPO 法人 印旛野菜いかだの会	122
中川 一郎	124
佐藤 初女	126

特定分野の功績

海の貢献賞

日本カブトガニを守る会	130
名取ハマボウフウの会	132

人命救助の功績

副賞／日本財団賞(賞金 50 万)

- 海難・水難、交通事故、遭難等に際し、身命の危険を冒して救助・救援に尽くされた功績
- 犯罪等の発生に際し、身命の危険を冒してその解決に協力された功績
- 災害・事故・犯罪の発生を未然に防いだ功績



野村 純

-----032



松倉 昌昭

-----042



リチャード・ハウエル

-----034



武末 慎

-----044



立本 敬三

-----036



吉田 秋一

-----046



徳野 孔人

-----038



清水 裕一

-----038



小寺 悠太

-----040



田中 久美子

-----040



三上 美紀

-----040

の む ら じ ゅ ん
野村 純



46 歳 / 大阪府高槻市

平成 22 年 6 月 27 日午前 10 時 25 分頃、通りかかった高槻市の芥川で、溺れている 3 人の児童を目撃。川に入り流されてきた男児（6）と水面から手を伸ばしていた男児（2）を右手に、水面から顔を出していた女児（8）を左手に抱えながら、通行人 2 人の協力を得て、無事 3 人を救助した。普段 30cm ほどの深さの川は当日は豪雨の影響で 120cm まで増水し、児童らは 150m 程流されていた。

◇ 推薦者 / 公益財団法人 社会貢献支援財団

当日、飲食店に勤務している私は、買い出しを終え、店に向かう途中、芥川の河川敷をミニバイクで走行していました。

前夜の豪雨で増水していた川を横目に走っていると、おーいという男性の声、バイクを止めてよく見ると、濁流に頭のような物が三つ浮かんだり沈んだりしていました。

とっさに「溺れている、やばい」と思い、堤防を駆け下りて、着の身着のまま川に飛び込み、まず一人男の子を抱き上げました。「泣いている、よかった生きている」そう思った瞬間、「もう一人、おらへん」きょろきょろした時、手がでてきて、それをしっかりつかんで抱きかかえ、岸に向かおうと思いましたが、もう一人女の子が流れてくる、間に合わないと思い直して、二人を抱いたまま女の子が流れているのを待ち、なんとか三人を抱き上げることが出来ました。

流れが強く足が動かなくなりましたが、なんとか岸までたどり着き、釣り人に三人の子どもを渡しました。

連絡があったのか、救急車が来ていて、子どもたちも、少し水を飲んでいるけれど大丈夫、と救急隊の人が言っていたので安心しましたが、自分は足が震えていたのを記憶しています。

啾嗟の行動でしたが、幼い姉弟を助けることが出来て本当に良かったと思いました。

この度は大変名誉ある賞を頂きありがとうございます。その場に居たら誰でもしたであろう行動が、幼い三人の姉弟を救う事につながりました。自分も三人の子の親なので、なによりも、ただよかったと思うだけです。

今回頂いた賞を自身の誇りとして過ごして行きたいと思います。

春褒章消防庁伝達式 ▶



▼ 紅綬褒章を受賞



▲ 高槻市市長と



▲ 2010年7月8日 読売新聞

Jun Nomura (Age 46 / Takatsuki City, Osaka)

At around 10:25 a.m. on June 27, 2010, while passing along the Akuta River in Takatsuki, Mr. Nomura saw three children drowning. With his right hand he grabbed a boy (6) who had been swept away by the current and a boy (2) who was reaching out from the water, and with his left hand he took a girl (8) whose face was sticking out of the water, and, enlisting the cooperation of two passers-by, he saved the three children. Ordinarily the depth of the river is about 30 cm, but on this day, due to torrential rains, it had increased to 120 cm. The children had been swept about 150 meters down the river by the current.

Nominator: Foundation for Encouragement of Social Contribution

リチャード・ハウエル



26歳 / アメリカ合衆国

平成22年9月12日午後1時頃、沖縄県読谷村の波平海岸を散歩中、沖で児童を抱えながら助けを求める男性を発見。着衣のまま海に飛び込み児童とパニック状態の男性を岸まで救助した。児童は、意識がなく呼吸が微弱だったが、人工呼吸を施し、意識を回復した。手当をするうちに救急車が到着、後日搬送された病院からの連絡により、児童の命が救われたと伝えられた。当時ハウエル氏は、在沖縄米空軍の兵長であった。

◇推薦者 / 在沖縄米空軍 第18航空団 第961航空空中管制中隊

私たち家族にとって、それは読谷村の浜辺で過ごす、ごく普通の午後だった。海の方から大声が聞こえるまでは。はじめ私は、誰か他の人に話しているのだろうとその日本語の声を聞き流していたが、ふとそこにいるのは自分たちだけということに気付いた。

声のする方に近づくと、男性が（海で）片手を振って助けを求め、もう一方の腕で男の子を抱えているのが見えた。私は二人がなんらかのトラブルにあってることを知り、すぐ海に飛び込み助けに向かった。男性のそばへ行くと、少年の状態が深刻であることがわかった。

男の子はぐったりとしていて、口のまわりに泡がついていた。男性は、少年の背中をこぶしですっと叩きながら何か叫んでいた。おそらく「死ぬな！」と言っていたのだろう。私は男性と一緒に少年を岸に連れ戻しながら、救急訓練を思い出した。

岸へ泳ぎ着いたとき、少年を仰向けに寝かせて、すぐにABC救急処置、Airway エアウェイ（気道確保）、Breathing ブリージング（呼吸）、Circulation サーキュレーション（循環）を開始したけれど、全く反応がみられなかった。しかし耳を少年の胸元にあててみると、非常に浅いながらも呼吸をしていることがわかった。専門的な医療知識はなかったが、私は最後にCPR（心肺蘇生法）を試みようと思った。

何度か空気を送った後、少年がより確実に呼吸をし始めていることがわかったので、私は少年の体を動かし回復体勢にした。肺からの水は吐き出さなかったものの、少年の目が瞬き始めゆっくりと意識を取り戻しつつあることがわかった。

程なく救急車が現場へ到着し、少年は病院へ搬送された。少年と救急車へ乗り込む前に、男性は私のそばに来て話しかけた。彼は私のところに来て、肩に手を置き、「ありがとう」と言っていた。

彼らが去った後、私は水辺の岩にしばらくの間座りこみ、涙をこらえながらたった今起きた出来事を振り返っていた。

その後しばらくして、私は、救助した少年と祖母から感謝の手紙を受け取った。そこには、このように書かれていた。

「わたしたちのヒーローへ 助けてくれてありがとう。あなたの助けがなかったら、孫は今ここにいなかったでしょう。この子はとても運がよかったと思います。私たちはあなたに感謝しています。どうぞ沖縄での滞在を楽しんでください。そしてこれからもよろしく。」

今回のことにより 2010 年 11 月 1 日 嘉手納署において感謝状贈呈式が行われ、比嘉友光署長より感謝状を頂いた。

「誰かが一番助けを必要としている時にそれができたことはとてもうれしい。この経験は一生忘れない」と私は思っている。

I would like to thank the FESCO foundation for choosing me for this year's award. I am truly humbled that I am thought of as being a hero, and for the recognition that I have received. I am just glad that I was there when someone needed me the most, and that I was able to help. Anyone that is placed in that situation would have done exactly as I did anything possible to help someone at their greatest time of need. Although I am not in Japan anymore, I will remember my time in Okinawa and all of the experiences that I had there.

▼ 米国海兵隊認可の機関士「大きな輪」
2011 冬号より



▼ 救助された子供の祖母からの礼状



▲ 感謝状

Richard Howell (Age 26 / United States of America)

At around 1 p.m. on September 12, 2010, while walking along Yomitan Namihira beach in Okinawa Prefecture, Mr. Howell saw a man offshore holding a child and calling for help. Fully dressed, Mr. Howell jumped into the ocean and helped the child and the panicking man to shore. The child was unconscious and barely breathing, but Mr. Howell administered artificial respiration and revived the child. While he was ministering to the child, an ambulance arrived. Subsequently he was contacted by the hospital where the child was taken, and told that he had saved the child's life. At the time he was a corporal in the U.S. Air Force, stationed in Okinawa.

Nominator: 961st Airborne Air Control Squad, 18th Wing, United States Air Force, Okinawa

立本 敬三



50歳 / 大分県豊後大野市

平成22年8月12日午後1時20分頃、豊後大野市の大野川で溪流釣りの最中に、男性が、河川内で転倒し溺れているのを目撃。流れの速い川に入り、沈んで動かなくなっていた男性を引き上げた。

男性は意識不明・呼吸停止の状態であったため、人工呼吸と心臓マッサージを施し、一命を取り留めた。

◇ 推薦者 / 財団法人 警察協会

大分県豊後大野市に流れる大野川は県内でも、鮎釣りの名所である。

私は、鮎の友釣りが趣味で夏になると釣りに出かけています。

平成22年8月12日、今日もスエットタイツを身につけ車で河原近くまで行き鮎の友釣りを始めました。

川の反対側にも釣り人が一人いましたが、2時間ぐらい釣りをしていた時、反対側の釣り人が急に竿を持ったまま泳ぎ川を下り始めました。少し泳げば岸に着くだろうと思って見ていると、急に動きが止まり流され、水面から姿が見えなくなりました。

とっさに大変だと思い川に飛び込み対岸まで40メートルぐらい泳いで渡りきり、さらに岸を走ってまた川に飛び込み、15メートルぐらい泳いだ川の中に、沈んだ人を見つけました。首根っこをつかんで顔を水面から引きあげやっとの思いで、岸に泳ぎつき、私はどうしてもこの人を助けたい思いからすぐさま人工呼吸を無我夢中でしました。

少しゲップをしたような感じがありましたが、意識は戻らなかったのもう1人では、ダメだと思い再び川を泳いで渡り、車の中の携帯電話で119番し救急車を呼びました。消防の人が来たので溺れた人の所まで行ったら、意識が戻っていたので助かったのだと思ったとたんに、足の力が抜けて私は座り込んでいました。

溺れた人は救急車で病院に運ばれて行きました。後日、溺れた人は、肺に水が入り普通は助からない事が多いと先生から伺いました。本当に助かって良かったと思いました。

人生初めての経験で自分にこんなことが出来るなんて考えてもみませんでした。警察署、消防署、市から感謝状を頂きあらためてすごいことをしたのだと思いました。救急法を学んだ成果がこのような形で一人の命を救ったかたちになりましたが二度とこんな事故には遭遇したくないものです。



◀ 救助地点



◀ 当時は水位が倍位あった

Keizo Tatsumoto (Age 50 / Bungo-Ono City, Oita Prefecture)

At around 1:20 p.m. on August 12, 2010, Mr. Tatsumoto saw a man who had fallen into Bungo-Ono City's Ono River while fishing and was drowning. Mr. Tatsumoto entered the fast-moving current and pulled out the man, who had sunk down and wasn't moving. The man was unconscious and had stopped breathing, so Mr. Tatsumoto administered artificial respiration and heart massage, snatching the man from the jaws of death.

Nominator: Japan Police Support Association



とく の よしひと 徳野 孔人

34 歳 / 北海道紋別市



しみず ゆういち 清水 裕一

32 歳 / 北海道北見市

平成 22 年 10 月 7 日 19 時 25 分頃、湧別町内に勤務する中国人の女性研修生 4 人のうち 3 人が湧別漁港の斜路で溺れた。残った 1 人が、現場近くの徳野さんと清水さんの勤務先に助けを求めた。清水さんが持って来た救命胴衣を身につけた徳野さんは、溺れている女性のところまで泳ぎ、清水さんは 119 番通報し、連携により 3 人を確保し救助した。1 人は心肺停止状態であったため二人で心肺蘇生を施し、一命を取りとめた。

◇推薦者 / 遠軽地区広域組合消防本部（全国消防長会）

徳野 孔人

平成 22 年 10 月 7 日午後 7 時過ぎでした。工事現場の責任者である私は現場作業終了後、仮設の現場事務所で書類整理や作成をしていると、すごい勢いで女性が事務所に駆け込んできました。「タスケテクダサイ！」片言の日本語だったので、中国人だと思いました。「ヒトガ、オボレテルデス！」というので、私は急いで付いて行きました。



現場に着くと、船揚げをする斜路の水際から 20m ほど沖にいった所で溺れている人がいました。私一人では無理だと思い、隣に同じく現場事務所を構えている後輩の清水君に携帯電話で応援を要請しました。私は電話しながら海に入って行くと、4～5m 行った所で急に深くなり、足場が突然無くなりました。このまましがみ付かれたら自分も溺れてしまうと感じ、一旦引き返しました。そこに後輩の清水君が到着。すぐ 119 番通報するようにお願いし、私はロープか何か必要と感じ、辺りを走り捜していると、その様子を見ていた清水君が 119 番への通報をしながらライフジャケット

を手渡してきました。仕事でよく着用するライフジャケットのことをすっかり忘れており、清水君の冷静な判断には感心しました。

もう一度海に入り、救助に向かうと、溺れているのは 3 人だと気付きました。その中の 1 人がうつぶせで浮かんでおり一番危険を感じたので、あおむけに返し、必死に片手で泳ぎました。他の 2 人はその女性に捕まっていたようで、一度に 3 人引き上げた結果になりました。

うつぶせで浮いていた女性は意識も息も無かったので、私は胸骨圧迫、清水君は気道確保をして心肺蘇生に入りました。無我夢中に 2 セットくらいやり終えると、救急車が到着。救急隊の方にバトンタッチし、かすかではあるが呼吸と脈があると聞き、少し安堵したのを覚えています。その女性は意識不明で集中治療室に入っていたようですが、結果的には意識を取り戻し元気に退院。後日、わざわざ現場事務所にお礼に来て頂きました。全員助かって本当に良かったです。

また、この出来事の 6 日前に弊社の安全衛生教育の一環として、地元消防署から普通救命講習を受講していたため、心肺蘇生術を比較的スムーズに行えたことは、私も含めて大変幸運だったと感じています。

清水 裕一

当時、私は湾岸土木工事の現場責任者であり、翌日の作業の準備を行っていました。

午後7時頃、隣の現場事務所にいる先輩である徳野さんから電話がきました。

「人が溺れている！すぐに来い！」。普段は物静かな徳野さんからの怒声にも似たその声に、ただ事では無いと察し、すぐに現場に向かいました。現場に着くとびしょ濡れになった徳野さんと沖に浮かぶ人影が見えました。

徳野さんの指示により救急連絡をし、沖のほうを確認すると「最初に目に入った人影がうつぶせであること」、「その他にもかろうじて水面から口だけ出ている人が二人いること」が確認できたので、状況を電話で伝えました。

徳野さんが再び救助に向かったのが見えたので、「このままでは全員が溺れてしまう」と思い、なにか浮輪になるものは無いか辺りを確認しました。車の中の救命胴衣が目に入り、「これを着れば溺れることは無いだろう…」と、すぐに徳野さんに投げ渡しました。

救命胴衣を着た徳野さんが、うつぶせの人を仰向けに返し、泳いで岸に向かってきました。この時、他の二人も救助されている人に捕まって一緒に岸に向かってきました。「息がない…」そう言うと徳野さんは直ぐに心臓マッサージを開始しました。

その姿を見て、ちょうど一週間前に会社の安全衛生教育で行われた普通救命講習を思い出し、直ぐに人工呼吸のための気道確保を行いました。しかし、相手の方がショック状態であったためか口を開こうとしても、ものすごい力で口を閉じようとします。

このままでは水を吐くことができないと思い、相手の首を横に曲げて、思いっきり両手で口を開きました。そうこうしている間に救急隊員の方が到着し、蘇生術を引き継ぐことができ、病院に搬送されました。

後日、三人とも無事に退院したことを伝え聞き、本当に良かったと思いました。

最後に、このような名誉ある賞を受賞できるほど、私自身はたいしたことをやっておりませんが、勇気ある行動をとった徳野先輩の救助の一助になれたことをうれしく思うとともに、この賞の受賞者であることを自負し、今後も社会に貢献できればと思っています。



▲ 救助地点



▲ 北海道通信



Yoshihito Tokuno (Age 34 / Monbetsu City, Hokkaido)

Yuichi Shimizu (Age 32 / Kitami City, Hokkaido)

At around 7:25 p.m. on October 7, 2010, three of four female Chinese trainees employed in Yubetsu Town had fallen off an embankment into the fishing harbor and were drowning. The remaining women sought help at the workplace of Mr. Tokuno and Mr. Shimizu, which was near the scene of the accident. After arriving at the scene, Mr. Tokuno put on a life jacket that Mr. Shimizu had brought and swam out to the drowning women to help them, while Mr. Shimizu called 119 (the emergency telephone number). Through their cooperation, they saved the three women. One had been in cardiac arrest, so Mr. Tokuno and Mr. Shimizu administered cardiopulmonary resuscitation, bringing her back to life.

Nominator: Engaru Fire Department (Fire Chiefs' Association of Japan)



こ で ら ゆ う た

小寺 悠太

21 歳 / 福井県福井市



た な か く み こ

田中 久美子

20 歳 / 福井県福井市



み か み み き

三上 美紀

29 歳 / 福井県福井市

平成 22 年 8 月 6 日 16 時頃、福井市鷹巣海岸で小寺さんは遊泳中に苦しそうに呼吸しながら泳ぐ男性を気にしていたところ、急に姿が見えなくなったため潜って探すと、沖合 10m 水深約 2.5m 程の海底に沈んでいるのを発見、砂浜へ引き上げた。意識と呼吸のない男性に田中さんが心肺蘇生を施したところ男性は水を吐き出し呼吸を始めた。近くにいた三上さんも救急隊到着までの間、心肺蘇生を施した。

◇推薦者 / 福井市消防局（全国消防長会）

小寺 悠太

平成 22 年 8 月 6 日、僕は鷹巣海水浴場に友人と一緒に遊びに行きました。

数時間遊泳していると、中年の男性が少し辛そうに泳いでいるところを発見しました。それから数十分間、たまに様子を伺いながら見ていたのですが、姿が見えなくなったため水中メガネをつけて、いなくなった周辺を見に行くと、海底に沈んでいるところを発見し、すぐに潜って引き上げ、砂浜まで運びました。

男性には全く意識はなく、顔色も青白くて、もう手遅れの状態かと思いました。

「誰か助けて！」と叫んでいると、若い女性が来て心肺蘇生をしてくれて、男性は少し息を吹き返しました。

その後、救急車が来て運ばれて行きました。

後日その男性が助かったと聞いてすごく嬉しく思いました。もう少し気付くのが遅かったら、助ける事ができなかったと思います。

今後とも人のために出来る事があれば、率先してやっていきたいと思いました。また立派な人間になるために毎日を大切に生きていきたいと思っています。

田中 久美子

海で遊泳していたら、小寺君が「たすけて！」と叫びながら顔が真っ青な人を担いで、砂浜まで引き上げてきました。

何が起こったのだろうと、私も海から出て、駆け寄りました。すると、呼びかけても返事もなく、呼吸もしていませんでしたので、心臓マッサージを無我夢中で行いました。

そして 30 秒ほど後に口から水を吹き返しました。その後三上さんも合流して声を掛け合い

ながら交互に心臓マッサージを行いました。その後呼吸もはじめ、救急車が到着しました。

その場では意識もうろうとされていましたが、見ず知らずの3人で、1人の方の命を救うことができよかったです。看護学生で曖昧であったけれど知識はあったので実施することができました。このような行動に移せたのも、日ごろの先生方のご指導があったからだと思います。先生方に感謝したいです。

この経験を、これからの人生に活かしていきたいと思っています。

三上 美紀

私がこの出来事に遭遇したのは、友達と海水浴場へ遊びに行った時の事でした。

夕方になり、そろそろ帰ろうと片付けを済ませ、海を眺めていました。

すると、浪打ち際にいた人達が、騒ぎ出したので気になって駆け付けてみると、小寺さんが溺れていた男性を担ぎ、海から上がってきたところでした。

男性は心肺停止状態だったので、私は気道確保、田中さんは心臓マッサージ、途中交代しながら救命措置を行いました、

無我夢中だったのでどれくらいの時間が経過したのかわかりませんが、水を吐き出し脈拍が確認できたと同時に救急隊が到着し、搬送されました。

後日、後遺症もなく無事退院されたと聞き、本当によかったと思いました。

まさか自分がこのような出来事に遭遇するなんて思ってもなく、貴重な経験をさせてもらいました。そしてこの度、社会貢献者として表彰して頂き、大変光栄に思います。



▲ 高巣海水浴場

◀ 現場写真

Yuta Kodera (Age 21 / Fukui City, Fukui Prefecture)

Kumiko Tanaka (Age 20 / Fukui City, Fukui Prefecture)

Miki Mikami (Age 29 / Fukui City, Fukui Prefecture)

At around 4 p.m. on August 6, 2010, Mr.Kodera, swimming at Takasu Beach in Fukui City, noticed a man swimming who seemed to be having trouble breathing. Suddenly the man disappeared from view. Believing the man had sunk down into the water, Mr.Kodera went to look for him. He found him about 10 meters from shore, at a depth of about 2.5 meters, and pulled him up and to the beach. The man had lost consciousness. Ms.Tanaka administered cardiopulmonary resuscitation to him, whereupon he vomited out water and began to breathe. Ms.Mikami, who was nearby, also administered cardiopulmonary resuscitation until the ambulance arrived.

Nominator: Fukui City Fire Department (Fire Chiefs' Association of Japan)

松倉 昌昭



44 歳 / 東京都新宿区

平成 22 年 6 月 19 日午後 11 時 38 分頃、東京メトロ有楽町線の千川駅ホーム後方で電車を待っていたところ、右側にいた女性がバランスを崩して線路内に転落するのを目撃、電車が入線してくるにも関わらず線路に飛び降り、女性を退避溝に引き込んで救出した。電車は直後に入線してきたが、迅速な判断と行動により女性は一命を取りとめた。

◇ 推薦者 / 財団法人 警察協会



▲ 千川駅ホーム



▲ 転落地点

平成 22 年 6 月 19 日、友人の所から帰宅時に東京メトロ千川駅にて、進行方向 9 両目にて電車待ちをしている時、電車が来ますのアナウンス後、ふらふらと歩く女性に気づき「電車が来るのに危ないな」と思った瞬間、頭からホームへ転落。5 メートル位離れて居た自分が駆けつけ、女性の状態を確認後、直ぐに線路に飛び降りました。意識がないので先ず体を動かすスペースの確保の為、バックを移動し、線路に掛かっていた下半身を線路脇に移動。抱きかかえ退避溝に移動しようとするも動かず、引きずれば怪我が悪化する恐れもあり、電車の構造が頭をよぎり一気に引き込む決断をした直後に、電車の警笛！「今だ」と退避溝に引き込んだ 1～2 秒後に電車が目前を通過。間一髪と感ずるも直ぐに駆けつけた ATS を押した男性から「大丈夫か？」の声を掛けられ両手が塞がって居た為、救急車を要請し怪我の状態を伝え救助を待ちました。車両間から救出後、ホーム上で ATS を押した男性と駅員とで介抱しました。女性の怪我の状態は芳しくなかったのですが、回復しよくなりました。

振り返り感じたのは、人を助けた事も、両親を初め様々な人達が自分を支えて頂いたお陰で、生きている事にありがたい感謝をしている毎日です。支えて頂いた方々にこの受賞を捧げます。

振り返り感じたのは、人を助けた事も、両親を初め様々な人達が自分を支えて頂いたお陰で、生きている事にありがたい感謝をしている毎日です。支えて頂いた方々にこの受賞を捧げます。



▲ 女性がこのあたりから現れた

十九日午後十一時四十分ごろ、東京都豊島区要町の東京メトロ有楽町線千川駅の到着直前にホームから線路に転落した。会社員男性(画)が線路に下り、女性をホーム下のすき間に引き込んだ。女性は落下の際に左側頭部を打撲し二週間のけがを負ったが、命に別条ないという。

ホーム転落 女性を救出

警視庁目白署や東京メトロによると、女性は同駅一
番線ホーム上でふらつき、一・三以下の線路に転落。直後に新木場行き電車(十両編成)が駅に近づいた。運転士は女性に気付いて急ブレーキを掛けたが、女性の転落地点を六十七号行き過ぎて停車した。

同駅ホームは線路のある面から柱で支える構造で、ホームの下に人が入れる空間があるという。池袋消防署は、男性に感謝状を贈ることを検討している。

有楽町線千川駅 42歳男性 直後電車

▲ 東京新聞 平成 22 年 6 月 21 日

Masaaki Matsukura (Age 44 / Shinjuku-ku, Tokyo)

At around 11:38 a.m. on June 19, 2010, Mr. Matsukura, while waiting for a train at the back of the platform of the Tokyo Metro Yurakucho Line in Senkawa, saw a woman to his right lose her balance and fall onto the tracks. Despite the fact that a train was coming, he jumped down onto the tracks and pulled the woman into a sheltered channel and saved her. The train arrived immediately afterwards. Through Mr. Matsukura's quick thinking and action, the woman was snatched from the jaws of death.

Nominator: Japan Police Support Association



38歳 / 埼玉県さいたま市

平成22年6月6日午後2時頃、台東区 JR 鶯谷駅山手線のホームで、向かい側のホームから目の不自由な男性（34）が線路に転落しているのを目撃。線路に降りて走り寄り、倒れている男性を抱え上げ、ホーム上の通行人と協力して救出した。男性が車椅子に収容されたのを見届けた後、振り返ると転落場所の近くに列車が停止していた。男性は左足を骨折したが一命を取りとめた。

◇推薦者 / 公益財団法人 社会貢献支援財団

平成22年6月6日、JR 鶯谷駅で子供2人と私の3人で電車を待っていると、後ろでものすごい音がしたので、振り返ってみると、線路上に男性が倒れており、山手線外回りのホーム上では、旅行客と思いき方々が「列車非常停止警報装置」を必死で押している様子と、白い杖が目に入りました。

そこで私は転落した方は目が不自由で、ホームから線路に転落した衝撃で、方向感覚も分からなくなっているに違いないので、助け出そうと決心しました。山手線内回りホーム上から、電車が駅に接近していないのを確認し、子供にはホームで待っているように言い渡し、線路上へ入りました。山手線外回り線路に入った私は、転落した方を持ち上げ、ホーム上の方々に引き上げてもらい、転落者の荷物と思われる散乱物をホーム上に拾い上げて、私もホーム上の方々に引き上げてもらいました。



駅員さんに現場まで来てもらい、転落した方が足を痛がっていたため、車椅子を持って来られたので、転落者をホーム上の方々全員で協力して車椅子に乗せ、荷物の確認をした後、後の処理を駅員さんに託しました。

転落者の救助中に子供2人の様子を見てくださっていた女性にお礼を述べて、家路に着きました。

その後の報道で、転落された方が足を骨折していた事を知りましたが、手術が成功したとの報もあり、とても良かったと思っています。



▲ 救助現場



▲ 産経新聞 平成 22 年 6 月 18 日

Makoto Takesue (Age 38 / Midori-ku, Saitama City, Saitama Prefecture)

At around 2 p.m. on June 6, 2010, Mr. Takemae, standing on the platform of the Uguisudani Station of the JR Yamanote Line in Taito-ku, Tokyo, saw a sight-impaired man (34) on the platform across the tracks fall onto the tracks. Mr. Takemae jumped down onto the tracks, ran to the fallen man, lifted him up and saved him with the help of a person on the platform. After making sure that the man was seated in his wheelchair, Mr. Takemae looked and saw that a train had stopped near where the man had fallen. The man had broken his left leg, but his life was saved.

Nominator: Foundation for Encouragement of Social Contribution



68歳 / 北海道恵庭市

平成23年2月26日14時15分頃、自らが所有し居住するアパートで、2階の住人から警報器が作動しているという報告と、1階の部屋から煙が出ていることを聞きつけ、すぐにその部屋に入り、怯えて動けない男児（5）を玄関で救出。その後黒煙が充満する部屋に再び入り、足にしがみついていた女児（1）を発見し救出した。自身は気管支や顔、網膜に火傷を負い入院となったが、幼児たちは怪我もなく無事だった。

◇推薦者 / 恵庭市消防本部（全国消防長会）

2年前に心筋梗塞を患ってペースメーカーを入れており、リハビリのため自宅できつろいでいた。平成23年2月26日、14時過ぎアパート（恵実ハイツ）2階の住人親子から1階、2階の火災警報器が鳴っていると連絡を受けた。妻と外に出て、住人と妻と3人で各部屋を見て回っているとアパート横を通りがかりの方が、道路



側一階部屋の換気孔から煙が出ていると知らされ、1階101号室玄関前に行くと、玄関のドアが10cmほど開き、5歳の男児がドアの隙間から顔を出し、すぐに閉め部屋に入ってしまった。ドアの隙間からは黒煙が出ており、私は玄関を開け男の子を追いかけて抱き上げ、妻に手渡しして部屋に戻り、1歳の女の子を探したが、黒煙と炎で周りが見えず手探りでフローリングを一周回り、内側ドアの辺りで柔らかいものが膝に当たり、小さな手が膝にしがみついてきた。

私は、「子どもだ」と思い抱き上げた。子どもは泣くわけでもなく、ビックリしていた。

子どもを妻に手渡し、もう一度中に入った。人がいないか確認したが、中は黒煙、炎で前が見えず息苦しく外に飛び出した。近所の人心配そうに、下の子の救出の時は「まだ人がいたんだ」とビックリしていたそうだ。

近所の方々の手伝いで2人の救出ができたと思う。その後消防車、救急車が来て消火により鎮火、2人の子どもは救急隊の人が病院に連れて下さった。火傷、怪我もなく安心した。

私は救急車で病院へ。顔、目、耳、手に火傷を負った。目の中は白くなり、周りが見えず、顔と耳からリン



▲1才の女児がいた所

パ液が流れ落ちていたようだ。

ICU 室で 3 日間治療し、煙を吸い込んだせいかわ、ICU にいる間、咳、タンが出て辛い 3 日間だった。2 週間ほど入院し、退院後火災にあった部屋を見たが、火災の恐ろしさを実感した。

ライターによる事故などで、小さな命が亡くなっているの、大人や喫煙者は十分気を付け、点火しやすい物は子どもの手が届かない所に置いてほしい。

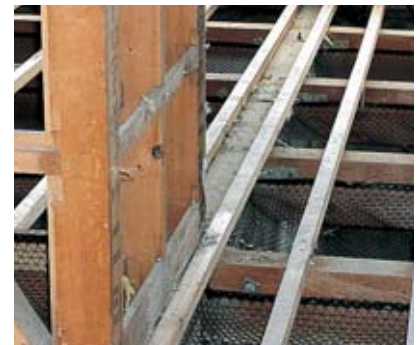
2 人の子どもを救出できたことは大変嬉しい。

将来ある宝物の子どもが無事で安心した。



▲ 吉田秋一さん

▼ 1 階の出火地点



Shuichi Yoshida (Age 68 / Eniwa City, Hokkaido)

At around 2:15 p.m. on February 26, 2011, Mr. Yoshida, in the apartment building that he owns and lives in, was notified by a second-floor tenant that an alarm had gone off and smoke was issuing from a first-floor room. Mr. Yoshida immediately went to the room and rescued a boy (5) in the entryway who was frightened and couldn't move. Afterwards he went back into the room, now filled with black smoke, and rescued a girl (1) who, upon seeing him, clung to his leg. He suffered burns to his bronchial tubes, face and retinas, and ended up being hospitalized for 19 days. But the children were safe and unharmed.

Nominator: Eniwa City Fire Department (Fire Chiefs' Association of Japan)

社会貢献の功績

副賞／日本財団賞(賞金 50 万)

- 精神的・肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- 困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
- 先駆性、独自性、模範性を備えた活動により、社会に尽くされた功績

 澤田 正一 ----- 050	 高橋 秀治 ----- 078	 呉山 良雄 ----- 102
 京都中国料理厨師会 琢磨会 ----- 052	 日明リサイクル工房 ----- 080	 野口 義弘 ----- 104
 茂木 幹央 ----- 054	 高山 良二 ----- 082	 伊集 盛元 ----- 106
 社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター ----- 056	 片桐 昭吾 ----- 084	 ジョゼリア・ロンガット ----- 108
 NPO 法人 六星 ウイズ ----- 058	 片桐 和子 ----- 084	 松本 雅美 ----- 110
 笹島診療所 ----- 060	 富永 幸子 ----- 086	 中山 真理子 ----- 112
 バーバラ・ホーガン ----- 062	 吉田 愛一郎 ----- 088	 特定非営利活動法人 3keys ----- 114
 特定非営利活動法人 あかねグループ ----- 064	 吉田 千鶴 ----- 088	 牟田 昭一郎 ----- 116
 徳田 安子 ----- 066	 特定非営利活動法人 ACE ----- 090	 岡田 博勝 ----- 118
 のわみ相談所 ----- 068	 特定非営利活動法人 エクアドルの子どものための友人の会 ----- 092	 あじ朗志組 ----- 120
 石崎 克雄 ----- 070	 日・タイ 親善交流グループ ----- 094	 NPO 法人 印旛野菜いかだの会 ----- 122
 竹内 健二 ----- 072	 根岸 美智子 ----- 096	 中川 一郎 ----- 124
 前田 延英 ----- 074	 阿部 春代 ----- 098	 佐藤 初女 ----- 126
 武内 幸次郎 ----- 076	 黒川 妙子 ----- 100	



49歳 / 大分県大分市

自身も児童養護施設で育った経験を持つ。会社勤めの後施設の職員になった。施設の子どもたちに卒業後もサポートの必要性を感じ、平成16年に私財を投じて、自立援助ホーム「ふきのとう」を設立。夫妻とスタッフやボランティアで定員6名の里親型ホームを運営し、帰る所のない15～20歳の青少年の就職の相談、金銭や健康管理などの自立に向け援助をしている。自身が孤児で厳しい環境に置かれ、苦勞して保育士や社会福祉士の資格を得て、NPOを運営し社会貢献活動に従事する姿は若者の手本となり、励ましとなっている。

◇推薦者 / 特定非営利活動法人 病気の子ども支援ネット遊びのボランティア
坂上 和子

このたびは社会貢献支援財団より、栄えある賞を頂き感謝を申し上げます。

自立援助ホームの歴史は、今から50年前に国の補助金も無い頃から、熱意ある先人たちの苦勞の末に築き上げられてきました。

私が、自立援助ホーム「ふきのとう」を開設したのは平成16年9月でした。この7年間で、支援をしてきた児童数は延べ27人になります。ホームに入居してくる大半の子どもたちは、高校を中退したり、非行を重ねたりしてどこにも居場所がない子どもたちばかりです。

その背景には家庭内の虐待や配偶者への暴力、貧困などの深刻な問題が浮かんできます。児童養護施設職員だった頃の私は、心に深い傷を負ったまま社会の荒波に押し出され、人生のどん底に転落してゆく子どもたちを見過ごしながら、とても心が痛みました。

そしてなんとかしてこの子どもたちを救いたい、と願っていました。そのときに私は福祉施設内だけではなく、地域で青少年を育てる必要性を実感しました。社会福祉士資格取得後、志を共にした仲間と自立援助ホーム開設に向けて勉強会をスタート。関東の自立援助ホームを見学したり、セミナーに参加したりしましたが、ホームに適した物件が見つかりませんでした。半ば諦めかけていたところ、4年後に運よく最適な物件が見つかりました。本当にそのときは、嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいでした。

妻の協力を得て私は児童養護施設を退職し、里親型の自立援助ホームを開設しましたが、軌道に乗るまでは経営が火の車でした。当初は子どもたちの食材を買うためのお金が十分に無く、期限切れの食品をもらうために、お店を回ったこともありました。

現在はNPOの会員数も増えて寄付も集まるようになり、少し安定するようになりました。とはいえ問題を抱えた子どもの支援には、昼夜を問わずに関わりが必要

になり、スタッフの心労も限界に達することが少なからずあります。大人への不信感から、身近な大人への憎悪や愛情を求める試し行為は日常茶飯事です。自傷行為、自殺障望やうつ病を患った若者。自立へはほど遠いようですが、しかしそんな青少年であっても私たち大人が、愛情を持って根気よく接してゆけば、いつか癒され変わってゆくものと信じています。

現在男女6名の子どもたちと笑いあり、涙あり、怒ったり、お互いに許し合ったりしながら、寝食を共にした生活で自立をめざしています。今後は今までご支援くださった皆様方の感謝のお気持ちを大切に、この受賞でさらに精進してまいりたいと思っております。



▲ 地域の人との福祉講話会



▲ 夏のキャンプ



▲ クリスマス プロ野球選手との交流会



▲ 妻（寮母）と玄関にて



▲ 中庭でのバーベキュー

Shoichi Sawada (Age 49 /Oita City, Oita Prefecture)

Mr.Sawada grew up in an orphanage, and after working at a company, he became a staff member at such a facility. Believing that the children from orphanages also need support following graduation from school, in 2004 he invested his own money to establish Fukinoto, a home that helps such children to become independent. He, his wife, a paid staff and volunteers operate this foster parent-type of home with a capacity of six residents. They provide young people aged 15-20 with vocational counseling, guidance about financial and health management, and other forms of support for becoming independent. As an orphan Mr.Sawada was placed in a severe environment and suffered. He went on to obtain credentials as a nursery school teacher and a social worker and operate an NPO. As someone engaged in social contribution activities, he has become an example and an encouragement to young people.

Nominator: Kazuko Sakaue, Volunteers'Network for Play Activities Supporting Sick Children

京都中国料理厨师会 琢磨会



会長
楊 正武

京都市京都市下京区

京都市内の中国料理調理師の有志 20 名により、会員相互の親睦と、調理師の社会的地位の向上と福祉活動を目的に昭和 57 年に設立。京都を中心に全国 21 府県の老人施設や児童養護施設で中国料理を提供する調理奉仕活動を実施。年 30 回から 40 回の奉仕活動を 29 年間継続して実施し、平成 23 年 7 月現在、通算 982 回を数える。

◇推薦者 / 京都児童養護施設長会 会長 樋口 文昭

「美味しいね、ありがとう。」の言葉と笑顔に感謝して！

1982 年に調理師仲間と会を作ることになり、「ただの親睦の飲み会だけではダメだ。何か社会に役立つことをしよう」ということになり、そこで自分達の持てる技術を活かして、調理奉仕をすることになりました。

第 1 回目は、6 月 22 日に亀岡市の児童養護施設で行うことになり、受ける方も調理する方も初めてで、戸惑うこともありましたが、帰り際に子供達から「美味しかったよ、又来て作ってほしい。」と笑顔で、玄関先までみんなで送って頂いたことが、今迄続けられた要員の一つだと思います。

子供達は皆平等との思いから、他の施設でも中華料理を味わってもらいたいと思うようになり、定期的に京都市内・府下十一カ所、滋賀県一カ所、神戸市一カ所、姫路市一カ所の児童養護施設と老人ホーム一カ所、二カ所の視覚障害者施設など、場所を変え、料理・味付けも変えながら年間約 40 回近く活動し、あれから 29 年間一度の中断もなく、今年 9 月 21 日で 985 回目を無事終えることが出来ました。心より有り難く感謝しております。

最初の頃は、材料を積み忘れ、慌てて取りに帰り、食事時間ぎりぎりになったことや、献立が変更になったことなど、また中華鍋・包丁等を忘れ、施設の器具で調理したことも今となっては良い思い出になっています。

阪神淡路大震災の時は、芦屋の避難所を始めに、神戸の児童養護施設へ毎月延べ十カ所に中華料理のフルコースをプレゼントに出かけました。朝早く材料とコンロや器具も積み込み、毎月復興工事で通行止めの道路を迂回して、料理を作り京都に帰るときがしばしば深夜になることもありましたが、子供達の笑顔で疲れることはありませんでした。今年三月の東日本大震災では、私達の活動で未だ子供達の笑顔を見ることは出来ていません。

又、十六年前から三月に京都府・市、滋賀県の児童養護施設児を対象として「中学卒業を祝い、中国料理を楽しむ会」に招待し、コース料理をお祝いしています。

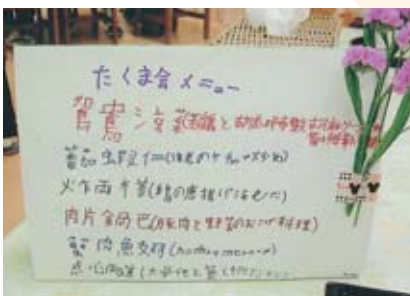
宮沢賢治の言葉に「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

とあります。この言葉を大切に今迄の調理奉仕活動を継続し、二十一府県まで活動できた全国の児童養護施設（特に東北地方）の子供達に、少しでも多く中国料理をプレゼント出来ればと思っています。

この度の社会貢献者表彰授賞に浴し、ご縁の有りました皆様様に心より感謝申し上げ、息子と仲間とで中国料理の調理奉仕活動を続け、多くの人々の幸せを自分達の喜びと出来ますように、素晴らしい出会いを求め、一層の努力を積み重ねて行きたいと思っております。



◀ 調理スタッフと



▲ 美味しそうに料理を頂く老人ホームの方と

Kyoto Association of Chefs of Chinese Cuisine: Takumakai (Shimogyo-ku, Kyoto)

This volunteer organization was established in 1982, by 20 chefs of Chinese cuisine in Kyoto, for purposes of promoting amity among the members, improving the social standing of chefs, and conducting welfare activities. It carries out volunteer activities whereby it provides Chinese food to senior citizen facilities and children's institutions in Kyoto Prefecture and 20 other prefectures nationwide. It has been conducting these activities 30-40 times a year for 29 years. As of July 2011 it had carried them out a total of 982 times.

Nominator: Fumiaki Higuchi, Chairman, Kyoto Association of Directors of Children's Institutions

茂木 幹央



75 歳 / 埼玉県深谷市

3歳で失明し盲学校卒業後、苦勞の末点字受験により大学に入学。卒業後、国立東京視力障害センターに勤務。その後、自身の働きかけと自治体や団体等の協力により、盲老人施設のない埼玉県に初めて「養護老人ホームひとみ園」を昭和54年に完成させ、社会福祉法人日本失明者協会を組織し理事長となる。以来35年、盲人の就労施設や身体障害者のためのケアホームなど9種の社会福祉事業を営み、利用者245名と職員133名を擁し地域福祉を支えるとともに雇用促進を図っている。

◇推薦者 / 川野 楠己

私の施設作り

私は昭和11年に、埼玉県大里郡藤沢村（現在の深谷市）に農家の長男として生まれましたが、3歳の時に麻疹（はしか）が原因で両眼とも失明し、以後七十数年間を全盲者として生きてきました。

小・中・高は盲学校で過ごし、大学は目の見える人達が行く一般大学を卒業しました。

大学を卒業して、国立施設の教官をしていた頃の事です。昭和50年9月の点字新聞で、関東地区1都6県の中で盲老人ホームが無いのは埼玉県だけである、という記事を読んだのです。

その事がきっかけとなり、私は出身地の深谷市に盲老人ホームを作る活動を始めたのです。土地は父から農地を借り、施設建設資金は百円募金を展開しました。

ところが、百円といえども中々集まらず、運動を止めようと思った事もありましたが、やがて運動が実を結び、更には各種諸団体から補助金をいただく事ができて、昭和54年4月から埼玉県に於いて初めての盲人の為の老人ホームであります「養護盲老人ホームひとみ園」を発足させる事ができたのです。

現在は、ひとみ園の他に、特別養護老人ホームむさし愛光園・むさし愛光園ショートステイ・むさし愛光園デイサービスセンター・むさし愛光園居宅介護支援センター・ケアホームむさし静光園・盲人ホームあさひ園などを設置経営しております。

今後は、養護盲老人ホームひとみ園の入所定員を100名から120名にする為の増築園舎を建設する事。18歳以上の視力障害者の生活の場としてのケアホームを建設する事。18歳以上の重度視力障害者が働く場としての盲人ホームあさひ園の増築園舎を建設する事等を目標として活動してまいります。

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団様より表彰していただき、誠に有難い次第であります。



▲ 日盲社協会館落成式



▲ 新園舎竣工式 園長挨拶



▲ 第 27 回埼玉県盲人福祉大会



▲ 第 59 回全国盲人福祉施設大会



▲ ひとみ園



▲ 施設の概観

Mikio Mogi (Age 75 / Fukaya City, Saitama Prefecture)

Mr. Mogi lost his sight at three. After graduating from a high school for the visually handicapped, he entered college by passing the difficult Braille entrance exam. After graduating from college, he went to work at the National Rehabilitation Center for the Visually Handicapped in Tokyo. After that, based on his own initiative and through the cooperation of municipalities and other organizations, he completed, in 1979, the Hitomi-en Nursing Home for the Elderly, Saitama Prefecture's first facility for visually handicapped seniors, and also organized the National Council of Agencies for the Welfare of the Blind and became its director. In the 32 years since then, he has operated nine types of social welfare programs, including work facilities for the blind and care homes for the elderly. These services currently have a total of 245 users and 133 staff members. In addition to supporting community welfare, they promote employment.

Nominator: Kusumi Kawano

社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター

東京都杉並区



理事長
高橋 実

視覚障害者のための大学の門戸開放、学習支援や卒業後の就労促進を主な目的として昭和62年に結成し、25年にわたる活動をしている。奨学生制度の創設、運営を担い、教科書や学術書の点訳も行う。また、点訳者養成の講座を毎年開催し、正確な点訳を迅速に盲学生に届ける仕組みを発展させた。300人を越える奨学生を支援、弁護士や官公庁や有力企業などに、視覚障害者を多く送り出した。社会福祉法人認可後、就労訓練施設を開設。平成14年までに地方公務員や民間企業に29人を送り出している。

◇推薦者 / 樽松 武男

当センターのルーツは60年以上も前の1951年にあります。1949年「盲人の大学進学」が認められたことから、51年、当事者で「大学の門戸拡大」「学習環境の整備」「卒業後の職域開拓」などを目的に、日本盲大学生会を組織しました。門戸開放後7年間は毎年2、30人の進学者がいましたが、就職先が飽和状態になり「盲大学生よどこへ行く」とか「大学は出たけれど」と揶揄されたりするほど就職浪人が増えたことで進学者は激減し、私が卒業した58年、同会は自然消滅しました。私も浪人2年後の60年、待望の毎日新聞点字毎日の記者としてやっと職業自立できました。

諸先輩のひたむきな熱意で開いた大学の門を当事者が閉じてしまうようなことや、学習環境の整備・職域開拓も当事者が声を上げ、社会の理解と支援を得るとともに行動しなければ進展はない、という思いから、61年7月、仲間呼び掛け、大阪に27人が集まって日本盲大学生会の目的を踏襲するとともに、新たに「社会啓発書の出版と講演会や集会の開催」などを加え、文月会を立ち上げました。強固な全国組織にするため、62年名古屋、63年東京で話し合いを重ね、64年京都で「文月会」を愛称に「日本盲人福祉研究会」と改名しました。その前年に月刊『視覚障害—その研究と情報』（現在は6媒体）を創刊しました。

学習即実践を合い言葉に、各種集会や講演会・大会、並行して社会の理解と支援を広げるために国会請願署名を全国的に5回行いました。そのうちの1回はこの種の請願では例をみないといわれた衆参両院本会議で全会一致採択されました。法的に効力はありませんが、立法・行政・社会の認識が深まり、職域開拓や門戸拡大では成果を上げることができました。

職域では71年、東京都職員採用で福祉職Cという点字受験枠が作られ、2人が合格したのを皮切りに、地方公務員・教員や司法試験などでも点字受験が認められるようになりました。91年、国家公務員の点字受験が認められたのをピークに、公的試験への点字導入が広がりました。また大学も少子化と時代の趨勢で進学がスムーズになりました。

一方、会の発足20周年と国際障害者年を迎えた81年を境に、活動の広がりとの会の躍進

を図るためには、私宅に置いている事務所を含め、東京に拠点を作ることや、会の安定を図るために法人取得が急務だという会内外の声に答え、準備に入りました。たまたま 86 年 7 月私の定年退職を機に「東京で課題と取り組んでほしい」という会の意向と、私自身活動の集大成もという思いが重なり、上京しました。

86 年 4 月から、これまた日本初の「盲大生点訳介助事業」を富士（現・みずほ）福祉助成財団が創設して、その運営を委託したいという申し入れも、センター開設に拍車がかかり、その点訳者養成の必要に迫られ、年末から「専門点訳者実践養成講座」を開講しました。

87 年 7 月、杉並で民家の 2 階を借り受け、現センターの前身、日本初の「盲学生情報センター」の看板を掲げ、96 年 11 月、社会福祉法人の認可を受けました。

2003 年、若い視覚障害者の職業自立と社会貢献を願っての「チャレンジ賞」（男性）、「サフラン賞」（女性）の創設。東京メソニック協会が創設した単年度の「盲大生点訳介助事業」の受託。04 年若い視覚障害音楽家社会参加促進事業なども含め、教育・職業・福祉・文化の分野で歴史に残る成果を取っています。

手前味噌めいたことですが、私たちの生活文字である点字の資質向上と普及を図る目的で「点字技能師制度」を提案し、2000 年からスタートして、11 回で 244 人が取得者です。センターは晴盲に関係なく、その資格取得を目指すことを職員採用の条件にし、現在 6 人が取得者で、これも広がって欲しいものです。

これら 60 年余にわたる私たちの取り組みを評価してくださり「社会貢献者表彰」をいただけることになりました。これからも皆さまのご期待に反しないよう、職員が一致して歩んで参ります。



▲ チャレンジ賞・サフラン賞の贈呈式



▲ 主催しているコンサートで挨拶



▲ 点字の広報

General Support Center for the Visually Handicapped (Suginami-ku, Tokyo)

This organization was formed in 1987, mainly to open the doors of universities to the visually handicapped and support them in learning and in securing employment following graduation; it has now been conducting such activities for 25 years. It has also established and operates a scholarship system and translates textbooks and academic books into Braille. Moreover, it holds classes for training Braille translators each year and has otherwise developed a system for promptly providing visually handicapped students with accurate Braille translations. It supports over 300 scholarship students, and has placed numerous visually handicapped people in positions at law firms, government agencies, prominent companies and elsewhere. After being licensed as a social welfare corporation, it established a job training facility which, by 2002, had supplied 29 people for positions in local government and private companies.

Nominator: Takeo Kurematsu

NPO 法人 六星 ウイズ

静岡県浜松市東区



代表
斯波 千秋

平成8年に浜松市半田町に視覚障害者中心の小規模授産所を開設。平成18年には市内の蛸塚（しじみづか）にも開設。現在両作業所合わせて48人の利用者と職員11人が作業に励んでいる。白杖の開発製造と点字印刷の作業を通し、視覚障害者の生活の質の向上や自立を促進してきた。また中途視覚障害者の社会復帰や盲重複障害者の社会参加を支援するとともに平成15年には、スリランカに支所を開設するなど活動を広げている。

◇推薦者 / 社会福祉法人 国際視覚障害者援護協会

WITH・みんなと一緒に

今回の受賞は、開設以来、毎日白い杖一本でまたは盲導犬と共に、電車・バスに乗り命賭けで通う仲間達そして彼等を見守り、作業を支え、現場で共に汗を流す職場へのご褒美と感謝致します。また全国の約500人ものウイズを支える会の皆さん、県内外で同じ志を持ち障害者作業所を運営する仲間達へのエールでもあります。私達は胸を張り「ありがとう！」と言います。そして明日からまた歩きます。

1996年、小規模授産所ウイズが浜松市郊外に誕生しました。当時大規模施設に入れない障害のある人達の仕事の間、居場所としての小規模作業所が全国に4,000ヶ所ありました。その殆どが国の支援（給付）の無い無認可施設で「小さくて貧乏」が旗印でした。4,000ヶ所の中に視覚障害者を対象とする作業所はありませんでした。重い障害に関わる人達も、「視覚障害者は生産活動はできない！」と決め付けていたのです。

また、視障者の生活環境にはいくつもの難問がありました。障害者の高齢化とその親の高齢化、中途失明者の急増、盲重複障害者の増加と重度化、そして盲学校後の受け入れ施設の希少さ、視障者の就労問題等々。そして世界的な「施設福祉から地域福祉へ」の大きな流れ。私達の浜松での小さな一歩が各地に広がり、全国の視障者に生産の喜びと安心の居場所が増えるきっかけになることを期待し、あえて前例のない苦しい活動をスタートしたのです。「仕事をしたい思いと工夫と練習、そして少しの手伝いがあれば皆仕事ができ、社会参加、貢献できる！」の強い意志で小さなウイズは前進しています。

この考え方が海外の障害者支援をする団体から認められ、開所前から、アジア・太平洋・アフリカからの視覚障害者の留学生を受け入れ、ウイズの理念を伝えてきました。'03年には、スリランカの盲学校の要請を受けウイズランチを現地に建設。'07年には、ミャンマーへ白杖づくりの技術と白杖歩行の指導法伝授に行き、高い評価を受けています。

ウイズの活動が少しずつ各地に伝わり、沼津市、豊橋市、鹿児島市などでも、視

覚障害者の小さな作業所ができ活発な活動を展開、'10年には浜松市の住宅街に第2ウイズを開設、中途視障者と高齢の視障者の作業所として、また視覚障害リハビリテーションの拠点として新しい福祉を作る牽引役となっています。今回の受賞を機に初心を忘れず、地道な活動を続け、視覚障害者のあらゆる人生のステージに対応する福祉を充実させると共に、地域福祉の核となり活動を広める決意です。

感謝



▲ みんなで白杖づくり



▲ 白杖歩行訓練



▲ 中学生にガイドの訓練



▲ ウイズ中心に地域のお祭



▲ ウイズの仲間全員でハイキング

Rokusei (6 Stars) With (Higashi-ku, Hamamatsu City, Shizuoka Prefecture)

In 1996 this NPO established a small-scale vocational center, mainly for the visually impaired, in Handa-cho, Hamamatsu City. In 2006 it established another workshop in the Shijimizuka area of the city. At the two workshops, a total of 48 workers and 11 staff engage in the work of developing and manufacturing white canes and Braille printing, thereby improving the quality of life and promoting the independence of the visually impaired workers. Moreover, Rokusei With supports both the social reintegration of people who become visually impaired in mid-life and the participation in society by people who have both visual and other handicaps. In 2003 it opened a branch in Sri Lanka, expanding the field of its activities.

Nominator: International Association for the Visually Impaired

笹島診療所



森 亮太

愛知県名古屋市昭和区

昭和 60 年名古屋市に、失業し病気で困窮している高齢者や日雇労働者などを支援していた人たちが、医療支援の強化をするために設立し、26 年にわたり活動している。炊き出し会場での医療・生活相談活動のほか、ボランティア医師・歯科医師とともに無料診察と生活健康相談や生活保護申請の同行支援などのホームレスの支援活動を行っている。また、ホームレス問題に対する市民の理解と協力を図るためセミナーやホームページを通じて啓蒙活動も行っている。

◇推薦者 / 森 亮太

1985 年、失業や病気で困っている高齢者、日雇労働者などを支援していた者が、医療面からの支援を強化するために笹島診療所を設立しました。現在は、野宿者（ホームレス）に対して生活保護制度が適切に運用されるよう、要求する運動も行っています。炊き出し会場での相談活動、事務所での相談活動、福祉事務所での生活保護申請同行などの活動を通じて、『野宿者の人権を守りつつ、野宿をしなくてもすむ状況を作っていくこと』を目指して活動に取り組んできました。特に政治的なバックはなく、全国の心ある人々の支援とボランティアによって診療所活動は支えられてきました。

当団体は、笹島労働者会館に入居する笹島日雇い労働者組合とともに機関紙を発行し、合同で全国の有志からカンパを募っています。近年、リーマンショックを端に始まった現在の不況の中、セーフティーネットからあふれ野宿生活を余儀なくされている方々を支える、笹島診療所は貧困社会日本に大きな社会貢献をしていると考えます。

特に①反貧困ネットワークへの参画：全国各地の諸団体による、野宿者排除や生活保護制度改悪などの動きに対する反対運動に賛同するなどの取り組みを行いました。②居宅生活に移行した人へのフォローの充実：支援して新規入居者ができた当事者を対象としたアパート訪問の取り組みを行うこと、「居宅生活の手引き」の作成作業を進めています。③行政との協力関係の構築：メンバーが福祉事務所職員の自主的な学習会に呼ばれて講演を行うことができた。福祉事務所でのカウンター越しの対立を越え、一定の緊張関係は保ちつつも時には協力関係を取り結ぶことができるような取り組みができたようになってきました。

今回、この社会貢献者表彰を受賞することで、更に多くの方々に私たちの活動を知っていただき、皆で支えあい住みやすい社会になれるよう、今後も活動を続けていきます。

① 炊き出し時生活・医療相談

毎週木曜日に、矢場町ゲートボール場で生活・医療相談を行った。年間の相談者数は計 417 名（うち医療相談が 342 名、生活相談が 92 名）だった。

② 福祉行動

生活保障支援の会・名古屋が連日行っている中村福祉事務所での支援活動に診療所メンバーも入り組む形で実施した。中村福祉事務所における住居のない人からの相談者数は一日平均で毎月 50 名を下回り、2011 年 3 月は 29.5 名であった。

⑤ 日曜無料診察 & 生活・健康相談

原則として第 4 日曜日の午前、市内の公園等に出かけて診察・相談活動を行った。2010 年度は 11 回実施した。医師在の時には医師に電話連絡をとり、薬を処方する遠隔医療体制をとることもあった。

⑦ アパート生活者支援

食事会・交流会の開催を毎月、ニュース「オーブ」の発行を隔月、あゆみの会へのオブザーバー参加を月に 1 回行った。毎回 10 ～ 15 名程度の参加があった。

⑧ 年末年始活動

12 月 23 日に越冬事前セミナーを行い、多くの参加を得た。12 / 28 ～ 1 / 3 の間、越冬実行委員会生活健康班としてオケラ公園での集中的な取り組みに参加をした。7 日間の相談活動において延べ相談者数は 82 名であった。昨年と異なり、最終日（1 月 3 日）の夜も相談活動を行った。



▲ オリーブ学習会



▲ オリーブ食事会



▲ 木曜相談



▲ 日曜診療



▲ 森医師

Sasashima Clinic (Showa-ku, Nagoya, Aichi Prefecture)

People who had been providing help to senior citizens, day laborers and others struggling due to unemployment and illness established the Sasashima Clinic in 1985 to strengthen the medical support being provided. The clinic has now been conducting its activities for 26 years. It provides medical treatment and conducts consultation activities at a food distribution center; and together with volunteer doctors and dentists, it also conducts activities for the homeless, such as providing them with free medical examinations and life and health consultation, and accompanying and helping them to apply for welfare benefits. To get the citizenry to understand and cooperate regarding problems of the homeless, it also conducts educational activities through seminars and its website.

Nominator: Ryota Mori

バーバラ・ホーガン



77歳 / 東京都新宿区

ボストン出身の米国人シスターであり看護師として奉仕していたが、1962年27歳の時に修道会により派遣され来日、翌年から聖母病院に勤務。日本の看護師資格も取得。海外からの移住労働者や難民の受診者が多い同病院で看護師としての仕事の他、通訳や事務手続き、バザーを開催し支払困難な患者の治療代を負担したり、亡くなった患者の葬儀の手配までもするなど奉仕活動は48年に及んでいる。

◇推薦者 / エフゲニー・アクショーノフ

私が聖母病院で働き始めてから、今年で48年になります。長い間、外国人の患者さんのために奉仕してきました。1990年までは、病棟で、外国で病気にかかり不安になっている患者さんたちの身体的・精神的なケアにあたりました。

そして、日本に外国人労働者が増え始めた1991年からは、外来で働くようになり、外国人労働者たちの、身体的・精神的な問題ばかりでなく、彼らを取り巻く経済的・社会的な問題にもかかわるようになってきました。日本の労働力の不足を補うために雇われた外国人労働者たちは、自国に比べれば高額な賃金を手にすることはできましたが、家族から離れ、言葉も習慣も異なる外国で長時間の労働により、多くのストレスがたまり、病気になる人も多かったようです。

しかし、日本語もできず、日本の習慣もわからないために、病院にかかることを躊躇する人が大勢いました。その上、ほとんどは、日本の健康保険や労災にも加入していないために、医療費の心配もありました。外国人の中で、聖母病院に行けば通訳のサービスもあり、外国人だといって差別を受けることもなく心配なく診察を受けることができるというロコミが広がり、かなりの遠方からも通院してくるようになりました。

病院では、受付の申し込み、問診票なども、英語・スペイン語・フランス語・ポルトガル語で準備し、またドクターの診察には通訳をし、検査等にも付き添い、最後は服薬の説明をします。また結核やHIVのような場合には、専門病院まで、付き添っていくこともありました。

外国人の患者さんが治療を受けやすいようにいろいろな奉仕をしてきましたが、一番大きな問題は経済的な問題です。夫婦で来日している外国人労働者も多く、出産の費用など莫大な額になります。そのために、いろいろな工夫をしてきました。東京都からの補助が少しはありますが、バザーをたびたび開いたり、個人的な寄付を募ったり、また修道会からの援助を願って、医療費の払えない患者さんのために資金集めをしています。非常に困難な状態が続いています。

そして最近、非正規滞在者の数が減り、難民申請者の患者さんの数が増えてき

ました。それに伴い、医療の問題ばかりでなく、住居、食糧もないという人も増え、支援の枠を広げる必要が出てきましたが、やはり経済的な問題が障害になっています。

今回、このような栄えある賞をいただき、身に余る光栄でございます。私としては、聖母病院の理念に従って、ただすべきことを精一杯果たしたに過ぎません。これからも、いただいた賞に恥じることはないように、外国人患者さんたちのために奉仕を続けていく所存でございます。



▲ 診察時に通訳をする



▲ 治療代を払えない患者のため、資金を集めるバザーを開催



▲ 薬の説明やアドバイスをする様子



Barbara Hogan (Shinjuku-ku, Tokyo)

Ms.Hogan is an American sister born in Boston. She was serving the public as a nurse when, in 1962, at the age of 27, she was sent by her religious order to Japan. The following year, she began working at the International Catholic Hospital. She obtained a Japanese nursing license. In addition to her work at the hospital, where the patients include many migrant workers and refugees, she has continued for 48 years to provide volunteer services, such as interpreting, clerical work, holding bazaars, paying the medical bills of indigent patients, and even making funeral arrangements for patients who pass away.

Nominator: Evgeny Aksyonov

特定非営利活動法人 あかねグループ



理事長
武田 美江子

宮城県仙台市若林区

仙台市で昭和 57 年に主婦の社会参加を図る場として 10 名で発足し、29 年にわたり活動をしている。老人介護の社会化と、ヘルパー制度を発足させ活動を開始。独居老人の食生活の偏りに気付き、配食活動へ移行した。会員 89 人とボランティア 29 名により一日 230 人程に昼と夜の配食をしている。

3 月 11 日の東日本大震災により、グループの厨房も被害を受けたが、翌日には会員や利用者の安否を確認し、16 日からは通常通り配食を行うなど高齢者が、住み慣れた地域で、暮し続けられる地域づくりを目標に活動を続けている。

◇推薦者 / 公益財団法人 社会貢献支援財団



あかねグループは、主婦たちの自己実現の場として、1982 年仙台市若林区に発足した。

活動の基本は「いつまでも住み慣れた地域（在宅）で暮らし続けるための支え合い」である。そのために必要な配食事業、介護保険訪問介護事業、サポート（助け合い）活動、サロン（喫茶ルーム）活動、高齢者ふれあいサロン、そしてケアプランセンターの開設…と少しずつ活動の幅を広げ、一人をさまざまな角度からサポートできる体制を作ってきた。自分たちの得意分野を生かし、地域とつながりながら来年で 30 周年という息の長い活動を続けている。

活動のきっかけは、発足 1 周年に開催したシンポジウムで訴えられた「嫁の立場での老いの看取りの過酷さに衝撃を受けたことだった。老人介護を社会化したいと願い、独居高齢者宅に出向いてのヘルパー活動の中で次々と「なすべきこと」を発見した。

あかねグループの代名詞ともなっている「あかね弁当」は、高齢者への配食活動として 1984 年に始まった。ヘルパー先で見た「モヤシ一皿」

の寂しい食卓風景に「せめてイモの煮ころがしとハウレンソウのゴマ和えを届けたい」と強く感じたのが原動力だった。鍋釜をかき集め、台所を改造し、試食を重ねて月 2 回 17 食からスタートした配食活動は、27 年を経て年 362 日 1 日平均 154

食を届けるまでになった。

しかし食数が増えても「モヤシー皿」の精神は生きている。バランスがよく低栄養に陥らない健康メニューは、高齢者が食べやすく飽きのこない家庭的な味わいを心がける。一日に作る弁当の約半数は健康状態や好みに合わせ食材の大きさ・硬さや味の濃淡を工夫したきめ細やかな個別対応弁当。旬の食材を生かし折々の行事や季節感を盛り込んだ献立、会員が自分の言葉で綴る「お便り」には、食事時の寂しさを癒し単調になりがちな暮らしを彩るようという願いが込められ好評である。そして安否確認と声かけをしながらの配達には、カーボランティアとしてシニアの男性ボランティアも多く関わっており、地域の絆を結ぶ活動として定着している。



東日本大震災が発生したその日にも「利用者さんが不安の中で待っているかも」とお弁当を届けた。ライフラインが停止した時期にも、出来る限り工夫して訪問介護と配食は続けていた。今、復興への道のりの遠さを痛感しながらも、私たちの地道な活動をいつも通りに利用者さんへとお届けするこが、地域と共に成長してきたあかねグループの願いである。



◀ ライフラインが止まった時、一斗缶に炭火を起こし、大鍋で煮炊きをしました。あかね事務所ガレージにて。(左)

◀ 利用者さんや道行く人へ豚汁をふるまいました。(右)

Akane Group (Wakabayashi-ku, Sendai, Miyagi Prefecture)

In 1982, in Sendai, this NPO was started by 10 people as a place for promoting social participation by housewives. It has now continued to conduct its activities for 29 years. Seeking to establish elder-care as a socially provided service, it launched a helper system and began related activities. Noticing that the diets of seniors who live alone frequently lack balance, it switched its focus to delivering wholesome meals to seniors. Its 89 members and 29 volunteers now deliver lunch and dinner to about 230 people each day.

The Group's kitchen was damaged by the Great East Japan Earthquake of March 11, but on the following day the Group sought to confirm the safety of its members and users, and on March 16 it again began delivering meals as usual. In this and other ways, it has continued to conduct activities aimed at creating a city where seniors can continue to live.

Nominator: Foundation for Encouragement of Social Contribution

とく だ やす こ
徳田 安子



78歳 / 岡山県倉敷市

倉敷市立万寿小学校の通学路に立ち、児童の交通安全とともに気持ちの良い挨拶や児童の様子を見て適切な声掛けをしている。また困っている児童の相談に乗り、宿題の手伝いや参観日には親代わりに出席、家族に代わって修学旅行の小遣いをを持たせるなど、母親代わりともいえる親身な世話をしている。20年以上にわたり学校と児童の家庭とをつなぐ役割を果たし、児童を見守り続けている。

◇推薦者 / 倉敷市立万寿小学校（倉敷市教育委員会）

この度、万寿小学校の校長先生から、突然の社会貢献者表彰候補に推薦のお話を頂き、このような大きな賞をいただきことに大変な戸惑いと驚きを感じながら辞退も考えましたが、温かいご厚意をお受けすることにいたしました。

私を支えて下さった方々に、感謝の気持ちで一杯でございます。

思えば早や二十数年、主人と共に定年退職後、第二の人生を迎え、息子夫婦の手助けをと孫を育てることに専念して参りました。この孫達が小学校へ入学することがきっかけとなってボランティアが始まりました。

グループごとの登校ですが、上級生がなかなか下級生の面倒をみる事が出来ないのを見かねて不安になり、登校を見守りながら、次第に子ども達に手を差し伸べるようになりました。

不安な気持ちの一年生、取り残されて泣く子、親の慌ただしい出勤に併せて引っ張られてくる子、朝食を食べていない子、色々ありました。でも、根気よく子どもや親から話を聞くことで、理解をして頂きながら、私も有難い思いで、みんなを見守ることが出来ました。

児童の中には色々な家庭があります。子どもは正直です。中には自分から苦しい胸の内を話してくれる子もいるので、よく話を聞いてやり私なりにアドバイスをし、学校の近くまで送ることもしばしばで、手を振って笑顔で走って行く後ろ姿にほっと胸を撫で下した事も度々ありました。

登校拒否の子には、無理矢理背中を押すのではなく、根気と時間がかかりますが、笑顔がでるようになるまで待ってやると、自ら進んで学校に行くようになります。

また、修学旅行、卒業式だけは、小学校最後の思い出として、是非みんなと一緒に参加して欲しいという私の気持ちが強く、思いが叶った時は我が子のように嬉しかったものです。

これからも、万寿小学校の教訓にある「ますの子、たらの子、にしんの子」のように、強く逞しく元気に成長していく子ども達から、エネルギーをもらい、そして私を支えてくれた家族、何よりも亡き主人のこれまでの協力に感謝の気持ちを忘れること

なく、微力ながら地域社会のために活動を続けていきたいと思っています。
ありがとうございました。



▲ 登下校を見守る徳田さん



▲ おはようございます!!



▲ 万寿小学校



▲ 歩道橋の下で見守り



▲ 気を付けて行ってらっしゃい!

Yasuko Tokuda (Age 78 / Kurashiki City, Okayama Prefecture)

Ms. Tokuda stands on a road used for commuting to Kurashiki Municipal Masu Elementary School and enforces traffic safety for the children, pleasantly greets them, watches over them, and speaks to them as appropriate. She also kindly takes care of the children as a sort of mother substitute. For example, she talks with children who are having problems, helps children with their homework, takes the place of parents who cannot come to school on Parents' Day, and provides children with spending money for school excursions on behalf of the parents. For over 20 years she has fulfilled the role of linking the school with the children's families and continued to watch over the children.

Nominator: Kurashiki Municipal Masu Elementary School (Kurashiki Municipal Board of Education)

のわみ相談所^{そうだんじょ}



代表
三輪 憲功

愛知県一宮市

平成10年に設立され、同12年に名古屋市南区でホームレス、生活困窮者、社会的弱者の自立支援施設を作った。同19年に拠点を一宮市に移し、現在男性シェルターを2カ所、女性シェルターを2カ所運営し常時30名が生活している。生活相談、就労支援、炊き出し、断酒会の実施などの支援を行っている。シェルター開所以来400人の自立支援をしてきた。今年「のわみサポートセンター」が認証され、リサイクルショップやカフェ等の利用者が運営に携わり自立へつなげる取り組みも始めている。

◇推薦者 / 特定非営利活動法人 自立と共生をめざす会 もやい

この度は、社会貢献の功績の部において、表彰して頂くことに対し、貴財団に感謝申し上げます。

活動のきっかけ～経過～現在の状況～今後の展望

私は平成7年の秋頃、公園で野宿者の方を見かけ、しばらく様子を見ていましたが、誰も声をかけないので、見るに見かねて声をかけ、お世話をしました。翌日福祉課に連絡し、保護を要請しました。その人はその後、無事、故郷に帰る事ができました。このことがきっかけになり、その後も野宿者の方を見かけると、声をかけて、自分にできる支援をしてきました。

平成9年には名古屋市平和公園一帯で、野宿者の方の実態調査を行い、古着の配布、おにぎりの提供、散髪、ソフトボール大会など交流会を行うようになりました。平成10年には、ブラジル人の炊き出しグループと共同して「のわみ相談所」を設立し、野宿者の方の支援、外国人の相談を本格的に行うようになりました。

平成12年に、名古屋市南区にホームレス自立支援の為のシェルターを開設しました。外国人相談も年間1000件近くにのぼり、外国人の人権擁護の為に、「のわみ相談所・在日外国人の人権を守る会」を立ち上げました。

平成15年に、稲沢市に事務所とシェルターを移転した後も、名古屋市内で炊き出しを継続しました。

平成18年からは、一宮市でも野宿者支援活動をすすめる中で、脱却後の自助組織「救生の会」を設立し、毎月2回学習会を開催することになり、今年の11月に100回を迎える事ができました。

平成19年に、一宮市に事務所とシェルターを移転し、一宮市を拠点に外国人相談と野宿者・生活困窮者支援を行うに至りました。

平成20年には、女子シェルターを開設し、現在女子シェルター2ヶ所、男子シェルター2ヶ所を運営しています。

また平成 23 年には、「NPO 法人のわみサポートセンター」を設立し、便利屋事業、お弁当事業、カフェレストラン・リサイクルショップなどを運営し、雇用の創出を行っています。野宿者の方や生活困窮者の方が活動や運営に携わり、生活費を少しでも得る事ができるようになりました。

このように、年々活動と支援の輪が広がり、協力者や協力団体が増えていきました。これからの活動の目標として、今までの活動を継続し、将来的には共同基地の建設などをすすめ、野宿者の方や生活困窮者の方が孤立せず、助け合って生きていけるような、温かい社会を作るため、努力して行きたいと思っています。



▲ のわみ相談所



▲ 卒業生からの差し入れ



▲ 事務所内



▲ 平成 22 年 一宮市民活動支援制度のプレゼンテーションで寸劇を披露

Nowami Consultation Center (Ichinomiya City, Aichi Prefecture)

The Center was established in 1998. In 2000, in Nagoya's Minami-ku, it built a facility to help the homeless, the needy and the socially vulnerable to become independent. In 2007 it moved the facility to Ichinomiya City. It currently operates two men's shelters and two women's shelters, where a total of 30 people regularly live. It provides life consultation, job assistance, distributes food, conducts alcohol abstinence meetings, and provides other kinds of support. Since opening the shelters, it has helped 400 people towards achieving independence. The Nowami Support Center was certified this year. Users of the recycle shop, café and other facilities are engaged in its operation and have also begun efforts linked to their independence.

Nominator: Non-Profit Organization: MOYAI (Independent Life Support Center)

石崎 克雄



赤銀杏会 代表

64歳 / 東京都荒川区

都内4ヵ所（新宿地区、品川地区、馬喰町地区、荒川地区）にて約68人のボランティアと共に弁当を調理し、30年にわたり路上生活者に配っている。上野公園（馬喰町地区・荒川地区が担当）では約20人のボランティアが参加している。毎朝3時に起床、調理師だった経験を生かし、100～150食分の弁当を365日作り、3回に分けて自宅と公園を往復し、園内を巡って顔見知りの人に手渡す。自らも勤務先が突然廃業し公園暮らしを余儀なくされた時期があったことから、公園で暮らす人の気持ちがよくわかり、体調は万全ではないが、これからも弁当を配り続ける予定である。

◇推薦者 / 公益財団法人 社会貢献支援財団

1981年の4月頃、新宿三丁目の居酒屋の料理長兼店長をしていた雨の朝、ホームレスが残飯桶をきれいに洗ってくれているところを見ました。

その話を民謡会のミーティングで話したところ、聞いていた民謡歌手2人が、コマ劇場に出演した後の打ち上げの会の残りもので、おにぎりや味噌汁をホームレスにだしてやりました。

その後、歌謡ショーの打ち上げがあり、今度は車を寄付してくれた演歌歌手がいました。その車を使い新宿公園のホームレスに手伝ってくれる人と共におにぎりや味噌汁を配ってやりました。

そして5年後、手伝ってくれる人の中で、上野で店を出した人から、上野公園にもホームレスがいるよ、と電話があり12月下旬から上野でホームレスのために弁当配りを始めました。会長として食材を集めることで長年苦勞し、ボランティアは募集しても集まらず、厚生労働省に掛け合いに何度も足を運びました。「おまえさんは、バカだから一生懸命やっているのだね」とある人から言われたこともあります。

ホームレスも幸せになったら義理や人情も無い世の中で、配食を受けた人の中には、ホームレスから大きな会社に入ったり、お店をやるようになった人でも町で会うとありがとうと言う人がいます。そんなことに心を打たれ今までボランティア活動をしてきました。

私自身、茨城県にある児童養護施設出身です。だから人よりも仕事もボランティアも頑張ってきたけれど、病気になり苦しい生活を送ってきました。またボランティア活動をしていても良くは思われないみたいです。例えば東日本大震災で岩手、宮城に私たちのグループが140人もボランティア活動をして、きれいにした花壇の中に入って踏み潰した小中学校もあります。私が注意したら教員は笑ってるような始末でした。

大震災での原発事故により、福島からの野菜や魚が入荷しなくなり、私は直接福島に行って確認したり、農家や漁協などへ電話しても不通の状態となりました。

このようなことから、善意の寄付によるホームレス支援の炊き出しや就職支援などに頑張ってきましたが、福島原発事故以来、茨城・福島海岸通り（国道6号、4号）沿線からの協力が無くなり、支援が大変難しい状況になりました。

炊き出し（弁当）を配った後、千葉方面へ食材集めに行き、夜11時頃に帰る時も食材はからっぽで帰ることが多いのです。茨城の友達に電話でお願いしてわずかに協力してもらったこともあり、またお金がないと八百屋も売ってくれません。

月2回支払しても二万円以上なかったら品物をよこしません。ボランティアで炊き出しをやっているからといって品物は取めてくれません。

ボランティアのよろこびは？

人間だ
だが人間だ
だれにも人間
それにしても人間
時代がちがうと
いっても人間だ
50年前人と人が
支え合って生きてきた
ああ、絆ってなに…
愛ってなに…

私も体調が万全ではないが、これからも
も弁当を配り続けるつもりです。



▲ 上野駅前公園 草とり



▲ 尾久の原公園 緑の東京募金のPR活動



▲ 文化センターで清掃活動



▲ 上野公園内の草とり



▲ ホームレスの弁当



▲ 京成上野駅の上 ボランティアの花壇の活動



▲ 上野公園2丁目 鶯谷駅前で草とり、そうじ

Katsuo Ishizaki (Age 64 / Arakawa-ku, Tokyo)

For 30 years Mr. Ishizaki and about 20 volunteers have been delivering hand-made bento meals to homeless people in Ueno Park. Every morning he gets up at 3 a.m. and, using his experience as a cook, prepares 100-150 bento meals. He then divides them into three groups and, for each group, makes a trip back and forth between his home and the park, where he goes around and hands out the meals to people with whom he has become acquainted. The place where he used to work suddenly went out of business and there was a period when he was forced to live in the park, so he well understands the feelings of the people who live there. He is not in the best of health, but he plans to continue distributing meals.

Nominator: Foundation for Encouragement of Social Contribution

竹内 健二



63歳 / 静岡県浜松市中区

昭和42年頃、会社に勤務の傍ら浜松市で最初の点字グループ「浜松六点会」に入会、平成15年退職後は点字点訳に専念し、約40年にわたり点訳奉仕を続けている。「コツは無理をしないこと。」とこれまでに2,500冊以上を県立点字図書館に寄贈している。また障害者は、旅をする機会が少ないので、旅の気分を味わって貰おうと旅行誌「旅の手帖」を点訳し喜ばれている。

◇推薦者 / 竹内 龍幸

てんじくんとけんじくん

赤とんぼ じっとしたまま 明日どうする (風天 - 渥美清)

私は点訳グループ「浜松六点会」に所属しています。この度の社会貢献者表彰の受賞は、会を代表してという事で、皆喜んでいきます。ひとりでは40余年とうてい、ここまで継続してこられる筈はありません。周りの皆さんが支えて下さったおかげです。感謝！

私が点訳を始めたきっかけは、20歳になった時です。何でも見てやろう、やってみようと思気込んでいました。その頃、市の広報で「点字活動養成講座」募集の文字に興味湧き、応募しました。受講者は43人と大盛況。

浜松は日本六点字式点字の創始者、石川倉次氏の生まれた所でもあり、点字に熱心です。点字は10回程度の講習で基本はマスター出来ますが、なにせ日本語は微妙な言い回しや、漢字を組み合わせれば新しい語が生まれるし、カタカナ、アルファベットもあって、どうやって点訳していいのかわからず、今も悩んでいます。

現在、実際に点訳しているのは、浜松六点会で6名、精鋭部隊(!)です。月刊誌「旅の手帖」を分担して点訳・校正・製本し、毎月4冊程、静岡県点字図書館に送っています。

平成23年8月17日の毎日新聞によると、「06年の厚生労働省の調査(無作為抽出)では、視覚障害者379人のうち点字が読める人は48人(12.7%)だけで、読めない人は268人(70.7%)だった」となっています。視覚障害者の多数の方が、録音して耳で聞く音訳で本を読んでいます。

たとえ点字を読む人が少なくなろうとも、必要としている人がいるのであれば、これからもコツコツ点訳していきたいと思っています。「点字」と私の名前の「健二」、声に出して読んでみるとよく似ています。今までうかつにも気づきませんでした。やっぱり“縁”があるのかなあ。



▲ 点字作業をする竹内さん

浜松市で最初の点字グループ「浜松六点半会」の代表を務め、以来30年間点訳奉仕を続けてきた。これまでに図書館や盲学校に贈った雑誌や単行本は2,500冊に上る。現在は月刊旅行誌「旅の手帖」を8人の会員が分担して手がけ、静岡市の県立点字図書館に400冊を寄贈。1カ月の点訳量は120ページにも上るが、気負いもなく、会のメンバーからの信頼も厚い。昨年11月3日の文化の日には、静岡新聞社・SBS静岡放送局から「善行賞」を六点半会代表として受賞した。

日々の生産活動をまじめに遂行する一方、プライベートの時間を30年もの長きにわたって障害者に捧げる姿勢は社員の模範たる行為であると評価された。

社長賞

★受賞テーマ
点訳本校正・製本活動と
障害者との交流(ボランティア)

M/C製造統括部 早出工場
生産1課 竹内健二

「気づいたら30年経っていた。続けられた秘訣は、会員同士励ましあったこと、無理をしないでやってきたこと、点訳は自分のためにやっているという気持ちを持ってきたこと」と竹内さん

Kenji Takeuchi (Age 63 / Naka-ku, Hamamatsu City, Shizuoka Prefecture)

In 1967, while employed at a company, Mr. Takeuchi entered Hamamatsu Rokutenkai, the first Braille group in Hamamatsu City. Since retiring in 2003, he has devoted himself to Braille translation. Over a period of about 40 years, he has continued to provide volunteer services as a Braille translator. "The trick is to be natural," he said. Until now he has donated more than 2,500 volumes to the Braille library operated by the prefecture. Since the visually handicapped have little opportunity to travel, he also translates the travel magazine, Travel Notebook, to give them a taste of the feeling of travel, and is much appreciated for it.

Nominator: Tatsuyuki Takeuchi

まえだ のぶえ
前田 延英



58歳 / 滋賀県愛知郡愛荘町

肢体不自由児施設で勤務後、老若男女が障害の有無にかかわらず一緒に暮らす任意団体で共同生活を送った。そこで出会った夫と共に、平成9年に里親登録して里子を受け入れ始めた。平成13年に滋賀県愛荘町に転居。自宅で親子4人、里親として里子5人とケアホームのホームキーパーとして障がいをもつ4人と暮らす。里子たちとの生活の中で思い浮かぶ言葉やメロディーを書き留め、これまでに100曲以上のユニークな歌を作りコンサートを開き、親子の絆を高めるなどユニークな養育里親としての活動を続けている。

◇推薦者 / 滋賀県愛知郡愛荘町 町長 村西 俊雄

ここまでのあゆみ

私達夫婦は、養育里親をしており、里子達やケアホームの障がいをもつ人達と共に生活しています、そんな生活の中で、日常の出来事、失敗、思いなどが歌として浮かぶようになりました。コンサートで子供達と一緒に歌ったり、CDや歌集を作ったりしています。

私は、長野県の肢体不自由児施設で働いていたある日、「茗荷村」の創設者である田村一二先生の講演を聞いて感銘を受けました。「茗荷村」(任意団体)は、田村一二先生の構想をもとに、自給自足の生活を基本にして、障がいの有る無しに関わらず共に暮らす所です。

滋賀県の茗荷村に移り、出会いがあって家庭をもち、障がいをもつ人達と家族として共に暮らすようになりました。一緒に暮らすようになって、長い人は25年になります。また障がいのある人達との生活が定着したあとのことですが、私達の周りには、里親をしている人達がいて、私達も里親をしたいと思うようになりました。里親登録をして里子達の受け入れを始め、いろいろな出会いがあり、愛荘町で今は5人の里子達と共に暮らしています。そのうち4人は何らかの障がいがあります。

自作の歌は記録して保存し、時々所属しているママさんコーラスの発表会で採用され、歌ってくれました。自分で歌うようになったきっかけは、8年前のことでした。父が癌になり、生きていうちに何かをしてあげたい、歌の好きな父に自作の歌を聴いてもらおうと思い、故郷の友人達に協力してもらいCDを作ることができました。そのCDの歌を聴いて父は喜んでくれました。

それがきっかけになり、再び故郷の友人達に協力してもらいながら録音して、自作のCDは増えていきました。CDのコピーやダビングは、息子たちが応援してくれました。健康診断で再検査になったのがきっかけで、自分が歌える間にもっと多くの人達に聴いてほしいと思うようになり、そして小学校で放課後にピアノを教えてくれた恩師、施設でお世話になった上司に、元気なうちに自作の歌を聴いてほし

いと願い長野で初めてのコンサートをして喜んでもらうことができました。次に滋賀でコンサートをしました。

歌を聴いて「元気が出た」「癒された」という声を聞き、少しでも人に喜んでもらえたなら有難いと思いました。一緒に出演した子供たちが、楽しそうに生き生きしている姿を見て嬉しく思いました。依頼があった時は歌わせてもらい、この頃は県の里親研修会などで時々歌わせてもらっています。

里子達との毎日は、笑ったり楽しい事もあるけれど、悩んだり行き詰る事もあります。そんな時は、周りの里親さん達に話を聞いてもらい相談しながら、また児童相談所と連絡をとりながら、乗り越える事ができました。親同士が親しくなると子供同士も安心して親しくなり、交流が深まりました。先輩里親さんから言われた「自分の子供と同じように育てればいいんだよ」というアドバイスを思い出しながら、向かい合っています。実子も良きお兄さん役になってくれて、子供達同士の育てあいの力も大きく、共に育つ大切さを感じます。子育ては親育てだと言いますが、その通りだと思います。里親の学習会で講師の方が言われた「子育て60点」を目標にしたいと思います。私達の1年ごとに年はとりますが、体力のある間は今の生活を続けたいと思います。



▲ 前田さんご夫婦

Nobue Maeda (Age 58 / Aisho Town, Aichi County, Shiga Prefecture)

After working at a facility for disabled children, Ms.Maeda lived communally in a voluntary organization where young and old, men and women, handicapped and non-handicapped lived together. In 1997, she and her husband, whom she met there, registered as foster parents and began accepting foster children. In 2001 they moved to Aisho Town in Shiga Prefecture. At their home they have two children of their own and four foster children; and as home keepers of a care home, they also live with four handicapped people. Words and melodies occur to Ms.Maeda in the course of living with the foster children, and she writes them down. She has created over 100 unique songs so far and also holds concerts. This passtime of hers strengthens the bonds between parent and child and helps to create a loving home for the foster children.

Nominator: Toshio Muranishi, Mayor, Aisho Town, Aichi County, Shiga Prefecture

武内 幸次郎



76 歳 / 宮城県宮城郡松島町

長男の罹患がきっかけとなり、35 年近く日本筋ジストロフィー協会で患者の支援に関わっている。昭和 53 年岩手県支部を結成、「岩手県方式」と呼ばれる在宅訪問検診事業を興し、同疾病患者を発掘する。その後、患者自立訓練の場である「西多賀社会訓練センター」や自立生活の場である「バリアフリーアパート」の創設メンバーとして参加、建設した。

3 月 11 日の東日本大震災で自宅が損壊したにも関わらず、患者家族の安否確認や支援物資の運搬などに奔走した。幸い患者に犠牲者はいなかったが、訓練センターが使えなくなるなど活動の停滞を余儀なくされているが、患者の支援のために活動を再開させている。

◇ 推薦者 / 社団法人 日本筋ジストロフィー協会 貝谷 久宣

◇はじめに

これまで、進行性筋ジストロフィー患者の“いきがい”や自立支援のために影となって活動してきたことが評価を受け、表彰を受けることは喜寿を迎えるにあたり満腔の喜びとするところです。

◇活動のきっかけ

1971 年夏、東北大学病院で長男（当時 5 歳）に告げられた病名は“筋ジストロフィー”治療法のない難病と知り、藁をもすがる気持ちで（社）日本筋ジストロフィー協会に入会。’73 年、患者が始めた“国立総合研究所設立署名運動”に参加、運動が実り’78 年に国立研究所が設立され、同年 2 月、花巻市で開催された協会東北ブロック会議で岩手支部設立の要請を受けました。

◇軌道に乗るまでの苦労

支部設立のために市町村の福祉事務所を尋ね、筋ジス患者を調査把握し’78 年 6 月に患者・家族 15 人が集まり岩手県支部設立、事務局長となりました。支部活動では在宅患者に“個別検診と相談指導事業”を行うべく岩手県に陳情’80 年度より実施。’83 年には西多賀病院入所患者のために日本財団より助成金を受け、“西多賀社会訓練センター憩の家”が開所。完成に至るまで自宅から西多賀病院まで 200 キロの道程を何度通ったか数え切れません。また患者の思い出作りにと“車いす希望の翼韓国旅行”や“船に乗っての金華山の旅”、“青森ねぶた車いす参加”の計画プランを作成し実行しましたが、いずれの事業もボランティアの確保と車いすトイレの有無、段差の有無を事前調査し、未整備に対しての対策に頭を痛めました。

◇現在の状況

筋ジスのデュシャンヌ型は、当時平均寿命 17 歳と云われており、長男は’83 年丁度その年齢で亡くなりました。その時「憎き筋ジスの鬼を退治するまでは協会活動

を続ける！」と誓い、筋ジス患者の“いきがいや暮らし”とは何か？“働く”とは何か？を問い続け、協会事業の訓練指導ではパソコン教室を行い、憩の家の一部を改造して生活体験の場をつくりました。また3月11日に発生した東日本大震災の際、憩の家に避難してきた4名の筋ジス患者とライフラインが復旧しない中で生活を共にしながら、会員の安否確認をしました。

◇今後の展望

憩の家の生活体験の場を発展させたバリアフリー・アパートが本年6月にオープン。入居者が安心して生活できるよう訪問介護や看護の体制は整わってはいるものの、年金だけの生活では本来の自立とは言えず“働いて”収入を得ることを課題とし、息子や孫のような筋ジス患者と共に活動しているところです。

最後に、不治の病と言われた病気は今、“患者の命の叫び”でできた国立研究所と研究者の努力が実って遺伝子治療の道筋ができ、17歳までの寿命が27歳を超え30歳以上も生き延びるようになりました。私の誓いである“憎き筋ジスの鬼を退治”するまで、今回の表彰を機に、改めて患者と共に活動を続けていく所存です。ありがとうございました。



▲ 岩手県宮古市浄土ヶ浜 筋ジス岩手県支部キャンプ



▲ 石巻市サン・ファン・パウティスタ見学



▲ 筋ジス協会東北司法本部 青森ねぶたに車イスで参加



▲ 筋ジス協会東北地方本部 車イス希望の翼 韓国の旅



▲ 西多賀 浅野忠郎宮城県知事来所(1995年)



▲ 西多賀病院筋ジス病棟 親の会クリスマス会

Kojiro Takeuchi (Age 76 / Matsushima Town, Miyagi County, Miyagi Prefecture)

Motivated by his older brother's contracting the disease, Mr. Takeuchi has been involved in helping patients at the Japan Muscular Dystrophy Association for close to 35 years. In 1978 he formed the organization's Iwate branch; he created an at-home examination program called the "Iwate Prefecture Method"; and he searches out patients suffering from this disease. Subsequently, as a founding member, he participated in the planning and construction of the West Taga Social Training Center, a place for training patients to be independent, and of the Barrier-Free Apartment, a place for independent living. Despite the fact that his home was damaged by the Great East Japan Earthquake of March 11, he ran about checking on the safety of patients and their families and delivering relief supplies. Fortunately there were no casualties among the patients, but the training center became unusable and its and other activities had to be discontinued. For the sake of the patients, he is working to resume the activities under difficult conditions.

Nominator: Masanobu Kaya, Japan Muscular Dystrophy Association



68歳 / 東京都江東区

都内の盲学校を卒業後、点字出版一筋に情熱を注いだ。「社会福祉法人ぶどうの木ロゴス点字図書館」の館長に就任し、常に点字の重要性と視覚障害者の読書の権利を守り、バリアフリーの普及に取り組む、一般社会の視覚障害者への理解を深める活動を推進している。統一されていなかった公共施設における点字表示を統一しJIS化、点字技能検定試験を開始して厚生労働省に働きかけ公的認知、点字選挙公報全文発行への実現、点字図書給付事業（活字図書と点字図書の価格差補償）の改善、「考える図書館」作りなど約48年にわたって活動を続けている。

◇推薦者 / 社会福祉法人 聖明福祉協会 本間 昭雄

この度は、私たちの手がけた小さな活動に目をかけていただき、大変恐縮しております。心から感謝申し上げます。

おそらく受賞理由として、点字選挙公報の普及による視覚障害者の選挙権保障への歩みに注目されたからではないかと推察します。であれば、これは私一人でなし得た仕事ではありませんし、多くの人々に支えられて始めてできた共同作業ですので、まずそのことを強調させていただきます。

さて、一般に国政選挙や知事選挙には、政党や立候補者の政見が記された選挙公報が公共施設の人目につくところに置かれ、また、一般家庭にも新聞折り込みで無料配布され、等しく情報が提供されます。ここには市民の政治参加を促すと同時に、「知る権利」を保障する意味があります。ところが、視覚障害者には、点字投票が有効とされていますが、ごく一部を除いて選挙公報の全文点訳は配布されていませんでした。

その理由として一般には、①選挙期間が短くて大量印刷は無理、②点訳・発送する施設がない、③点字では公報全文点訳は無理、といわれてきました。

これらの解決法はごく常識的なものでした。①②は、大小の出版施設が共同作業をする、③写真を除けば、公報の文字はすべて点訳可能、という考えの元に、全国の点字出版施設が集まり、「互いにプロジェクトを作って、日本の視覚障害者を代表する施設の中で製作・配布したらどうか」という結論を得ました。そして、平成16年の参議院選挙を皮切りに、「日本盲人福祉委員会 視覚障害者選挙情報支援プロジェクト」として、これまで5回の国政選挙を手がけてきました。平成19年の参議院選挙からテープ版、拡大文字版も加わり、各地の選挙管理委員会のご理解も得



ております。特に印象深かったのは、平成 19 年の衆議院選挙で最高裁判所の国民審査を配布したとき、視覚障害利用者から「国民審査は初めて読んだが、文章は硬いけれど、これほど面白い内容とは思わなかった」という喜びの声が寄せられました。視覚障害者は一般に情報障害者と言われますが、私たちはそのバリアの一角を崩せたのではないかと思います。

近年、国連の定めた障害者の権利条約の批准をめざして、国の関係者や当事者である障害者団体との間で検討が進められています。その一つの現われでしょうか、昨年暮れから総務省の担当課では、「選挙公報の全文発行を地方選挙にも広げ、多くの障害者に配布するように」という方向を示されました。まさに歓迎すべき事態です。

もちろん、小さなトラブルはありますが、今後とも国民の情報保障の一環として視覚障害者への情報提供の活動が更に進展するよう、皆様のご理解・ご協力をお願い申し上げます。有り難うございました。



▲ パソコンソフトで点字に変換できる



▲ 点字印刷に使用する亜鉛版



▲ 亜鉛版の間違いを直す



▲ 点字図書の印刷



▲ 点字図書

Hideharu Takahashi (Age 68 / Koto-ku, Tokyo)

After graduating from a school for the blind in Tokyo, Mr. Takahashi poured his passion into Braille publishing. He was then appointed director of the Logos Library of the Blind, of the Vine, a social welfare corporation. He has consistently promoted activities aimed at emphasizing the importance of Braille, at protecting the right of the visually handicapped to read, at advocating for a barrier-free conditions, and at deepening society's understanding of the visually handicapped. In addition, he standardized, and established JIS regulations for, the Braille signs and displays in public facilities; he initiated Braille proficiency tests and got the Ministry of Health, Labor and Welfare to officially recognize them and to publish the full text of official election documents in Braille; he improved the Braille book compensation project (compensation for the difference in price between printed books and Braille books); and he created The Thinking Library. He has been involved in these and other activities for roughly 48 years.

Nominator: Akio Honma, Seimei Welfare Association

ひ あがり とうぼう 日明リサイクル工房

福岡県北九州市小倉北区



事業所長
白石 睦也

知的障害者の保護者などでつくる、社会福祉法人北九州手をつなぐ育成会が運営する事業所の一つとして、家庭から出される空缶や空瓶といった資源ごみのリサイクル部門の一部を、工房が市から委託を受け、知的障害者の働く場所として運営している。平成6年に開所され、目標の一つに「向上心」を掲げ、フォークリフトなどの免許取得にも挑戦し、利用者35人のうち既に9人がフォークリフト、2人は重機の免許の資格を取得するなど作業する障害者と運営する工房側が一体となり、障害者の社会的自立を目指し活動している。

◇推薦者 / 公益財団法人 社会貢献支援財団

○活動の契機

日明リサイクル工房は、平成6年に開所した就労継続支援A型事業所（最低賃金以上で障害者を雇用している施設）です。社会福祉法人北九州市手をつなぐ育成会が運営し、現在は知的障害者35名を雇用しています。

業務内容として、家庭から出される、かんびん・ペットボトルのリサイクルをするための選別作業を北九州市より委託され、毎週200台以上のごみ収集車から運び込まれる130トン程度を毎日、手で選別しています。

この選別作業は、北九州市の全面的協力によるものですが、障害者本人たちは何とかその期待に応えたいと、社会人としてのプライドをもち日々仕事に取り組んでいます。さらに障害があっても社会参加したい、少しでも社会に役立つことがしたいという「挑戦」、「向上心」をもちスポーツ、文化的活動、免許取得、資格取得、ボランティア参加、国際交流等の取組を積極的に進めてきました。

○現在の状況

平成16年頃からこの取組みはスタートして現在では、フォークリフト免許取得者9名、普通免許取得者5名をはじめとする免許取得者述べ35名、ヘルパー2級3名他パソコン検定、ハングル語検定等資格取得者述べ14名にも及んでいます。その他にも、全国障害者スポーツ大会出場、市絵画展市長賞受賞、日韓当事者大会参加等障害者本人たちの「向上心」は留まるところがありません。この取組みの素晴らしいところは、自分のためだけではなく少しでも社会のために役立つことをしたいという気持ちが障害者一人一人のベースになっているところです。平成19年にISO14001を取得しマイバック、マイハシ運動等日頃から市民の一員としてエコ活動にも積極的に取り組んでいます。

昨今、QOLの改善が叫ばれていますが、障害者福祉の中においても例外ではなく生活の質、生きる喜び、地域参加等の改善が叫ばれています。日明リサイクル工房

の取組みはそれらの先駆的な活動になっていることと思います。

今回の受賞を糧にこれからも、障害者本人たち職員共に「挑戦」する気持ちを忘れずに、継続することと新しい取組みにチャレンジし地域の一員として日々充実した生活を続けていきたいと思っています。



▲ スポーツ大会入賞



▲ 缶・瓶の選別作業



▲ スポーツ大会入賞



▲ バックホウ免許取得

Hiagari Recycling Center (Kokura Kita-ku, Kitakyushu City, Fukuoka Prefecture)

This is one of the workplaces created by, among others, guardians of the mentally handicapped and run by the social welfare corporation, the Cultivation Committee for Hands Across Kitakyushu. The city subcontracted part of its recycling, of empty cans and bottles and other “resource garbage” discarded from homes, to the Center, which is operated as a place where the mentally handicapped work. It was incorporated in 1978. One of its objectives is to “raise aspirations.” As a result, of its 35 workers, nine have already obtained a forklift operator’s license and two, a heavy equipment operator’s license. In this and other ways, the handicapped who work at the Center and the people who run it have joined hands to conduct activities aimed at fostering the social independence of the handicapped.

Nominator: Foundation for Encouragement of Social Contribution

高山 良二



64歳 / カンボジア王国

平成4年から5年に自衛官としてカンボジアのPKO（国連平和維持活動）に参加。退官後、地雷処理を円滑に行うために私財を投じて、自衛隊OBと共にNPOを平成14年に設立し、不発弾処理活動を現地で立ち上げた。平成18年には、CMAC（カンボジア地雷対策センター）と共同して住民参加型地雷処理活動を立ち上げ、村人約100名を指導して年間約30～40ヘクタールの地雷原を安全な土地にした。更に、その土地で学校や道路の建設、井戸掘り事業などを村人とともに実施、子どもたちには日本語やパソコンを教えて、そのうち1名を日本の高校に留学させている。また、村で獲れるキャッサバ芋で焼酎を作り地場産業の促進を図るとともに、雇用創出のために日本企業3社の誘致を行った。NPO法人国際地雷処理・地域復興支援の会（IMCCD）を今年7月に設立させ、同国バットアンバン州で住民と共に活動している。

◇推薦者 / 大野 修一

1992年～93年にかけて、カンボジアにおける国連平和維持活動（PKO活動）に自衛官として参加しました。任務を終えプノンペン空港を離陸して、機上からカンボジアの大地を見下ろしながら、「まだ、遣り残したことがある」ような心境に駆られ、「また、必ずここに戻ってこよう」と思いました。

それから10年の歳月が経ち、2002年5月、定年退官した3日後には日本のNGOの一員としてカンボジアに向かいました。プノンペンに到着後、活動立上げの調整をカンボジア政府機関のCMACと実施していましたが、2週間ほど経ったある日、突然不安定な精神状態に陥り、すぐにでも日本に帰りたと思いました。日本に帰る決心はその時は出来ず、それ以降苦しい日々を過ごしながら活動しました。不発弾処理はまもなく開始できたものの、私の専門の地雷処理の活動が開始できる見通しは全くたちませんでした。

2004年9月、遂に精神状態が限界になり、一度帰国して精神異常を治療し、地雷処理活動が開始できる見通しを模索しようと考えました。あれほど夢にまで見たカンボジアを離れることは、辛い選択で大きな挫折感でした。

1年3ヶ月が過ぎた頃、地雷処理の活動ができるチャンスが巡ってきました。私は再びカンボジアに向かいました。そして、調査などを経て2006年5月に念願の住民参加型地雷処理活動がカンボジアのバットアンバン州で開始できたのです。

ところが、2007年1月19日、余りにも悲しすぎる事故が起こりました。対戦車地雷の爆発事故で作業していた7名の隊員が帰らぬ人になったのです。この事故は、全て私の責任ですと、遺族や村の方たちに謝罪すると共に、彼等の業績をなんとし

でも後世に伝えたいと考え、活動を継続することにしました。

そして5年が経過した現在は、学校、道路、井戸の建設、日本語教室、日本企業の誘致、地場産業、国際交流など、地域復興支援活動にも着手し、この住民参加型の活動が内外から評価されるようになりました。

そんな折の昨年暮れ、家内が突然脳腫瘍で倒れ、一時は危篤状態になり、緊急手術を受けました。辛い選択でしたが、これまで活動してきたNGOを辞める決心をし退任しました。幸い家内は手術に成功し奇跡的な生還を果たし、現在では元気な姿に戻りつつあります。

私はこれまで10年間も活動を支えて下さった方々と相談し、再びカンボジアでの活動を再開することにし、NPO法人国際地雷処理・地域復興支援の会（IMCCD）を設立し、これまでと同じカンボジア北西部のバタンバン州カムリエン郡というタイとの国境に接する地区で住民参加型の地雷処理活動と、地域復興支援の活動を続けています。

最終的な夢は、平和構築理念の啓発です。今回の受賞は、本当に有難くこれからの活動に大きな勇気を与えて下さったことに、心から感謝を申し上げる次第です。



▲ カンボジアの学校で



▲ 住民参加型地雷処理活動



▲ 不発弾処理



▲ 不発弾処理



▲ 完成した井戸

Ryoji Takayama (Age 64 / Cambodia)

From 1992 to 1993, Mr. Takayama participated, as a Self-Defence Forces official, in the UN peacekeeping operations in Cambodia. After retiring, in order to clear landmines in Cambodia effectively, he invested his own money and, together with other Self-Defence Forces retirees, founded an NPO in 2002 and began bomb disposal activities in the country. In 2006, he initiated mine-clearing operations involving civilian participation, conducting them jointly with CMAC. Leading about 100 villagers, he each year turns about 30-40 hectares of minefields into safe land. Together with the villagers he also builds schools and roads, digs wells and carries out other projects on the safe land. In addition, he teaches the children Japanese and computer use, and enabled one of the children to go to a Japanese high school as an exchange student. With the cassava grown in the villages, he produces shochu (a type of distilled spirits) and is working to promote this into a local industry. To create jobs, he has attracted three Japanese companies to the area. In June of this year, he established International Mine Clear and Community Development, an NPO, which conducts its activities jointly with residents of the Cambodian state of Battenban.

Nominator: Shuichi Ono



かたぎり しょうご
片桐 昭吾

75 歳 / 新潟県新潟市西区



かたぎり かずこ
片桐 和子

74 歳 / 新潟県新潟市西区

1998年にインドへのスタディーツアーに参加。ある駅で目にした数えきれないストリートチルドレンに衝撃を受けた。「見て見ぬ振りにはできない」という思いを強く持ち、以来、夫妻でストリートチルドレンの支援活動が続けている。03年より現地のNGOと連携し同国東部ビジャカパトナム市郊外で、子どもたちの自立に向けた「子どもの憩いの村」（宿舎、台所・食堂、職業訓練所、農園、図書館、瞑想センター、診療所 36,422㎡）を建設、09年には学校の建設も始まり、12年に開校予定している。昭吾氏は、定年後再就職先の警備会社からの給料をすべて、和子氏はバザー等により支援している。

◇推薦者 / 内田 正志

～インド・家なき子らに命と希望を～

小学校教諭を定年退職した妻・和子は、翌日の1997年4月1日、ボランティア団体を設立し、海外支援と福祉活動を、気軽に活動していくつもりでしたが、翌年の12月、二人で参加したインド・スタディーツアーが、運命を変えました。

深夜、オリッサ州の、とある駅に降り立ち、真っ暗な構内のあちこちに転がっている小さな固まりの1つに夫が躓き、それらが薄い布切れ1枚にくるまって寝ている幼い子どもたちと分かった時の驚きは、生涯忘れることができません。「見てしまった以上、放ってはおけない」と、私どもは、その後の人生を、インドのストリート・チルドレンの支援に捧げることにしたのです。

ツアーを案内してくれた現地NGOと共同で、家なき子どもたちの自立支援センター「子どもの憩いの村」建設・運営に本格的に取り組んだのは2003年1月からです。孤立無援の中での資金作りでした。夫は、警備会社に再就職し、妻は、バザーにコンサートにと東奔西走しました。その間には、夫の狭心症の治療、妻の脳梗塞、離れて暮らす娘が心を患い、引き取った幼い孫たちの養育等々、幾度か挫折の危機にさらされながらの苦難は、筆舌に尽くし難いものでした。が、少しずつ整っていく施設に、笑顔、笑顔の子どもたちを見て、「この子どもたちのために頑張ろう。」二人は、歯を食いしばって乗り越えました。

そして、2009年3月、荒野だった36,422平方メートルの広大な敷地は、宿泊棟4棟、台所と200人が一緒に食べられる大食堂、職業訓練棟2棟、瞑想堂、音楽堂、診療所、図書館、菜園・花畑・バナナプラント・牛10頭に鶏200羽のいる農園、サッカー

やバレーボールの出来るグラウンド、100 m直線トラックもある、子どもたちの暮らしを丸ごと受け入れる「楽園」となって完成しました。

現在は、敷地内に、州認可の学校を建設中で、2012年3月の落成・開校を目前に控え、ポーチには大時計が設置され、マンゴーの大樹のシンボルツリーに白く映える、校舎の全貌が現れつつあります。「教育こそが、世界の平和と幸せを築く原点」という理念の実現を目指し、100年先をも見据えた私どもの願いは、今後、このエリアを日印青少年の交流と切磋琢磨の拠点とすることです。

さらに、今、400メートルトラックを有する、世界公認の大グラウンドの建設に向け、スタートを切ったところです。ここから、将来のオリンピック選手を育成することが、私どもの究極の「夢」であり、今回の栄えある賞を推進力として、今後、一層、活動に邁進する決意を新たにいたしました。



▲ インド「子どもの憩いの村」図書館の完成を祝って（2009年3月）



▲ 「夢を追い続けよ！」と、子らの前で熱く訓示（2009年3月）



▲ 大食堂でおいしい食事に笑顔はじける（2009年3月）



▲ 新しい教室、机、椅子に目を輝かせる子どもたち（2011年8月）



▲ 新校舎ポーチの前に集まって記念撮影（2011年8月）



Shogo Katagiri (Age 75 / Nishi-ku, Niigata City, Niigata Prefecture)

Kazuko Katagiri (Age 74 / Nishi-ku, Niigata City, Niigata Prefecture)

In 1998 Mr. and Mrs. Katagiri participated in a study tour to India. At a train station they were shocked to see an almost countless number of street children, and they strongly felt that they couldn't ignore what they saw. Since then they have continued conducting activities that help street children. In 2003, in cooperation with a local NGO, they established - in a suburb of Vishapatnam, a city in the eastern part of the country - the Katagiri Centre, a children's village dedicated to promoting the independence of children. Its 36,422m² include a dormitory, kitchen, dining hall, work training center, farm, library, meditation center, and clinic. Construction of a school was begun in 2009. The school is expected to open in 2012. Shogo invests in the village his entire salary from the security company where he went to work following his compulsory retirement. Kazuko helps through running bazaars and other activities.

Nominator: Masashi Uchida

富永 幸子



67歳 / ラオス人民民主共和国

「国際協力 NGO・IV - JAPAN」を 1988 年に設立し、ラオスにおいて、「援助とは、自立できて報酬を得られるようになるまで」という考えの下、独創的な職業訓練を 17 年にわたり続けている。1994 年に小学校を建設したのをかわきりに、ピエンチャン職業訓練センターの建設、そしてソフト面でも、木工家具や理美容、調理・裁縫などの技術を中学を卒業または中退した子ども達に修得させ、これまでに 2,000 人以上の卒業生を送り出している。ラオス教育省の協力体制の元、センターを卒業するとピエンチャン都教育局より職業訓練修了証が授与される。この他農村の開発や教育インフラ整備、日本とラオスの文化交流なども事業として行っている。

◇ 推薦者 / 公益財団法人 社会貢献支援財団

何か見えない大きな力に押されてここまで来たような気がします。国際協力の道にいつのまにか入っていましたが、節々にいくつかの出来事がありました。

百科事典でサリーの着付けの写真を見て「私も着てみたい」と思い、中学 1 年生のときインド人とペンフレンドになりましたが、それが全ての始まりだったような気がします。興味は国際活動に移り、ガールスカウトに入りますが、そこで何事も実践活動・行動力が大事であるということ学びます。とくに 1980 年、タイでガールスカウトのカノック会長に巡り会い、国際協力とは何かを学べたことが、その後の私の原動力となりました。

帰国後、まず行動を起こそうと「国際ボランティアの会」IV-JAPAN を創設しました。1988 年のことです。何の後ろ盾もない無謀な試みだったのですが、活動初年度にもかかわらず 100 人もの友人が呼び掛けに応じて奨学金ドナーになってくれました。そして現在までのべ 7,300 人のタイ・ラオスの貧しい子どもたちに奨学金を支給することができました。ラオスに魅せられて活動の場をラオスに移したのは 1997 年でした。事務所のあるさいたま市にたくさんのラオス人難民がいて、祖国ラオスの支援を依頼されていました。結局、私自身がラオスに赴任したわけですが、夫との離婚はやむを得ない選択でした。

専業主婦だった私がラオスで食べていけるかどうか、最初は不安もありましたが、ラオスの人々に経済的自立をすすめる自分が自立できないとはなんと恥ずかしいことか、と自らを叱咤しました。おかげで現在まで何とか生活できています。ありがたいことです。IV-JAPAN はこの 23 年間、何度も経済的危機がありましたが、そのたびに思いがけず寄付をいただいたりして乗り切ることができるのですから、本当に不思議です。

当会の特徴は会員をはじめ、ボランティアに恵まれていることです。現在、日本

に2名、ラオスに13名の職員、タイ財団に2名の事務局ボランティアが居て、日本の開発援助（ODA）やJICAの支援をいただいて活動しています。主に職業訓練事業（縫製・理美容・調理・家具）に携わり、教育や技術のない青年たちに起業・就業の機会を与えています。卒業生の中には美容院を開業して公務員の月収の6倍を得ている成功者もありますが、自分が生きているうちに成果を見ることができて本当に幸せです。95歳の母をはじめ、支えてくれている理事、会員、多くの友人とともにいただいた賞だと思っています。



◀ 調理授業



▲ 美容師訓練



▲ 日本文化を紹介 きものファッションショー



Sachiko Tominaga (Age 67 / Laos)

Ms. Tominaga founded International Cooperation NGO・IV JAPAN in 1988. Based on the idea, “Help should last until the individual is independent and can earn a living,” this organization has been conducting unique occupational training in Laos for 17 years. It began by building an elementary school in 1994. It then built the Vientiane Occupational Training Center. On the “software” side, it trains children who graduated or dropped out from middle school in such skills as furniture building, cooking, sewing, and barbering and beautician work. So far it has turned out over 2,000 graduates. Based on the cooperative system of the Laotian Ministry of Education, Center graduates are provided with a certificate of completion by the Vientiane Board of Education. The organization also conducts projects related to developing agricultural villages, building educational infrastructure and promoting exchanges between Japan and Laos.

Nominator: Foundation for Encouragement of Social Contribution



よしだ あいichirou
吉田 愛一郎

64 歳 / 神奈川県座間市



よしだ ちづ
吉田 千鶴

86 歳 / 神奈川県座間市

アフリカとの貿易業で得た売上を、野生動物の保護に投じる活動などをしていた。1994年密猟者の銃弾に倒れたレンジャーや部族間の抗争で親を殺された子どもたちのために、ナイロビに孤児院を建て、多くの孤児や肢体不自由児を収容した。またウガンダ北部で、少年兵や慰安婦として誘拐される子どもたちを守るためにシェルターを建設し、戦争が終結するとそこに洋服を作る職業訓練校を開設するなど東アフリカの人々のために40年近い活動を続けている。

◇推薦者 / 久永 進

動物好きの24歳だった私はケニアのナイロビを拠点に、時間が許す限り、あちこちに出向き野生動物を観察していました。

沢山の動物と出会い、様々な発見がありました。そして色々な世界からやってきた学者や環境活動家とも知り合いました。動物と出会い、人々と出会う内に、この楽園に見える大地に横たわる大きな問題を避けて通るわけにはいなくなりました。それは密猟です。特に象牙の乱獲は深刻でした。密猟者は密猟で得た資金で、高性能の銃や四輪駆動車を買って、より効率的な密猟をします。

しかし対するレンジャーの装備は貧弱で、とても対抗できるものではありませんでした。装備を買おう。それには資金がいる。しかしその資金集めはケニアの人々のためにもなることでなければならぬ。旧大英帝国農業資本以外の農民からコーヒーや紅茶を日本で売ろう。それは今で言うフェアトレードだったと思います。しかし貿易はおろか、商売の経験すらない私には苦難の連続でした。騙されたり、商品がなくなったり、届いた貨物も横浜税関で「こんな安いはずはない」といって重加算税をとられたりして、散々な思いの連続でした。帰国後の私にはインド洋のかなたのアフリカが、だんだん遠くなってゆくのを感じました。しかし消沈してゆく私をよそに実は日本は経済発展を遂げ、世界に影響力を与える国になっていったのです。私にも注目が少しづつ集まり、講演の依頼などが舞い込むこともありました。「協力者が得られる」、そんなほのかな期待が心に芽生えてきました。自己資金と協力者の資金で、何台かの四輪駆動車が寄付されました。いろいろな装備がレンジャーに送られました。

そして皆様のおかげで、ケニアだけでなく、近隣の国々にも医薬品が届くようになりました。

そして遂に、最強にして最大の協力者が現れたのです。

それは私の母でした。母はケニアを視察するや否や、孤児院建設のプランを持ち帰って

きました。女の年寄りにそんなだいそれた事が出来る訳はない。世の中の人々はそう思いました。しかし母の言葉は人々の心を打ちました。キリスト教の教會、学校、母は我が身を顧みず全国を行脚しました。

そして遂に、ナイロビ郊外のダゴレティと呼ばれるスラムに、グリニッシュハウスという名の孤児院を建設してしまいました。母の意欲はとどまることがありません。給食プロジェクトを立ちあげました。そのご飯は煮込みだったりカレーライスだったり、それは吉田チャクラ（ごはん）と皆は呼び、子供たちは大はしゃぎ、大人たちはそれを見て涙したものでした。その後も母は職業訓練校の設立、農業プロジェクトを成功させそのプロジェクトをアメリカのFTCという大きな組織に任せ、自らはもっと奥地のウガンダのグル地方に向かいました。スーダンと国境を接するグル地方は、戦禍の真ただ中で子供たちはゲリラに拐われて軍事利用されていました。母はその子達を助けるためにシェルターをつくり、自立のための職業訓練、給食を続け子供たちを守りました。

私が作ったきっかけが大きく花開いた瞬間でした。

子が親を継ぐことは当たり前ですが、親が子を継いでその成果を何倍にもした話はおかしくも珍しいと思います。

今回の身に余る栄誉は、公益社団法人銀鈴会の名誉会長 久永進氏のご推挙があったからです。銀鈴会とは病気で咽喉を摘出しなければならなかった人の為の団体で、氏も40余年前喉頭がんによって咽喉をなくされた方です。しかし彼はそれにもめげず、同じ障害を持つ人々に声帯を使わない発生法を40年近くも伝授し続けた方です。私は受賞内定のご報告を受けた後、久永氏にその旨をご報告しようと氏のご自宅を訪問しました。そこで私は同氏が、丹沢山に登山したまま不帰の人となっていた事を知ることになったのです。そして内定のご報告を受けていた日が、まさに彼が入山した日だったのです。彼の偉業を語り継いで行きたいと思えます。



▲ 給食プロジェクト



▲ タゴレティー孤児院



▲ 新築したグリニッシュハウス

Aiichiro Yoshida (Age 64 /Zama city,Kanagawa Prefecture)

Chizu Yoshida (Age 86 /Zama city,Kanagawa Prefecture)

The Yoshidas were conducting such activities as investing the proceeds from their trading business with Africa in the protection of wild animals. In 1994, in Nairobi, they built an orphanage for the children of rangers who were shot and killed by poachers and the children of parents who were killed in inter-tribal conflict. This facility takes in disabled children as well as orphaned children. In Uganda, which was attacked by Sudan, they also built a shelter to protect children from being abducted and forced to serve as child soldiers or comfort women. When the war ended, they built, on the same site, an occupational training school that makes clothing. They have been carrying out these and other activities for the people of East Africa for close to 40 years.

Nominator: Susumu Hisanaga

特定非営利活動法人 ACE



代表
岩附 由香

東京都台東区

世界中のすべての子どもが権利を守られ、希望を持って安心して暮らせる社会をめざし、市民と共に「児童労働の撤廃と予防」に取り組む国際協力 NGO。1998 年に 107 国で行われた「児童労働に反対するグローバルマーチ」に日本から参加、1997 年に学生の有志 5 人で結成し、2005 年に NPO 法人化された。現在、主にインドとガーナで子どもを危険な労働から守り、教育を推進する国際協力活動や日本国内で市民、企業、政府に働きかけ児童労働の取り組みを促進するアドボカシー活動を行っている。

◇推薦者 / 長坂 寿久

この度は社会貢献者賞を受賞させていただくことになり、大変嬉しく思います。これまで 14 年間の活動の中で賞の受賞は初めてであり、来年は設立 15 周年という節目の前に、これまで活動を続けてきた功績を認めていただいたことに、感謝申し上げます。

1997 年、当時大阪で児童労働の研究をする大学院生だった私は、児童労働についての情報を探す中で、国際子ども権利センターという NGO に出会いました。そこでボランティアを始めた時に、「児童労働に反対するグローバルマーチ」という世界的なムーブメントが、1998 年に 6 ヶ月間かけて 5 大陸の 1000 を超える団体が、協力して実施されることを知りました。この機会を逃さず、日本でも児童労働の問題を伝える契機としたい！と、仲間を集め、当初 6 カ月限定の NGO として ACE を立ち上げたのが、ACE の活動の始まりです。

転機が訪れたのは 2001 年。海外留学や就職で各地バラバラになっていたメンバーが、東京をベースにそれぞれの仕事を始めたことをきっかけに、ACE の活動を再開、それぞれの仕事の傍らにボランティアとして、まずメールマガジンの発行を開始しました。その直後、インドから「サッカーボールを子どもが縫う児童労働が起きている。その子どもとグローバルマーチの代表が 2 週間後に日本に行くので、記者会見の準備をしてほしい」との突然の電話があり、急きょ記者会見を開催することになりました。サッカーボールを縫っていたというソニアさん（当時 15 歳）が来日し、「大人が適正な賃金をもらって作ったサッカーボールを使ってください。子どもは学校に行くべきです。そのためにどうか協力してください。」とメッセージを発信し、その後実際現地を訪れ、自分たちの生活を支えるモノが、児童労働によってつくられているのだという現実を実感しました。結果的に「ワールドカップキャンペーン 2002 ～世界から児童労働をキック・アウト！～」と題したキャンペーンを他団体と共催し、この活動が成功したことから、ACE を法人化し有給の職員を置けるような体制づくりを目指すことになりました。今はカカオ産業、コットン産業の児童労働

に多面的なアプローチで取り組み、常駐スタッフ7名が国内外の活動を支える他、企業との連携も進み、多くの方の共感を得て活動が進められる体制になりました。これまで私たちの活動に可能性を感じ、共感して支援して下さった方々への感謝の気持ちと、まだまだ実現したいことと出来ていることのギャップも多く、それをいかに埋められるかのチャレンジを続けています。

2010年はNPO法人化5周年を迎え、カカオ畑で働いていたゴッドフレッド君が日本に来日し、中高生と交流しました。日本が輸入するカカオの7割はガーナ産であり、私たちの暮らしとも関係があることを多くの方に実感してもらえました。モノだけの地域とのつながりから、人と人へのつながりへ進化させ、これからも活動を続けていきたいです。



▲ コットン畑で働く子ども



▲ ガーナ 支援地域の子ども



◀ ピース・インドプロジェクト

ACE (Active against Child Exploitation) (Taito-ku, Tokyo)

Aiming to create a world where the rights of all children are protected and children can have hope and live with peace of mind, this NGO for international cooperation works together with the public "to eliminate and prevent child labor." In 1998, Japan participated in the Global March against Child Labor, which was carried out in 107 countries. ACE was formed by student volunteers in 1997, and in 2005 it was converted to an NPO corporation. At present it conducts international cooperation activities, mainly in India and Ghana, that protect children from dangerous labor and promote their education. In Japan it conducts advocacy activities that urge the public, corporations and the government to cooperate in promoting efforts to prevent child labor.

Nominator: Toshihisa Nagasaka

特定非営利活動法人

エクアドルの子どものための友人の会



代表理事

杉田 優子

埼玉県飯能市

1987年に南米エクアドルで起きた地震がきっかけとなり、日本に住んでいた同国の人の呼び掛けで、「エクアドルの子どものための友人の会」が結成された。目的は、エクアドルの人々が自分自身の手で公正で豊かな社会を実現できるように、教育を通して協力すること。貧困から学校にいけない子どものための奨学金プログラムや教育改善事業を手掛ける。現地のNGOと共同で活動し、今年で22年を迎える。180名以上の中・高校生が卒業し、延べ230校以上の学校施設を地域の人々と建設、修理するなどの支援を続けている。

◇推薦者 / 宮地 友美子



▲ 学校建設は保護者・教師・子どもたちとの共同作業



▲ 奨学生たちの講座で演劇の練習

今回はこのような賞を頂き、会を代表して心から感謝申し上げます。

教育支援を通して人と人がつながっていく、私たちの会、『エクアドルの子どものための友人の会 (SANE・サネ)』はそんな会です。支援を受けた元奨学生自身が次は会を支える人となる、このような息の長い活動を続けて22年になりました。

この活動のきっかけとなったのは、1987年にエクアドルで起きた大地震です。当時来日して埼玉県飯能市に来たばかりだったエクアドル人ホセ・アルメイダは、多くの日本人の協力を得て、母国の子ども達のために、勤務先の高校でチャリティーコンサートを開催しました。その時に集まった義捐金は13万円余。これを国の父親に送金し、父親はこの資金で、住民と一緒に安デス山中の小さな学校に教室を建設しました。政府によって10年も作りかけで放置されていた教室が、ひと月で完成したことに、村人たちは大喜び。それまではこの学校に教室はなかったのです。このことは周りに広く知られるようになり、多くの要望が寄せられました。こうして現在に至るまで、毎年チャリティーコンサートを行い、貧しい周辺地域の学校建設や小・中学校での学校菜園、技術教育(職業訓練)などを行うようになり、支援数は220事業に及びます。

この活動は、1989年に『エクアドルの子どものための友人の会』設立という形で

発展し、奨学金事業も始まりました。経済的に困難を抱えた、中・高校生に、奨学金を授与するだけでなく、講座の開催や学習支援、生活支援を行い、日本の会員の希望者と毎月手紙の交換をする—そんな手間のかかる活動を通して、これまで約 200 名の子ども達が学んできました。サネは会員の会費や寄付から資金を作り、現地のパートナーであるソハエ（教育のための日本・エクアドル連帯の会）に送金しています。また、文通を通して日本の会員が子どもたちを励ましています。現在、成長した元奨学生達がソハエを支えるようになりました。会の代表を始めとするボランティアや、職員の多くは元奨学生です。会の資金は大変小さいため、職員には良い給料は出せませんが「この活動が好き」と誇りを持ってきています。



▲ キトの奨学生達



▲ 学校菜園で農業実習

一方、カヤンベという農村地域では、地域に残り地域の発展を支えていけるような青年を育てるために、学校の教師と一緒に、学校菜園や技術教育を行っています。子どもたちはこの事業を通じて、農業、木工、溶接などの技術を身につけ、自信を持って社会へ出ていけるようになります。

時間をかけて子ども達を育て、社会に出た彼らがやがて後輩や自分の地域のために協力するようになる。そういう活動をしているのが、私達 SANE なのです。

22 年目の今年、この受賞のおかげで初めてエクアドルから元奨学生が日本に訪れました。そして、いただいた賞金を活かして現地メンバーが研修に励むことになりました。大きな前進につながっていくものと希望を持っています。重ねてお礼申し上げます。



▲ 溶接実習で真剣に学ぶ子



▲ 木工研修の修了式

Sociedad de Amigos del Ni ñ o Ecuatoriano (Hanno City, Saitama Prefecture)

This organization was formed in response to the earthquake that occurred in Ecuador, South America, in 1987, and to the subsequent call for help from Ecuadorians living in Japan. Its purpose is to cooperate with the people of Ecuador through education so that they can create a just and affluent society for themselves. It operates a scholarship program for children who cannot go to school due to poverty, as well as an educational improvement program. It conducts activities jointly with local NGOs. This year marks its 22nd anniversary. It has helped over 180 middle school and high school students to graduate; together with local citizens, it has built or repaired the facilities of over 230 schools; and it has continued to provide its support in other ways as well.

Nominator: Yumiko Miyachi

日・タイ親善交流グループ



会長
須原 玖仁子

東京都練馬区

昭和 54 年にタイ国僻地の教育支援を目的として設立された NGO 団体。赤十字などへの物資の寄贈、学校や診療所、汚水処理施設、保育所、寄宿舎の建設を始め、同国の困窮児童や住民たちのためのさまざまな援助活動を実施している。これまでに、教育施設など 17 施設以上を建設し、同 60 年から 15 年間にわたり、キャラバンによる無医村や僻地への巡回医療の他、国境に接するアジア諸国の難民問題に対し人道的支援を行うなど 30 年以上にわたり活動を続けている。

◇推薦者 / 公益財団法人 笹川平和財団 理事長 関 晃典

1979 年「出来る人が、出来る事を、出来る所へ、愛ある行動を…」との理念で国際協力支援団体（N・G・O）を設立いたしました。

以来毎年訪タイし、僻地の困窮児童や住民たちの為に、支援活動を 32 年間に亘り実施して参りました。幼、小、中学校の建設。診療所、保育園、寄宿舎、図書館、多目的食堂棟の建設。パディック染めの汚水処理施設、給食の為の酪農事業、奨学金などの支援。また趣旨を同じくするタイ国王立僻地教育振興協会と提携し 1985 年～ 2010 年まで僻地を巡り、文房具、楽器、運動具などの提供及びタイ医師団による健康診断、子供たちのヘアカットを行い、村人や子供達の喜ぶ姿に感動を覚えながらボーダーラインの貧困地域で活動を行いました。

これらの活動で国境沿いで生活する姿に接し、多くの見聞と知識を得られたことは自分への大きな財産となりました。32 年間休むことのない活動で貴重な体験を私に与えてくださったことは、健康と環境に恵まれ又皆様方の多大なるご支援によるものと感謝しております。

このボランティア活動で、タイ西北部のミャンマー国境近くのクンユーム地域で、旧日本兵が駐屯した寺院や村落で遺骨や遺品が残っているのを知りました。7 年前から慰霊と地元住民との友好の為に、日本の桜の植樹活動も始めました。帰還できずに異国の地に眠る兵士に、せめて故国日本の桜の花見ができるならば、と願っております。

末記になりましたが、この度の授賞に際しまして笹川平和財団理事長の関晃典様には心より感謝申し上げます。公益財団法人社会貢献支援財団よりの授賞を励みに、今後共健康の続く限り活動を推進して参りたいと思っております。ありがとうございます。



ケーンバンタオ小学校の寄宿舎



▲ 中学校の図書館の工事中



▲ 図書館の落成式準備中



▲ 図書館の落成式当日



▲ 小学校の多目的食堂完成式での初昼食

Japan-Thai Friendship Exchange Group (Nerima-Ku, Tokyo)

This public interest group was established in 1979 for the purpose of supporting education in remote areas of Thailand. It conducts various activities to help poor children and residents of Thailand. For example, it donates supplies to the Red Cross and builds schools, clinics, water processing facilities, childcare centers and dormitories. Until now, it has built 16 facilities, including educational facilities. Over the 15 years from 1985, it conducted an itinerant clinic to doctorless villages and remote regions, and provided humanitarian aid for refugees from countries that border Thailand. Based on the slogan, "Those who are able to should carry out acts of love wherever they can," the Group has continued its activities for over 30 years.

Nominator: Akinori Seki, President, Sasakawa Peace Foundation

ね ぎ し み ち こ 根岸 美智子



74歳 / シエラレオネ共和国

1974年に所属する修道会からアフリカに派遣されて以来、36年にわたり活動を続けている。ナイジェリアからシエラレオネに移り、ルンサという町のOLG（Our Lady of Guadalupe）中学で責任者として勤務。98年に激化した内戦の中、反乱兵に捕まり殺されかけるが奇跡的に助かり、一時国外に脱出。02年に戻り、空爆で破壊されていた学校の再建に努めた。再び中学校を作り、現在は見放されたり、学校にも行けなかった女性などの職業センターの校長として活動し、生徒たちの自立をサポートしている。

◇推薦者 / 海外邦人宣教者活動援助後援会（JOMAS）

西アフリカの片隅にて

私は、単なるアフリカ宣教女として選ばれました修道女に過ぎません。これとって特別な事をしたおぼえはありません。ですからこの手記をお願いされました時、どうしようかと、はたと困りました。しかし全能の神様は、無力な私達を使っているいろいろな事をなさいますのも確かです。それで神を賛美する意味で、ここにいままでの出来事を少し書いてみます。

1974年に宣教師として日本を去りました。アフリカ大陸に渡ったのは、最初はナイジェリアの元ビアフラと呼ばれていた地方でした。戦争で荒れ果て、外国人は皆退去したので、私達が戦後入る初めての外国人で、色黒の私もオニョオチャ（白人）と呼ばれ生徒から触られたりくちやくちやになる体験もいたしました。皆、人なつこくやさしい人たちでした。この国に新しく本会の創立をたのまれ出かけました。（現在、ナイジェリア修道院は、60人以上の現地の修道女を持つ大きな修道院に発展しています）。慣れない事ばかり、最初につくったのはまず飲み水でした。暑いアフリカでの生活に慣れない私は、レモン水を飲みすぎ身体をこわしました。それで米国に転任を命じられ途中シエラレオネによりましたのが、神様の思し召しといいたいまいしょうか、1977年から今に至ってここルンサの住人になっております。

シエラレオネでは貧しく女子は学校にも行きませんでした。1980年日本に帰り、玉川大学を訪問しました時、先生方の御協力を得て、シエラレオネを助ける手を貸す運動という会を作ってくださいました。そしてはじめて奨学制度ができました。シエラレオネは貧しく一日一食が普通でした。生徒はおなかですいてお勉強も出来ませんでした。

それを見た当時の小学校校長より、日本に帰ったら日本の皆様に200円の献金をおねがいしてください。そうすれば一人の生徒が給食を一月食べられますと言われ、全国の学校を回りおねがいました。

ほとんどのシスターが戦争で避難して行きましたが、戦争当時の校長が急死されたので私がそれを継ぎ、責任者として国に残りいろいろな戦争体験をいたしました。ジャングルを3日間逃げ回り、遂に兵士に銃を向けられ死を覚悟もいたしました。九死に一生を得て一時避難いたしました。その間、ロシアのボルガ川のそばのサラトフに派遣されました。

2002年にやっと平和になり、又シエラレオネにもどりました。修道院も学校も皆、壊され、はじめからのやりなおしをしなければなりませんでした。日本とそして世界の皆様の愛の支援により、再出発しました。ルスサは又戦前より大きな学校になり、2007年からは女子の中学を増設しなければなりませんでした。

現在3000人以上の生徒が勉学にはげんでおります。毎日給食がいただけますのも、日本からの支援によるからです。今回の大震災にさいし、貧しいルスサの学校の生徒も先生も一つになり、祈りつつ自分の持っている少ないお金から、喜んで日本の為にと寄金をもってきました。これは遠い日本の皆様がいつも助けてくださいましたから、地球の反対側であっても自分の家族の様に感じたのでした。

愛は決して失う事はありません、お互いに愛し与え合う時にすばらしい世界がやってくるのだとつくづく思います。私には何も出来ません、しかしここ西アフリカの片隅におります事によって、皆様の愛の架け橋になれましたら、本当に幸せです。ここで元気で働く事が出来ましたのも、全国のすばらしい後援者の方々の愛の御支援と祈りに支えられているからなのです。私は世界一の幸せ者と感謝しております。ありがとうございました。これからもよろしくお願ひ申し上げます。神様の聖旨の日まで努力したいと思ひます。



▲ 食前の祈り



▲ 新しい中学校舎説明



▲ 卒業生



▲ 鉛筆ありがとう



▲ 震災の話聞く生徒

▲ 日本の為祈る小学生

Michiko Negishi (Age 74 / Sierra Leone)

Since being sent to Africa in 1974 by her religious order, Ms. Negishi has continued her activities for 36 years. From her first post, in Nigeria, she moved to Sierra Leone, where she worked as the person in charge at a middle school (Our Lady of Guadalupe) in a town called Lunsar. In 1998, as the local civil war intensified, she was captured by rebel troops; on the verge of being killed, she was miraculously saved and temporarily fled the country. In 2002 she returned and worked to rebuild the school, which had been destroyed by air strikes. At present she is head of an occupational school for, among others, women who were abandoned over the years since 1990 and weren't able to attend school, and works to promote the independence of the students.

Nominator: Japan Overseas Missionary Activity Sponsorship (JOMAS)

あ べ はる よ 阿部 春代



社団法人 好善社
派遣看護師

57歳 / タイ王国

日本のハンセン病療養所勤務がきっかけで、患者や回復者が末梢神経障害によって手足の変形をきたすという後遺症に悩む現実を目の当たりにして、手足の保護の重要性を認識し、セルフケア・クリニックの実践に取り組んだ。1991年に所属する団体からタイ国東北部コンケン県へボランティア看護師として派遣される。以来一貫して、障害のある手足を洗い、創傷の手当をしながら後遺症対策のセルフケアを患者自身が行えるように促してきた。20年にわたる実践の結果、その重要性が患者やその家族に理解されるようになり、医療施設の職員からも信頼される存在になっている。一緒に取り組んできた理学療法士が、患者の傷の治療のために自ら手伝いギプス治療を受け継いでくれるようになったので、高齢で動けない人への訪問看護も取り組み始めている。

◇推薦者 / 梅本歯科記念奉仕団

活動のきっかけ、軌道に乗るまでの苦労、現在の状況、今後の展望等

受賞決定の通知を受けて思うことは、ハンセン病に関っているから得た機会であるだろうということです。では、なぜハンセン病に関ってきたのか。ハンセン病は治癒したがその後遺症によって手足の傷をくり返す人、あるいは手足の変形が著しく、そのために社会生活が困難になっている多くの人たちに出会いました。その人たちが私の看護の知識や技術による手助けによって手足の状態を良くし、困難な社会生活が少しでも容易になったらどんなによいことか、嬉しいことか。私はそんな思いから、タイへ出かけました。

知覚障害のために熱い・痛い等を感じない手足は、注意をしないと日常生活で傷を繰り返しますが、痛みがないのでその手当てが不十分です。ですから、先ずやってみて、その人の手足が良くなることをみてもらう。この実践を通して、自分の手足に関心を持ちセルフケアが継続されることを促してきました。そして「十分な手当てをすれば良くなり治り、予防できる。」と自信を持って言えるようになりました。同時に、いったんハンセン病で末梢神経障害が起こってしまうと、傷をつくらずに生活することは本当に難しいと痛感してきました。タイの人たちの多くが手を出さない、傷を持った人たちの汚れた足を、私は看護師として気になるから、放置できないから足を洗い、垢を擦っています。

昨年のタイ滞在20年の長期休暇から復帰して、高齢で動けない人への訪問看護を始めました。それは、一緒に取り組んできた理学療法士が、患者の傷の治療のために自ら手伝い、ギプス治療を受け継いでくれるようになったことと、日本の療養所の人たちのように高齢になり、身寄りのない人の一層不自由な療養生活が見えたか

らです。

時にはため息をつきながらも、人間の自然治癒力を引き出す看護の喜びを味わいつつ、拙い私の外国語を聞いてくれる人がいて、私を待っている人がいるという喜びが継続力となっています。



▲ 訪問看護 寝たきりから座位・移動を始めた一人暮らしの婦人



▲ 震日本とコロナ-青年ワークキャンプでハンセン病後遺症問題を紹介

▲ 平日はプライマリーヘルスケアユニットでの対応



▲ セルフケアの実践

Haruyo Abe (Age 57 / Thailand)

Working in Japan at a Hansen's disease sanatorium was the start. There she saw the reality of patients and recuperating individuals who dreaded the common aftereffect of the disease: that their arms and legs would become deformed from peripheral neuropathy. Recognizing the importance of protecting arms and legs, she worked to establish a self-care clinic. In 1991 the organization to which she belonged sent her to Khon Kaen Province, in northeast Thailand, as a volunteer nurse. Ever since then she has washed disabled arms and legs and treated wounds, while encouraging patients so that they themselves can carry out self-care to counteract the aftereffect. As a result of putting this regimen into practice for 20 years, its importance has come to be understood by patients and their families, and she has also become a person trusted by staff at medical facilities. The physical therapists with whom she has worked have themselves ended up helping the self-care clinic treat the wounds of patients. She has also begun making home visits to older patients who are unable to move.

Nominator: Umemoto Memorial Dental Service Group

くろかわ たえこ
黒川 妙子



50歳 / 東京都足立区

昭和58年から約28年間、アジア・太平洋地域の虐げられた少数民族が抱える問題を社会に訴える等、支援活動を行っている。タイとミャンマーの国境地域で暮らし、少数民族の伝統文化維持を訴える記録ビデオを撮影し、広く社会に訴える一方、南インドの不可触選民と呼ばれるダリッドの若い女性たちの文化活動に参加し、歌や踊りで権利の回復を訴えるプログラム作成や運営に参画した。またアジアの国々で、識字教育などの人材育成にも努めている。

◇推薦者 / 田島 伸二

この手記を書いている現在、3.11の原発事故によりひきおこされた困難な状況が、これから何十年、何百年と続くたいへんな時代の、まさにその入り口にあることを痛感する日々です。こうした中で、2011年度の社会貢献の賞を頂戴することの意味を考えさせられ、また大きな責任をも痛感します。

わたしは、アジア太平洋地域の文化・教育協力事業を行う職場で14年間仕事をした後、国際機関の会議室の議論からでは見えない世界を実感したくて、それまでの職場を離れました。そして私を受け入れてくれたのが、タイ・ミャンマー・ラオスの国境近くで山岳少数民族のための活動を行う、タイのトゥエンチャイ・ディーテさんでした。ミャンマーにおける少数民族への圧迫から逃れ、国境付近のタイ領内の山岳地帯に移り住んできた人々が、その地域の住民として平和に生活を営めるように、教育・農業・環境の分野で重要な仕事をしていたらっしゃいました。ここでお手伝いをさせていただきながら、買ったばかりのビデオカメラをかついで、私は村の長老たちの話をきいてまわり、「永遠のアカ民族の魂」と題した映像プログラムを作り、この番組はタイ政府のノンフォーマル教育巡回車両に搭載されました。山の村から発信された、長老の言葉がいかに現代に深い示唆を与えるものであるか、これから空気も土も水も放射能に汚染された土地に暮らしていかなければならない私たちにとって、前にも増してその言葉が心に響きます。

南インドのダリッドの女性たちの心の解放を、芸能を通じて行う「シャクティ」と私の協働関係は、おたがいに芸能を愛する者としての共通の土台からなりたっています。歌やおどりの魅力は、どんなしこりや垣根、そして心の傷があったとしても、共に歌いおどることにより、傷がいやされ不思議と連帯感がめばえるのです。ダリッドというのは、インドのカースト制度の最下層におしやられ、不可触民とされてきた人々が、自らを呼ぶ呼称です。おしつぶされそうな差別社会の中で、自尊心をはぐくみ、それぞれが与えられた能力をのばして、皆が少しでも幸せに生きていけるようにするのは、並大抵なことではありません。それでも「シャクティ」創設者のチャンドラさんは、一人一人のダリッドの少女たちと寝食を共にしながら、若い人

材を育てています。うまくいかないこともあります
が、列車から降りていく人、列車にのる人があるな
かでも、列車は進んでいくという「ことわざ」があ
るそうです。これからも淡々とダリットの女性たち
の輝く能力をひきだす仕事をお手伝いしていきたく
いと思っています。



▲ アカ民族の家で食事中



▲ タイのオフィスで



▲ 長老に話をうかがう



▲ 南インドの村で



▲ ミーティング中

Taeko Kurokawa (Age 50 / Adachi-ku, Tokyo)

For about 28 years, beginning in 1983, Ms.Kurokawa has brought the problems of oppressed minorities in the Asian and Pacific regions to the attention of society and conducted other advocacy activities. She has lived in the border area between Thailand and Myanmar and shot video records aimed at preserving the traditional cultures of the minority peoples there and communicated that aim to a broad spectrum of society. At the same time, she has participated in the cultural activities of young women of the Dalits, untouchables of southern India, and also participated in the creation and operation of a program that, through song and dance, seeks to promote restoration of these people's rights. In various Asian countries, moreover, she has created peace picture books, done research and development for textbooks, and otherwise led many young people forwards through literacy education and worked to cultivate talented individuals.

Nominator: Shinji Tajima

く れ や ま よ し お
呉山 良雄



69 歳 / 滋賀県湖南市

湖南市で 25 年にわたり、警察や学校と連携しながら、地域の清掃活動などを通じ素行不良の青少年たちの更生と育成を続けている。自身の子が通う中学校の PTA 会長を務め青少年を指導する過程で、大人が本気で関われば子どもは変わるという体験から、平成 10 年に「青少年指導支援の会」を設立。平成 15 年に、更生したかつての非行の若者を集め、地域の清掃活動に取り組むための若者ボランティアグループ「スーパー」を設立。清掃や特別養護老人施設の支援、不法投棄されたゴミの撤去を請け負うなど、警察や地域との信頼関係を育む中で活動を続けている。

◇推薦者 / 宮治 一幸

20 数年前より、先生方の指導では困難を極める地元中学生と学校からの相談、依頼によって関わりをもち始め、青少年を支援する大人の組織を再編成してから 13 年が経ちます。

組織の名称は「青少年指導支援の会」（以下「支援の会」）とし、現在会員は、代表を務める私を含めて 11 名を数え、会員の職種は教師や市職員、会社員、主婦等、様々である。結成当時は 4、5 名であった会員が徐々に増え“大人（会員）自らの人間性を高めよう”そして“何よりも継続していこう”を合言葉に活動を続けてきました。それだけに今回の受賞は、思いと行動を同じくする「支援の会」全員の喜びであり、代表を務める私にとっても、光栄です。

これまでを振り返って強く思うことは、青少年自身の育ちの困難さよりも、関わる大人達の意味疎通の難しさであります。機会あるごとに大人同士の意見交換を繰り返しながら、今日まで進めてきたことが絆を維持し継続につながったと確信しております。

現在は、若者の清掃グループ「スーパー」（中学生時代から関わりをもってきた子供達を中心になって 8 年半前に結成）の活動支援、毎年 10 月頃から始める地元中学三年生の進路実現に向けての勉強会支援、さらには青少年の就労支援、そして講演活動等を地道に行っています。

「スーパー」については、今日まで月に 1 回の清掃活動に関わりながら、年に数回の研修バス旅行やボウリング大会等の行事を行っており、県内の名所旧跡を若者達と巡る旅は、「支援の会」の大人にとっても新たなエネルギーをもらう場となっております。また中学三年生との関わりは、地元中学校との懇談を定例化しながら、学校からの依頼によっても行っており、もちろん進学・卒業できるようにと家庭訪問をしながらの激励、支援も行っています。

この活動を継続してきたことによる成果として、青少年達自らが自立の方向へと

向かうことで、結果的に地域の治安や安全面の向上が挙げられます。10数年前は、地元交番のパトカーの出動が日常的に繰り返されていた街も、若者に関しては苦情、出動が激減し、現在は住民が安心して暮らせる事が嬉しく思います。

今後も、地元の中学校と連携をとりながら、若者の自立に向けて息の長いサポートを組織的に行っていきたいと思います。

課題を抱えた青少年達は、絶えず自分達に関心を持ち、本気で係わってくれる大人を求めています。私達、青少年指導支援の会のメンバーは、いかに本気で熱意を持って活動を継続することが出来るかにかかっています。今回の受賞は個人の受賞ではなく、警察、行政、中学校、高等学校、地元住民との連携があり、青少年指導支援の会という組織で活動をしている事に対して、評価されたものと心より感謝を致しております。この大きな励みをより新たな心構えで青少年達と係わる事を嬉しく思います。

有難うございました。



▲ 青少年の家 入口



▲ 椎茸栽培



▲ 卒業生からの色紙



▲ 活動写真が貼られた教室



▲ 地元おまわりさんと交流

Yoshio Kureyama (Age 69 / Konan City, Shiga Prefecture)

For 25 years, in Konan City, Mr.Kureyama has linked the police with schools by working to rehabilitate and educate delinquent youth through regional cleanup activities. In the process of serving as PTA chairman of the middle school attended by his own children and providing guidance to youth, he found that children will change if adults take them seriously, and, based on that experience, in 1998 he founded the Organization for Youth Guidance and Support. In that same year he gathered together formerly delinquent youth and established Sweeper, a youth volunteer group that undertakes regional cleanup activities. In addition, he supports special nursing facilities for the elderly, contracts for removing illegally dumped garbage, and has continued other activities while cultivating relationships of trust with the region and the police.

Nominator: Kazuyuki Miyachi

のぐち よしひろ
野口 義弘



68歳 / 福岡県北九州市小倉南区

平成7年に北九州市でガソリンスタンドを開業して以来、少年院や刑務所の出所者、不登校経験のある少年少女を雇用し、立ち直りを支援。のべ87人を雇用した。現在経営中の三店舗の、従業員の多くは非行歴のある子どもたちである。「非行に走る少年たちは、本当は素直な子ばかり。原因は、大人が創出した社会環境にある」と訴え、「信頼され、立ち直る場所さえあれば、子どもは必ず変わる」という信念を貫き、家族ぐるみで支援を続けている。

◇ 推薦者 / 西日本新聞北九州本社 副代表 竹下 元生

「信じ続ければ少年たちは応えてくれる」

1991年北九州市少年相談センターに勤めていた妻から「お父さん、とてもいい女の子がいるんだけど、非行歴があるために働くところがないの。あなたが所長を務めているガソリンスタンドで雇ってもらえないかな!」という相談でした。「深夜徘徊、家出、窃盗、無免許暴走、シンナー」を繰り返していたその女の子、春子と会ってびっくりしました。

真っ赤に染めた長い髪、真っ赤なマニキュアを塗り濃い化粧をしていたので、とても16歳には見えませんでした。不安はありましたが、髪を元に戻し爪もきれいにする約束で雇ってみると、とても素直で、スタンドの商品販売でトップになったこともあり、そのことで周りから誉められると、自信をつけ、働くことで自分の居場所を見つけることが出来たのです。今は37歳、結婚して一児の母親となり、今でも店に立ち寄ってくれます。

私は1983年、小倉南警察署から少年補導員の委嘱を受け、非行少年と呼ばれる少年たちと関わって来ました。当時シンナーを吸う少年たちは正直恐かったのですが、春子との出会いで、少年と同じ目線で、真正面から向き合い、ゆっくり話を聞いてやることで、「自分の気持ちを理解してくれた、困った時は助けてくれる」と感じたとき、初めて心を開くことを、春子との出会いで知ったのです。それまでは外見だけで非行少年と決めつけていた自分を恥じました。

1994年独立「野口石油」を創立、保護司の妻からの依頼で福岡保護観察所協力雇用主（仮釈放や保護観察中の人を雇用、更生支援をするボランティア事業主のことです）に登録しました。刑務所、少年院、少女苑、鑑別所、保護観察中の少年たちを、北九州市で経営する3ヶ所のスタンドで16年間、87人の社会復帰の手助けをして来ました。現在は社員30名（含、パート、バイト）の中、非行歴のある16名が更生に向けて努力しています。ほとんどの少年が中学生の時、非行に走り不登校で規範意識が低く、善と悪の判断すら出来ない子もいますが、スタンドでは引継日報や、

売上金の計算、管理を任せます。任せることは「信じる」ことですから、認められたら悪いことはしません。

しかし、すべての少年たちが立ち直ったわけではありません。お金を持ち逃げされたり、突然行方不明になったり、仕事上のミスやお客様とのトラブル、事故や事件が起り、その度に会社は損害を被り、リスクを背負いました。何度か挫折しかけてきましたが、それを恐れたら少年や社員の成長がストップすると思ったのです。

「非行少年を更生が可能な期間に放置すると、本当の犯罪者になってしまう。発展途上の少年たちは、ちょっとしたキッカケで立派に成長してくれる。私はこのことを身を持って実感してきました。少年を犯罪者にしないためには、社会が手を差し伸べる必要がある、私は雇用してくれる場所があれば必ず更生できる」と信じ、雇用活動を続けていきたいと思えます。

幸いに昨年4月「NPO法人 福岡県就労支援事業者機構」が設立。機構の下部組織として「福岡県連合雇用主会」が発足しました。機構の理事と同会の会長を兼務し、今年8月「非行少年更生支援ネットワーク」を立ち上げました。一般企業の理解を得ることは、とても難しい状況ですが、講演等を通して雇用の呼び掛けの成果で今年60社も増え、現在190社となり嬉しく思います。一昨年少年院の出院者3,892人、県の保護観察中の少年が約1,700人と聞きます。私の会社はお客様が来店されて車を洗車する比率「洗車率」が日本一です。会社の経営を支えてくれているのが実は、少年たちなのです。「信じ続ければ少年たちは必ず、応えてくれる」と信じて。



◀「洗車売上比率日本一」
自信を持って作業する少年たち



▲ 少年たちと



◀ 少年にオイル交換を指導する野口さん



◀ 自宅に呼んで奥さん
の料理を楽しむことも
たち、妻宣子さん（右端）

と歓談する野口さん
と少年たち

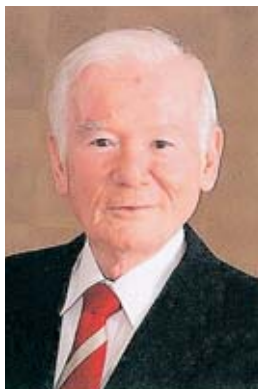


Yoshihiro Noguchi (Age 68 / Kokura Minami-ku, Kitakyushu City, Fukuoka Prefecture)

Since opening his first gas station in Kitakyushu City in 1995, Mr.Noguchi has employed people released from reform schools and prisons and youth with a record of truancy, and has otherwise supported their rehabilitation. He has employed a total of 87 people so far. Many of the employees at the three gas stations he now operates are youth with a history of delinquency. "Youth who become delinquent are truly all obedient children," he claims. "The cause of their delinquency lies in the home environment created by the parents." Based on the belief that "children will change if only they are trusted and have a setting where they can regain their footing," he, together with his family, has continued to help them.

Nominator: Moto'o Takeshita, Deputy Representative, The Nishinippon Shimbun

いじゅう せいげん
伊集 盛元



71歳 / 沖縄県南城市

沖縄県議会議員として文教厚生委員部会に所属する中で、青少年問題が多々あることに気づき、同63年より高校中退者の問題解決に献身的に関るようになった。平成8年に県議を退いた後、「沖縄産業開発青年協会」を立て直し、若者を育成するとともに、平成22年には念願であった更生保護事業が認可され、「やんばる青少年隊」を設立、非行や犯罪を犯した青少年を受け入れている。自宅から120キロ離れた施設に毎朝4時に出勤し、青少年たちと関わり自立させ社会人へと導いている。

◇推薦者 / 新里 恒彦

沖縄県は、28年という長い間、異民族支配下に置かれました。そのことで、さまざまな本土との格差が生まれましたが、特に一番大きかったのは学力の差でした。私は国会議員の秘書、それから県議会議員になって、本格的に教育問題に取り組んできました。特色ある県立高等学校建設に向けて鋭意努力してきましたが、校区制という厚い壁にぶつかりました。

知事及び教育庁、その他の市町村長などの関係者と連日話し合いを重ねました。その結果、全県一区の特色ある高等学校を3校つくることが出来ました。そのおかげで、大学進学率も高くなり、難関といわれている大学にも合格者が徐々に増えていきました。本土との差が一步一步改善され、安堵していたころ、衝撃的な出来事に遭いました。

それは毎日新聞1面トップに大きく掲載された「沖縄県高校中退率10年連続ワーストワン」という記事でした。目の前が真っ暗になったのを今でも鮮明に覚えています。以来、自分がやってきた教育問題は、単なるエリート作りに終始していたのではないかと自問自答し、それがきっかけで、青少年の健全育成はどうあるべきか、中途退学問題に本格的に取り組みました。

まず、びっくりしたのは、本県の未成年者の飲酒及び喫煙者は全国平均の10倍、一般的な青少年の犯罪は全国平均の3倍だということです。また、離婚率は全国でもっとも高く、夜型社会で、県民所得は全国最下位、その所得格差は全国ナンバー1などという実態が浮かび上がってきました。

このデータを踏まえ、各県立高等学校にその対策委員会を設置させ、高等学校PTA連合会にも中途退学委員会をつくり、私が委員長として全力を尽くして参りました。関係各位の努力で3年後には年間千名ずつ中途退学を減らすことができました。沖縄産業開発青年協会(青年隊)は基本的には、コンボ、ブルドーザ、クレーン、フォークリフト等々11種類の資格を取得できる職業訓練校であります。確かにこれだけの国家資格を取得することで、92%以上の就職率になっているわけですが、今日の日

本は資格万能主義で、資格を取得するために一生懸命になり、一番大事な人間をつくることに欠けてきた傾向にあります。

青年隊では、朝の6時半起床に始まり、1時間程度の基礎訓練、夜の10時消灯まで連日、自分で自分をみつめる、すなわち「思いの種をまいて行動を刈り取る。行動の種をまいて習慣を刈り取る。習慣の種をまいて人格を刈り取る。人格の種をまいて人生を刈り取る」という格言の通り、繰り返し続けることによって、思いやり、勇気、忍耐、正義感、自分の言葉に責任を持つ人づくりをモットーにしています。

「一日一善」という言葉の持つ重みが、少しずつ理解できるようになりました。

「大器は大成せしめ、小器は小成さす」という、吉田松陰の言葉があります。若い青年達と出来るだけ同じ目線になり、向き合うことの大切さを痛感しながら、日々学んでいます。



▲ 青年協会（青年隊）前での伊集さん



▲ 青年協会の施設とハウス栽培の畑

Seigen Iju (Age 71 / Nanjo City, Okinawa Prefecture)

As a member of the Okinawa Prefectural Assembly serving on the Education and Welfare Subcommittee, Mr. Iju became acutely aware that there were numerous youth problems, and in 1988 he became committed to solving the high-school dropout problem. After leaving the Assembly in 1996, he rebuilt the Okinawa Industrial Development Youth Association and worked to educate and nurture youth. In 2010, his long-planned rehabilitation project was approved and he established the Yanbaru Youth Squad, which accepts youth who have committed acts of delinquency or crimes in order to rehabilitate them. Each morning he travels four hours to go to work at the project's facility 120 kilometers from his home, where he engages with the youth involved, trying to help them to gain independence and become responsible members of society.

Nominator: Tsunehiko Shinzato

ジョゼリア・ロンガット



51歳 / 愛知県豊田市

1990年の入管法改正により、豊田市の保見団地内で働くブラジル人の人口が、1万人近い住民の約半数を占めるなど激増。文化摩擦だけでなく子どもたちの教育問題が深刻化。2005年新設されたNPO法人が運営する「パウロ・フレイレ地域学校」にブラジルから校長として招かれ、大きな人間性で生徒に接し、さらに年代を問わず、地域の識字教育の向上に努めている。親はまず教育費を削ろうとするが、学校の経営状態が厳しい中、自らの給与の引下げ、子どもたちに学ぶことの大切さを伝えている。

◇推薦者 / 保見ヶ丘ラテンアメリカセンター 河合 真平

2005年のはじめ、母国ブラジルから遠く離れ文化も違う日本へ来て、NPO法人運営による学校の教育者としての任務を引き受けました。そのころ（そしていまもですが）日本にはたくさんのブラジル人の子供たちがいて、切実な教育問題を抱えていました。（註）

私は日本に来るのになんの迷いもありませんでした。

私たちは地球における世界の市民であり、全ての人は国籍に関わらずた一つの“人類”という仲間であるからです。私たちはこの地球と、生きとし生けるすべてのものを愛すべきなのです。

日本で教師として働いてきた年月で、多くの喜びと、そして悲しみも経験しました。

世界的な大不況が起きた時、学校運営の継続が危ぶまれましたが、学校内は団結し、教育を必要としているのに学費を払うことが出来なくなった生徒たちのために扉を開きました。それを可能にしたのは私たちの活動へご賛同いただいた方々のご支援であり、そしてそれは現在まで続いています。

財政的な問題から教育的業務を削減せざるを得なくなり、以前のように全学年への授業が継続出来なくなったことは非常に悲しいことでした。

喜びについても書きましょう。

授業で教えたことを、こどもたちが日常生活で使うのは、とても嬉しいことです。

例えば、家庭科の授業で裁縫と刺繍をやりました。わたしたちはその技術を生かしました。不況のとき、生徒たちは授業でならった裁縫でエコバッグを縫って、全国の人に購入してもらいました。その代金で生徒たちが広島へ修学旅行に行くことができました。

私たちの学校の教師の努力や、全ての人には教育を受ける権利があるという信念のもと賛同して下さった日本の方々の貴重な支援がなければ、これまでこの学校を存続させることは出来なかったでしょう。

私たちの活動に賛同し、支援して下さいる全ての方々に、心より感謝申し上げます。皆さんに永遠に感謝するためには、私の人生は短すぎると感じています。



▲ 低学年のこどもたち



▲ かばん作りと発送作業

(註)

たとえばアメリカ合衆国には、約 120 万人のブラジル人が暮らしていますが、ブラジル人学校は 1 校しかありません。2010 年現在日本国内のブラジル人は 30 万人弱でアメリカの 4 分の 1 に満たないのですが、ブラジル人学校は優に 100 を超えています。

アルファベットなど、ほぼ同じ文字を使用し、語彙にも共通性がある場合、母語以外の外国語による学習も比較的スムーズに行えますが、まったく異なった言語の場合、たいへんな困難を伴います。

アルファベットの国から、漢字と仮名の国へ来たこどもたちが、勉強を続けるには、よほど特別な才能や家庭環境が必要です。

ロンガット校長のパウロフレイレ地域学校が所在する愛知県豊田市保見ヶ丘は、人口の半数がブラジル人という、外国人集住地域ですが、不就学の状態に陥る子供たちが続出していました。

早い時期にブラジル人学校が設立されましたが、一般の学校が、公立学校ならば税金で運営され、私学でも様々な助成金があるのに対して、ブラジル人学校にはそれがなく、どうしても授業料が高額となります。不況時などに収入が減った場合、通い続けることができなくなります。パウロフレイレ地域学校はこどもたちの教育を受ける権利を守るため、できる限り授業料を安く、良質な教育を提供することを目指し、全国の支援者から寄付を受け運営を続けています。

団体 HP <http://www9.ocn.ne.jp/~celaho/>

保見ヶ丘特定非営利活動法人保見ヶ丘ラテンアメリカセンターパウロフレイレ地域学校
校長 ファイジオ・ジョゼリア・ロンガット



▲ 保見団地の絵を描く 3～4 年生

▲ ロンガット校長は国語と家庭科の先生

Joselia Longatto (Age 51 / Toyota City, Aichi Prefecture)

Due to the 1990 revision of the Immigration Control Act, the number of Brazilians living in Toyota City's Homi Housing Project rapidly increased, eventually accounting for roughly half of the project's 10,000 residents. Not only were there cultural conflicts as a result; the educational problems of immigrant children also grew worse. Ms.Longatto was invited from Brazil to serve as principal of the Paolo Freire Community School, operated by an NPO established in 2005. She deals with the students with great humanity, and works to improve literacy in the region for people of all ages. The parents wanted to cut tuition, and with the school's management financially stretched, Ms.Longatto lowered her own salary and now works for minimum wage while communicating the importance of learning to the children.

Nominator: Shinpei Kawai, Centro Latino Americano Homigaoka



48歳 / 静岡県浜松市中区

浜松市の企業で外国人労働者の雇用に携わり、外国人子弟の教育の劣悪な状況を知る。「どんな子どもたちも教育から置き去りにしてはならない」と2003年に私財を投じて、出稼ぎ日系南米人の子どもたちの学びの場「ムンド・デ・アレグリア学校」を設立し、校長となる。たびたびの資金難などを自らの働きかけと企業の支援などで乗り越え、2004年同校は国内初の各種学校として認可された外国人学校となった。現在、幼稚園から高校生まで200人程のペルー人、ブラジル人、パラグアイ人の子どもたちが学んでいる。

◇推薦者 / 奥山 諒子

すべての子どもたちに学ぶ喜びを

この度は社会貢献支援財団より、このような栄えある賞を頂き、大変恐縮しております。

きっかけは小さな志からでした。1990年日本がバブル景気の中、労働力不足で国外からの労働力補充のために入国管理法が改正され、日系人（日系2世、3世）に合法的に労働できる在留資格が与えられるようになりました。それに伴い、経済状況が不安定な中南米から多くのデカセギの日系人労働者が日本にやってきました。デカセギですから、その多くの人たちは短期間でお金を貯めて、帰国する予定のはずが、当初の目的から少しずつずれていき、定住する人たちが増えていきました。

そして、定住する日系人たちは本国から家族を呼び寄せ、来日する日系人の子どもたちが増えていったのです。日本語を知らない子どもたちが、来日すると日本の学校に行きます。母国語もままならない子どもたちが、外国語である日本語で勉強しなければならないのです。ですから、その子どもたちがどうなっていくのか、想像することは簡単です。日本語もわからない、勉強もわからない、日本の文化、習慣がわからないから些細なことで誤解されいじめにあったり、人間関係がうまくいかない等々大変な状況に置かれるのです。

そんな子どもたちに私は8年前に出会い、その子どもたちの問題に直面し悩む親たちに「マサミ、子どもたちがスペイン語で勉強できる学校を作ってくれないか」と頼まれたのがムンド・デ・アレグリア学校の設立のきっかけです。日本に来たがために学習する機会を失い、困る子供たちが増えないよう、そして、日本に来てよかった、日本でよかった、と思って欲しいという小さな思いからでした。

しかし、思いだけでは経営は成り立たず、開校してすぐに困難は押し寄せてきました。一番の問題はお金でした。自分の貯金を切り崩し、アルバイトをしても、長く暗いトンネルの中をさまよっているようでした。何度辞めようと思ったかもしれませんが、ある日生徒たちに言われた「先生、学校を作ってくれてありがとう」という言葉に、折れそうな心が何度も救われました。

そして、努力が実り南米系外国人学校として国内初の各種学校認可を取得し、その後地元企業の支援、大使館、浜松市の支援、そして多くの支援者の方々に支えられ今日があります。

現在、ペルー人、ブラジル人、パラグアイ人の子ども達 190 名が学んでいます。まだまだ大変ですが、これからも、子ども達が日本社会で孤立せず、自立でき、自分の将来に夢がもてるような教育を目指していきます。この賞を頂き、さらに精進していきたいと思えます。

▼ 運動会



▼ 生徒に囲まれて



▲ 卒業式



Masami Matsumoto (Age 48 / Naka-ku, Hamamatsu City, Shizuoka Prefecture)

Ms. Matsumoto is involved with the hiring of foreign workers at companies in Hamamatsu City, and knows well about the poor state of education for the children of foreigners. Believing that "no child should be left behind," in 2003 she used her own money to establish the Mundo de Alegria School as a place for teaching the children of South Americans of Japanese ancestry who have come to Japan to work. She serves as the school's principal. Through her own efforts and support from companies, the school overcame its frequent financial difficulties and in 2004 became Japan's first school for foreigners to be approved as a "miscellaneous school." At present more than 200 children - Peruvians, Brazilians, Paraguayans - are learning at levels ranging from kindergarten to high school.

Nominator: Yoshiko Okuyama

中山 真理子



65 歳 / 東京都中野区

平成元年に中野区国際交流協会設立以来、23 年間、日本語を学ぶための「日本語講座」システムをボランティアと共に構築、地域の多文化共生に尽力してきた。指導と並行して「いつでも、だれでも、いつまでも」をモットーに、ボランティアのための日本語養成講座を開講。これまで延べ 600 人が受講した。当初は 7～8 人の学習者の講座が、昨年だけで約 4,000 人のボランティアが指導し、延べ 8,500 人の外国人が学ぶ大きな講座に成長した。同 20 年より「日本語支援を必要とする子どものための日本語ボランティア実践講座」を開講している。

◇ 推薦者 / 中野区国際交流協会



▲ 22 年続いている中野区国際交流協会の日本語ボランティア実践講座 中山専門員は、左端



▲ 2010 年 12 年「外国人住民への情報伝達とやさしい日本語」東京国際交流団体連絡会議 研修会 講師

23 年前、家庭・仕事で多文化の私は中野区国際交流協会（以下協会）で地域の国際化のお役にとの気持ちで専門員として仕事を始め、発足年の 10 月、早速パイロット事業として「日本語入門講座」を開きました。そこで、従来の私の国内外の大学での日本語教育が、極一部のエリートを対象にしていたことを学び、新たな職業人生の視点を得ることになりました。地域の生活者のための日本語を含む支援の重く深い需要をどうするかという視点でした。

先駆的試みと新聞各社に報道され、記事を目にしお手伝いをと飛び込んできた 1 区民に啓示を受け、手段を模索していた私は「入門講座」終了直後、早速ボランティア養成講座を開き、第 1 期生が誕生、現在は成人向け 22 期生、子供向けボランティアの 4 期生までを養成、一般 3、子ども 2 の全 5 クラスで 180 人が活動するボランティア組織となりました。

ボランティアが養成講座終了後も年間 80 時間の勉強会で主体的に学び、専門家となるべく更なる高みに挑戦しているのも、基本方針「①学習者の持つ目標がゴール ②いつでも、だれでも、いつまでも支援し、どのような需要にも応えられる態勢整備 ③ 100% 分かる日本語で教える技術の研鑽」を十二分に理解しているからです。以上で外国からの新たな人材を地域に多く輩出することが可能となり、これが日本語支援活動「中野方式」の全容です。

一方、ニューカマーの第 2 世代の自分の意志無く来日した子供達が急増する中、彼らを対象に特化したボランティア養成、日本語での教科学習で潜在能力が発揮できるよう集中して日本語を学習する環境整備も急務になりました。5 年前から開始した有資格者指導員の小中学校派遣事業も区教育委員会との連携が更に進み、今年度はボラン

ティア活動も含め、最大 120 時間で協会の子供クラスと連動、年間 400 時間、日本最大級の支援となりました。

多文化共生社会実現のもう 1 つの大きな柱、情報伝達では、言語の障害が生活上の差別を生まぬよう、情報難民が生じぬよう情報伝達の体制の確立を目指しています。それが、情報伝達での「中野方式」で、多言語化の限界を見越した「誰でも分かる日本語への翻訳」更にそこからの「誰でもわかる多言語化」によって、「限りなく 100% に近い住民への情報伝達を実現する」体制整備の確立を意味します。日本語支援活動での「中野方式」の日々の研鑽が功を奏し、日本語ボランティアがそのまま情報伝達でも「分かる日本語の通訳者」となり、想像を凌駕する努力と能力で地域社会への貢献の担い手として協働しています。

時代の波を最も受ける国際交流・協力分野では必ずしも平坦な道ばかりではありませんが、共に歩む人々との信頼関係、同志としての絆と情熱が私を鼓舞し支えてくれました。ですから、今回の受賞は公私共に私の活動を支えてくださる全ての方々、私に新たな視点を学ばせてくださる方々、いつも私に考える機会を与えてくださる方々があって実現したと理解しています。中野区国際交流協会を始め、理事長を務めさせて頂いている「公益財団法人母と学生の会」、共同研究者を務めさせて頂いている「全国の教員組織」、「東京ボランティアネットワーク」、「東京の日本語教育を考える会」その他、私が係らせて頂いている全ての活動母体・組織の方々、同志の方々の導きに発展途上の私がここまで歩めました。

晴れの日を多くの方々と共に喜び、感謝しつつも、これが、私への「ご苦労さん」ではなく、「これからもう一頑張り、努力してご覧」との励ましの言葉と受け止めております。



▲ 2011 年 2 月 中野区中学校教育研究会 国語部会「わかる日本語わかる授業」講演



▲ 2011 年 7 月 日本語講座で七夕の紹介



▲ 2011 年 8 月 夏休み日本語クラス

Mariko Nakayama (Age 65 / Nakano-ku, Tokyo)

For 23 years, since the Association for Nakano International Communications was established in the first year of the Heisei Era (1988), Ms.Nakayama, together with volunteers, has built the “Japanese Language Course” system for studying Japanese, and has exerted herself for the sake of multiculturalism. Besides courses for students, she holds Japanese language courses for volunteers based on the motto, “At any time, for anybody, for as long as it takes.” A total of 600 people have taken these courses so far. The courses for students have grown from 7-8 people initially to large courses in which, last year alone, approximately 4,000 volunteers provided instruction to a total of 8,500 foreigners. Since 2008 she has conducted classes for training volunteers to teach Japanese to children that need such help.

Nominator: Association for Nakano International Communications

特定非営利活動法人 3keys

東京都豊島区



代表理事
森山 誉恵

児童虐待数が平成 22 年度 5 万件を超え、3 万人の子どもたちが親もとではなく、児童養護施設で暮らしている。そしてその子どもたちの多くは、不安定な家庭環境などで学習が大幅に遅れた状態で入所している。施設でも職員 1 名が 6 名の子どもたちのケアをしており、資金も不足している中、なかなか学習支援にまで手が及んでいない。3keys は平成 21 年から大学生をはじめとした学習ボランティアの採用、育成をし、独自の学習プログラムを用いて、施設にいる子どもたちの学習を支援することで、子どもたちの自信、意欲を育む活動をしている。

◇推薦者 / 児童養護施設聖ヨゼフホーム 副施設長 吉沢 隆志

私をはじめて児童養護施設（以下、施設）と出会ったのは大学 2 年生の時。当時家庭教師や塾講師をやっていた私の目にとまったのが、近所の施設で学習ボランティアを募集しているというチラシでした。当時は施設の存在すら知らず、孤児院だとばかり思い込んでいましたが、9 割以上の子どもたちには親がいて、虐待や貧困などで親と生活が出来ないということを知りました。虐待や貧困という問題が日本の社会で起きているとは思ってもいなく、自分の無知さに恥ずかしい思いをし、もっと知りたいという思いから学習ボランティアに応募し、中学 2 年生の女の子を教える事になりました。

驚いたのはほとんどの子どもたちの学習がひどく遅れていたこと。子どもたちのももとの家庭環境は学習に集中できる環境ではなく、施設へ来るまでに、児童相談所や一時保護所、転校などを経験し、更に取りこぼしが増えてしまい、施設に来た時点では、子どもたちの能力や意志に関係なく大幅に学習が遅れてしまっていました。施設に来てからも、なぜ自分が施設で暮らさなくてはいけないのかという困惑や不安に加え、20～100 人程度の集団生活の中で、勉強も身に入らず、授業についていけなくなり、学校は休みがちになる子も多くなっていました。

そして施設職員も一人で大勢の子どもたちの家事、育児、心のケアなどをする中で学習や宿題をみる余裕もありません。そのようにして子どもたちは本人の能力や意志に関わらず、学習が遅れ、自信や意欲を失い、将来の可能性が狭められています。大学全入時代の中、9 割の施設の子どもたちが高卒以下で社会に出るという点のみをみただけでも、環境的な格差を感じます。

3keys は虐待や貧困などで親と暮らせなくなり施設に来た子どもたちでも、自らの可能性を狭めることなく、夢をかなえていけるような支援をしたいと考えています。施設の職員の方々の役割は虐待などの傷を負った子どもたちに対して、親からはもらえなかった愛情を注ぎ、食事ができて普通の生活ができるという安心した環

境を提供することです。そして 3keys は職員の方々の手が行き届きづらい学習や進学
の支援をしています。施設にいる子どもたちの生活環境や心の状態、学習遅れの
傾向を分析し、それにあつた学習プログラムを民間企業などと一緒に作り提供をし
ています。また施設の経済的状況を踏まえ低料金で支援ができるよう、学習ボラン
ティアを独自プログラムで研修・育成し、派遣をしています。

子どもたちは未来の担い手であり、未来の希望です。虐待や貧困といった社会問
題が、子どもたちの可能性を狭めてしまうことは、社会や国の未来を狭めることにな
ります。3keys はどんな環境で生まれ育つた子どもたちでも、自らの可能性を発
揮できるような社会を目指していきます。



▲ 学習ボランティアについての研修風景

▼ 指導風景



▼ 児童養護施設についての講演風景



3keys (Toshima-ku, Tokyo)

In fiscal 2010, the number of cases of child abuse in Japan exceeded 50,000, and 30,000 children were living not with their parents but in children's institutions. Many of those children also entered the institutions being far behind in their studies due to their unstable home environments and other factors. In the institutions, one staff member cares for six children and there is a shortage of funds; in such circumstances, there is little ability to support learning. Since 2009, 3keys, a nonprofit corporation, has been recruiting college students and others as teaching volunteers, training them, and, using its own study program, supporting the study efforts of children in institutions, thus conducting activities that foster confidence and aspirations in the children.

Nominator: Takashi Yoshizawa, Assistant Director, Saint Joseph's Home for Children

む た しゅう い ち ろ う
牟田 昭一郎



79歳 / 佐賀県神崎市

小さい頃からの本に対する渴望から、地域の幼児や児童を対象に、森の中の子ども図書館を造ろうと平成8年に私財を投じ敷地内に、子ども向けの絵本、図鑑など1千冊を所蔵するログハウス風の私設図書館「すぎの子文庫」を神崎町内に設立。地域のお母さんなどによる10名のボランティアとともに、図書の貸出や読みきかせ、すぎの子便りの発行など幅広く活動し、子どもたちの読書習慣の形成と青少年の健全育成や地域の和を広げるために活動している。現在、約3,500冊を所蔵している。

◇推薦者 / 神崎市教育委員会

私は幼・少年期を戦前・戦中・戦後の動乱の時代を過ごした。農業の長男として生まれ父とは3才の時死別し、祖父の手で農業の後継者として育った。本といえば教科書以外には縁遠いものであったが、学校の授業の始めに本の読み聞かせを毎日、短時間ずつではあるがしてくれる先生があり、「今日の続きは明日へ」と期待を抱いた…。

外国船の船員さんを父にもつ上級生がいて、その本を読ませてもらうのが楽しかった。だが上級生の機嫌を損なうと読ませてくれない。切ない気持ちで帰った。本を買ってもらうことなどはなく、片田舎で図書館等更に縁遠いものであった。

男と生まれたからには社会に対して何か恩返しをと思い、軍隊に入ろうと旧制中学へ進んだが、終戦を機にその希望も断たれ、家業の農業に勤しんで歳を重ねた。ふと気がついてみると、わが子を育てる時、日本は高度経済成長の真ただ中。3人の子も周りの子と遜色なく成長している。自分が幼い時抱いた本への渴望もすっかり忘れ、金銭のことだけしか考えない父親になり下がっていた。

これから私に出来そうな事、「幼き日の本への憧れを地域に子どもたちへ」、其れがささやかながらも地域文庫開設への動機となり、長男に仕事を譲った暁にと夢見たものでした。

平成六年。長男が仕事を継いでくれたので、家族の応援、諸先輩のご指導のもと文庫建設に取りかかりました。なにぶんにも資金不足の為殆どを手作りで、1,500㎡の土地に40㎡の建物を建設し周りを林で囲みました。平成8年、長い間の夢であった「すぎの子文庫」を開館する事が出来ました。蔵書は1000冊の幼児、小学校低学年向けの新刊書。林の中には童謡が流れる施設も作って子どもたちの情緒も育む事に気配りしています。

開館以来、15年にもなりますが、家族の協力はもちろんですが、とりわけ大勢のボランティアのスタッフの皆さん方のご奉仕によって支えられている事に大変感謝いたしております。

15年前に文庫に通って来ていた子どもたちは、すでに成人になった子もいるでしょう。しかし、今も文庫には本との出会いを求め、新しい世代の子どもたちが訪れてくれています。

私は、文庫活動は“種まき”だと思っています。今すぐに芽を出すことはありませんが、子どもたちが育っていく過程で、幼い頃すぎの子文庫で出会った本や経験が、きっと生きる力になると信じています。

最後になりましたが、此のたび貴財団より思いもかけない賞を戴き深く感謝申し上げます、これから益々の繁栄をお祈り申し上げます。又、御推薦下さった神埼市に対しても、過分な措置に対し厚くお礼を申し上げます。

▼ すぎの子文庫の様子



Shoichiro Muta (Age 79/ Kanzaki City, Saga Prefecture)

Due to his love for books from the time he was young, Mr.Muta wanted to create a “children's library in the forest” for toddlers and younger students of the region. Thus, in 1996 he invested his own money and built Sugino Bunko (Children of Cedar Library) - a log house-like building housing 1,000 picture books, illustrated books and other publications for children - and a plaza on a lot in Kanzaki-cho. Together with 10 volunteers - mothers from the region and others - he conducts a wide range of activities, including lending books, reading to children, and publishing the Sugino Newsletter, thus contributing to developing the habit of reading in children, to promoting the sound education of children, and to spreading tranquility in the region. At present the library houses about 3,500 volumes.

Nominator: Kanzaki City Board of Education

岡田 博勝

60歳 / 京都府木津川市



和太鼓 鼓粋

平成13年から大阪市旭区の知的障害児施設に療育活動として日本太鼓の指導を開始。日本太鼓連盟の公認指導員の資格を取得。太鼓の音を怖がるような子どもたちが、繰り返しの練習と高い指導力で昇級試験を受けられるようになる。日本太鼓全国障害者大会にも出場、高い評価を得る。平成20年からは近隣府県で不登校や引きこもり、ニートの青少年らの自立を支援。太鼓指導を通じ、行動の改善を促すとともに、自己表現の拡充と可能性を広げている。

◇推薦者 / 財団法人 日本太鼓連盟 秋田 稔



▲ 和太鼓 鼓粋の子ども達

このたびは社会貢献支援財団よりこのような賞を頂き、大変感謝しております。この受賞は、これまでの活動を支えてくれた家族、友人、メンバーの理解や、(財)日本太鼓連盟事務局や太鼓仲間やご支援下さった多くの皆様のお陰であると思っております。

これからも障害のある方や子どもたちに、和太鼓を通して健全なる育成をしていきたいと考えております。



▲ ぼらりすでの指導

2000年から知的障害児の生活施設で、和太鼓指導をするようになりました。当時は、太鼓が3台あるものの皮が破れるなどまともな物は無い状態で、施設の職員が和太鼓の指導をしていましたが、ただ単に叩いているといった感じでした。さらに練習が始まると、太鼓の音が怖いと言って走り回る女の子、話ばかりして此方の話を聞いてくれない子供など、小学部から高等部までの子供が15人もいました。

そうこうしているうちに太鼓が壊れて使い物にならなくなり、練習に支障をきたしてしまう事態になりました。そこで丸いダンボールで出来た物を貰って、太鼓がわりになんとか練習を続けていました。

しかし出演の時にはどうするか？太鼓が無い状態での出演はかなり難しいものがあります。



練習は丸いダンボールでできたニセ太鼓です。「先生！こんな太鼓と違うやんか！」という子供たちの声を無視しながら練習をしていました。

子供たちに本物の太鼓を叩かせてやりたい。でも資金が無い。思い切って銀行に相談に行き、融資窓口で「あのー太鼓ローンはありますか？」と尋ねました。「はあー？太鼓ローンって何ですか？家のローンとか、マイカーローンならあるんですがね…。」

事情を説明しているうちに窓口の人も理解してくれ、早々に太鼓ローンなるものを申請してくれました。一週間で申請が降り、銀行からお金を借りることができました。銀行始まって以来の「太鼓ローン」です。太鼓店で、長胴太鼓3台、桶胴太鼓1台を購入できました。これで子供たちに本物の太鼓を叩かせてやれると、とても嬉しかった反面、これから太鼓ローンを払っていく私としては、嫁さんに頭が上がりませんでした。

施設の子供達を（財）日本太鼓連盟の講習会に参加させていただき、認定級まで取得することが出来たり、全国障害者大会に出演したりしました。また、引きこもりの青少年達が集団生活をしているNPO団体から、和太鼓指導の依頼を受け奈良県の山奥まで出かけて行って指導をしたり、大阪府と和歌山県との県境にある知的障害者の施設にも定期的に指導をしたりしています。

現在は地元の子供達達の育成や大人の教室もしており、普段は大人と子供たちも一緒に練習や出演もしております。障害児の家族との練習の時には子供達を中心に指導もしております。太鼓を通して様々な人や障害のある人たちが、共に過ごすことでかけがえのない経験をし、夢や希望を持ち輝く人生を歩んでほしいと思っております。



▲ 清光会 和太鼓 顔での指導



▲ 自閉症親子の指導



▲ 砂川厚生センターのみなさん

Hirokatsu Okada (Age 60 / Kizugawa City, Kyoto Prefecture)

In 2001, at a facility for mentally handicapped children in Asahi-ku, Osaka, Mr.Okada began teaching Japanese taiko drums as a form of therapy for the children. From the Nippon Taiko Foundation he has obtained credentials as an authorized instructor. Even children who fear the sound of taiko drums become able, with repeated practice and capable instruction, to take the tests for promotion to higher rankings. They also take part in national taiko contests for the disabled and consistently receive high marks. Since 2008 Mr.Okada has also been helping youth in neighboring prefectures who are habitually truant or shut themselves off from society or are NEET (Not in Employment, Education or Training). Through taiko instruction he promotes improvement in their behavior and expands their abilities and possibilities of self-expression.

Nominator: Eniwa City Fire Department (Fire Chiefs' Association of Japan)

あじ朗志組



局長
桶谷 敦

宮城県石巻市

人口 500 人余りの高齢化が進む石巻市の網地島（あじしま）で、平成 16 年に島おこしのため結成。倒木の除去や、海岸の清掃などを、島外からの隊士（ボランティア）により、島民と交流する中で作業を行っている。また仙台市内の児童養護施設の子どもたちを島へ招待し、島民の高齢者との交流をはかり、心の拠り所にしてもらう意図から「網地島ふるさと楽好」も開校している。

3 月 11 日の東日本大震災の津波により、海岸も流木やゴミで埋まるなど活動の中止を余儀なくされているが、復活に向け活動を再開させている。

◇推薦者 / 石巻市

はじめに、平成 23 年 3 月 11 日に発生しました東日本大震災に際しましては、全国の皆さまから多くのご支援をいただきましたことに対し深く感謝申し上げます。

私どもが住んでいる「宮城県石巻市網地島」は、離島という地理的条件・生活基盤条件の厳しさから過疎化・高齢化等が進行しており、今後の網地島を憂い、現在置かれている厳しい状況を自らの力で打開するために、各種イベントや環境整備事業などを実施し、地域の活性化を図るとともに、網地島の知名度向上や島内の民間医療施設の存続に寄与するために、住民有志により平成 16 年 8 月 15 日に「あじ朗志組」を組織しました。

「あじ朗志組」では、宮城県仙台市内の児童養護施設の子供たちを網地島に招待し、「子供は宝」という網地島の心に触れてもらい、心の故郷（ふるさと）となればという思いを込めて「網地島ふるさと楽好」と称し、海水浴やマリンスポーツ、島の伝統的釣りの「あなご抜き」、郷土料理の共同調理を通じて、昔の子供と未来の大人の心の交流と安らぎを与える青少年の健全育成事業を実施しています。

網地島の網地浜地区は、約 150 人の高齢者ばかりが住む限界集落です。子どもは 1 人もおらず、十数年後には無人になってしまう運命にある集落です。

そして、その運命ゆえに、子どもの大切さや愛おしさを身にしみて感じている集落でもあります。

最も愛情を注いでもらえたであろう親等から、子どもたちが虐待され、辛い目にあわされている事件が毎日のように報道されています。

実の親から育児放棄されて、何日も暑いマンションの部屋に閉じこめられ、食事も与えられずに、絶望の中で命を落とす幼児もありました。

子どもたちがどんなに辛かったのかを考える度に、島のお年寄りたちは切なく感じていました。

そして、このような集落ですが、虐待された子どもたちにできることはないかと考えて、この「網地島ふるさと楽好」を開催することを決めたのです。

しかし、事業を実施するまでには課題も多く、特に児童養護施設に受け入れてもら

うまでは、かなりの時間を要しました。行政からの支援をもらうことでなんとか受け入れてもらうことができ、「網地島ふるさと楽好」を開催することが出来ました。

「網地島ふるさと楽好」では、網地島でしか出来ない活動を島民と一緒に遊ぶことにより、網地島の高齢者とのふれあいを通して、子供たちの「心の故郷（ふるさと）」になってあげたいと、平成19年度から平成22年度まで、延べ6回実施し、約300名の児童生徒などを網地島に招待しました。

人との温かな交流を通じて、「生い立ちは不幸でも、未来に幸せになれる。」という気持ちを持って、これからの人生を歩んでほしいと考えて活動を続けていますが、今回の東日本大震災の際には、「網地島ふるさと楽好」に参加した子どもたちから、激励のメッセージや千羽鶴をもらい、逆に私どもが生きる希望や勇気をもらいました。

今年は東日本大震災の影響により「網地島ふるさと楽好」は、開催することができませんでしたが、来年の夏に開催に向けて準備を開始しました。

また、島内の生活環境の整備を図る目的から、人口の減少により、利用されなくなった島内の生活道路を整備し、来島した観光客が島内の自然を観察してもらうための散策路や有事の際には避難路として活用出来るようにブルドーザーを購入し生活環境の整備や海水浴場の清掃作業を積極的に実施しています。

特に、東日本大震災の際には瓦礫撤去にいち早く対応し、島内の道路や漁港を利用しやすくしたことから、その後の応急工事がスムーズに行われ、網地島の災害対応に大きく貢献することが出来ました。



▲ 開校式の風景。児童養護施設の子供たちにあじ朗志組のメンバーが網地島の紹介や活動内容の説明。



▲ 子供たちが、網地島内にあるデイサービスセンターを訪問し、高齢者と交流しました。高齢者のみなさんの笑顔があふれていました。



▲ 団体会員をはじめ地域住民と都市部住民が協力して、道路のぬかみを改善するため、排水路復旧活動を実施しました。

Ajiroshi Gumi (Ishinomaki City, Miyagi Prefecture)

Ajishima Island lies off the coast of the Oshika Peninsula, in Miyagi Prefecture. Its population of a little more than 500 people is steadily aging. Ajiroshi Gumi was formed in 2004 to revitalize the island. This volunteer group's members - non-islanders all - go the island to remove fallen trees, clean the shore and do other work while socializing with the island's residents. They also invite children from children's institutions in Sendai to go to the island and socialize with its elderly residents. Based on the intention of making it into a kind of emotional foundation, they also opened the school, Aji Island Furusato Rakko.

Due to the Great East Japan Earthquake of March 11, the coast became buried in driftwood and garbage, and due to this and other reasons, the group's activities had to be suspended. However, the group is working to resume its activities with the aim of revitalizing the island.

Nominator: Ishinomaki City

NPO 法人 印旛野菜いかだの会



美島 康男

千葉県佐倉市

千葉県民の水道水源の印旛沼の水質汚濁を改善するために、平成12年「印旛野菜いかだの会」を設立。植物や二枚貝が持つ自然浄化機能を用いて沼の再生に取り組んでいる。アルミ製の通路状で両側に苗床を浮かせる「植栽いかだ」を水路に設置し、空芯菜やハーブなどを水耕栽培した結果、全国湖沼水質ワーストワンの汚名をきせられた沼の浄化効果を上げている。また栽培した野菜や貝から取れた真珠などは販売に向けて取り組んでいる。他県やベトナムにもこの取り組みは広がっている。

◇推薦者/NPO 法人 印旛沼広域環境研究会

循環型社会を目指す「みどりの変革」の趣旨どおり、「とりもどそう！ふるさとの自然」環境づくりとして、印旛沼の再生を目指して、心をともにする市民が集まり、平成12年5月に「印旛野菜いかだの会」を設立した。

●目的

印旛沼は、流域の都市化や経済社会活動によって、生活排水、農業排水などによる水質汚濁負荷が急速に進行し、毎年、夏場の水温上昇時には、富栄養化によるアオコ（藍藻類）の発生で、生態系は破壊され、腐敗臭などの影響もあり、市民の健康・衛生問題が問われている。

環境省の定める環境基準を大幅に上回り、印旛沼流域千葉県民140万人の大切な水道水源として、全国湖沼水質ワーストワンの汚名をきせられている。

昭和35年頃の印旛沼は、多くの浅瀬があって、多様な水生生物が生息しており、生態系が確立され、自然浄化機能を発揮していた。

しかし、新田開発事業により、浅瀬は失われ、多くの水生生物は破壊され、絶滅し、この水生生物による自然浄化機能は失われてしまった。

印旛沼及び流れ込む河川・水路・調整池と印旛沼流域で生産している全ての市民に対して、親しめる清らかな水環境を再生するための「よみがえれ印旛沼」再生事業として、生物（植物・二枚貝）が持つ自然浄化機能を用いた環境生態工学（エコエンジニアリング）の手法による水環境改善で「生物浄化システム」の確立を図り、印旛沼の再生を目指している。

●内容

2000年5月設立から印旛沼再生を目指し、環境に優しい生き物を使った「生物浄化システム」の確立と流域小・中学校の体験型環境学習の継続を目指している。

I. 「植栽いかだ」で植物の水耕栽培：植物（空芯菜・ハーブ・セリ・菜の花・花菖蒲など）は、窒素・燐を吸収して、富栄養化で毎年夏場の水温上昇時に生態系を破壊するアオコ（藍藻類）の発生を抑制し、生態系の再生を促している。

II. 二枚貝（池蝶貝一淡水真珠）の導入：二枚貝（池蝶貝一淡水真珠）は、濁りの原因の浮遊有機物質を吸収し、透視度（透明度）を高め、湖底に太陽光をとどかせて、光合成の働きで、水生生物の繁殖と生態系の再生を促す。

III. 体験型環境学習：印旛沼流域小・中学校と連携して、専門講師を招き、毎年6月～9月の期間に体験型環境学習を実施し、水環境の大切さを伝えている。

（I）活動の必要性・緊急性

千葉県では、次のような計画目標がある。①「良質な飲み水の源」②「遊び、泳げる」③「ふるさとの生き物はぐくむ」④「大雨でも安心できる」⑤「人が集い、人と共生する」印旛沼や流域を目指している。

（II）活動の効果・社会への波及効果

11年間の地道な活動を継続して、地域のステークホルダーを巻き込みながら、「植栽いかだ」に植物（空芯菜一野菜・ハーブ・花菖蒲など）の水耕栽培と二枚貝（池蝶貝一淡水真珠）による水質浄化に取り組

んだことで、浄化効果を上げる事ができている。また、流域の小・中学校の体験型環境学習も継続的に取り組んだことなど粘り強い活動が継続的に実現出来た。

他地域の波及効果についても、目に見える具体的なことを報告します。

実例：① 2001年宮城県長沼 ② 2005年宮崎県上椎葉ダム・岩瀬ダム ③ 2009年東京都小笠原母島乳房ダム
④ 2009年ハノイ（ベトナム）タンコン湖 ⑤ 2010年埼玉県旧芝川再生プロジェクト
⑥ 2011年徳島県鳴門市の新池川調整池

(Ⅲ) 成果の達成に向けた改善努力

毎週水曜日・土曜日に活動会員の参加を得て、継続的に事業を遂行できて、独自の「アルミ製いかだ」開発で、実用新案も取得して、費用面からもコスト削減の努力をした。

(Ⅳ) 活動の自立発展性

「アルミ製いかだ」の他県への販売や野菜・真珠アクセサリー販売の開拓など進め、「かっぱの奇跡」のネーミングで販売を促進して、地域活性化を目指している。

(Ⅴ) 当会の成長性

事業の自立に向けた糸口が見えてきました。今後は組織運営面でのコミットメントを得られる人材も開拓することが不可欠。

(Ⅵ) 活動の今後の計画

活動は、11年間の水路での実験段階が終了時にあると思うので、2012年からは、沼本体への実践へと移る段階にあると考えられる。

新たな担い手の確保に努めながら、印旛沼での活動実践の取り組みを継続して、全国の湖沼、河川等の浄化設備として、他県へも協力して、社会への貢献を目指すNPO団体でありたいと思っています。

今回、社会貢献賞の評価をいただき荣誉ある表彰に心より感謝を申し上げます。



InbanumaYasai Ikada no Kai (Inba Swamp Vegetable Raft Association) (Sakura City, Chiba Prefecture)

This NPO was established in 2000 in order to ameliorate the water pollution in Inbanuma (Inba Swamp), a source of drinking water for the people of Chiba Prefecture. It is endeavoring to restore the swamp by means of the natural cleaning power of plants and bivalves. On both sides of aluminum water channels, it installs rafts for raising plants that float the seedbeds and hydroponically cultivates Chinese water spinach, herbs and more, increasing the effectiveness of efforts to clean a swamp that became known for having the most polluted water of any lake or swamp in the country. The organization is also endeavoring to sell the cultivated vegetables and the pearls obtained from the bivalves. Such undertakings have also spread to other prefectures and to Vietnam.

Nominator: Inba Swamp Region Environmental Research Association (NPO Inba)

中川 一郎



78歳 / 福岡県直方市

平成6年から福岡県直方市で市民と警察、そして市側に働きかけ、暴力団追放（排除）運動に地道かつ熱心に取り組み、指定暴力団組事務所を閉鎖撤退に追い込んだのをはじめ、全国初の暴追条例となる直方市暴力団等追放推進条例の制定・施行へと活動をつないだ。この条例は、福岡県暴力団排除条例制定等の礎となるなど市民が安心して暮らせる街づくりに貢献した。

◇推薦者 / 財団法人 警察協会

前例がない！この言葉を、各所でいただきました。

直方所長と一緒に、地元首長を訪ねて、現状を報告し、対策として、暴追条例の制定を、市主導で始めるよう申し入れをしました。

「前例がないから…」が答えとしてかえってきました。

「どうしようか…そうだ！各種関係団体に働きかけて、皆んなでやろう…！」

市議会、防犯協会、交通安全協会、ボランティア団体、左翼系市民団体…、私個人と人間関係のある個人…。皆さんを一同に会して全国で初めての、中小都市に於ける条例制定の必要性を理解していただき、テーブルについていただきました。

その時、個人のつき合いを中心に一人一人会って説明し、必要性を感じていただきました。日頃仲の良い友人達ですから、本当に気持ちよく集まってスタート出来ました。

条例の制定は、市議会です。

市が、案を提出するのを、前例なしで逃げないで、「全国で一番早く条例を作ろう！！」の合言葉にして、皆んなで作ろう！と皆んなが寄って、皆んなで作ってしまった感じです。

私は、多くの皆様と個人的に親しかったので大変助かりました。コーディネートしただけで、後は皆さん方が熱心になって下さいました。

日頃の友人知人としての交流の大切さを楽しみ感じました。

表となく、裏となく、この間、福岡県警四課の皆様、地元直方警察署の熱心なサポートに心から感謝いたしております。

団体を表立って集めて会議を開いても事は、具体的に進まないと思います。

人間関係を密にした構築が大切だと実感いたしました。世の中全てがそうである様に…。



▲ 西日本新聞 2007年6月23日(土)



▲ 読賣新聞 2007年6月23日(土)



▲ 西日本新聞 2007年9月11日(火)



▲ 読賣新聞 2007年8月30日(木)

Ichiro Nakagawa (Age 78 / Nogata City, Fukuoka Prefecture)

Beginning in 1994, Mr. Nakagawa, together with other citizens of Nogata City and the police, lobbied the city as he steadily and passionately conducted a movement to ban (eliminate) gangs from the city. He not only sought to force specified gang offices to close. He also linked these efforts to the passage and implementation of the Nogata City Ordinance Promoting the Banning of Gangs, etc., the first ordinance in the country to ban gangs. This ordinance also became the basis for, among other things, Fukuoka Prefecture enacting an ordinance to eliminate gangs. In addition, it has contributed to creating a city whose citizens can live with peace of mind.

Nominator: Japan Police Support Association

佐藤 初女



森のイスキア 主宰

90歳 / 青森県弘前市

昭和58年より、弘前市で「弘前イスキア」として自宅を開放。人生や生活上の問題をかかえる人の話を「母の心」で聞き相談に応じる為、平成4年に岩木山麓に移拠し、「森のイスキア」と改め救いを求める人を受入れ、手製のおにぎりを振舞う。年間70～80名相談者がいる。自身の闘病体験から「食はいのち」との思いを深め、毎日の食事の大切さを講演会や著書を通して広く啓蒙している。食を通じた講演活動は、海外にも及んでいる。

◇推薦者 / 下村のぶ子・本間 操

この度、栄えある受賞に浴し、多くの方の善意のご芳志のおかげと心から感謝申し上げます。

食べることを大切にすること、お料理を作って全国から訪ねてくる方と一緒に食べてお話をする、そんないたって平凡な活動ですが、私一人の力ではできないことでした。

私は幼少の頃、半農半漁の田舎で暮らしました。おせっかいと言うか、親切と言うか人と会うことが喜びであり楽しみでした。思い越せば80年以上前でも、今という“鍵っ子”になってる家庭もありました。学校から帰ると留守がちになるので結局友達のところに行きます。このような状況を感じたのかわかりませんが、父が庭に二人乗りの、子供から見るとおきなブランコを作ってくれたのです。またまた子供は集まって来ましたが、小学校5・6年になりますと外に向かって行きます。例えば、ボーイスカウト、ガールスカウト、子供会等の活動に参加するように自然に巡回していきます。私も小さいことから一步一步体験し、現在を迎えています。

私の活動は形にもなっていませんし、決まりもない、毎日毎日の生活の積み重ねにほかなりません。

私はこれまで『今』を生きること、今ほど確実なことはないので先を見て進むのではなく、今を真実に生きることによって夢にも希望にも繋がっていくことを体験を通じて話し、私自身もまた深く受け止めていました。

その『今』が、未曾有の大震災であろうとは誰がこのことを知っていたでしょうか？発生は午後2時半頃でしたが揺れ動いたと同時に「地震！」。居合わせた5・6人が顔を見合わせ黙々とあちこちのスイッチを押しましたが反応がないので停電に気づきました。断水も同時でした。今でこそすべて電気になっていますが、以前は火が生活の中心になっていましたので、地震の時は先ず火を止めることを厳しく教えられてきたのです。

初めて体験する大地震も事実として受け止め、よい状況にすすめるように力を合

わせて進むことを誓いあったのです。

あの時からもう半年経過しています。

震災の後、大震災は多くの人に何か大きな変化をもたらしていると感じさせられています。

出会いを大切に一日一日精一杯生きていきたいと思っています。



▲ 森のイスキア



▲ 併設の公園



▲ 談話室



▲ 佐藤初女さん展示ポスター



▲ キッチン

▼ 提供されるおにぎり



Hatsume Sato (Age 90 / Hirosaki City, Aomori Prefecture)

In 1983, Ms.Sato opened up her Hirosaki City home as “Hirosaki Ischia.” In order to listen with “the heart of a mother” to people who have problems in life and living and provide them with consultation, in 1992 she moved her organization to the base of Mt.Iwaki and changed its name to “Ischia in the Woods.” Here she receives people who come asking for help and treats them to handmade riceballs. She provides consultation to 70-80 people a year. Based on her own experience with disease, she has widely disseminated the idea that “food is life” and, through books and lectures, has widely communicated the importance of daily meals. In 1995 she appeared in Gaia Symphony No.2. Her lecture activities related to food have even spread to overseas.

Nominator: Nobuko Shimomura, Misao Honma

特定分野の功績

副賞／日本財団賞(賞金 50 万)

海の貢献賞

- 海の安全確保、環境保護、汚染防止等に尽くされた功績
- 海に関わる産業分野において
 - 傑出した技能による同分野への貢献と技能の伝承に尽くされた功績
 - 優れた発明・考案・改良等により同分野の発展に尽くされた功績
- 海に関わる文化の発展・保存・伝承等に貢献された功績



日本カブトガニを
守る会

----- 130



名取ハマボウフウの会

----- 132

日本カブトガニを守る会



会長
伊藤 富夫

岡山県笠岡市

昭和 53 年にカブトガニの繁殖地として、唯一国の天然記念物指定を受けている笠岡市で守る会を結成。海の環境汚染により絶滅の危機にある「生きている化石」ともいわれるカブトガニの保護運動を展開、海洋生物の環境維持を支える。他県など 5 支部と個人を合わせて約 1,000 人の会員により構成。各支部ごとに海岸清掃、生態調査、産卵調査、藻場の再生のためのアマモの植栽事業などの活動を行っている。年に一度の総会を開催し、研究会や繁殖地の見学会、市民参加型の公開講座を実施し、カブトガニと海の環境保護活動を市民と共に盛り上げている。

◇推薦者 / 岡山県笠岡市 市長 高木 直矢

日本カブトガニを守る会は、昭和 53 年に岡山県笠岡市で結成されました。当時は、高度経済成長のまっただ中で、瀬戸内海沿岸の干潟は干拓や埋め立てにより減少し、カブトガニを取り巻く海の環境は大変悪化しておりました。

昭和 32 年の笠岡市富岡湾干拓 106 ヘクタールに続いて、国内唯一の国指定の天然記念物である、笠岡市生江浜のカブトガニ繁殖地も国営干拓事業によって干陸化され、カブトガニの保護が緊急の課題となっていた時期でもありました。

医業の傍ら、カブトガニの研究を行っていた故西井弘之先生が中心となって、昭和 45 年に同会の前身である、笠岡市カブトガニを守る会を結成し、カブトガニ非常事態宣言を出して、カブトガニの保護運動を強化していきました。

その結果、昭和 46 年に笠岡市神島水道一帯が、国の天然記念物の追加指定を受けることができました。また、昭和 50 年には、笠岡市立カブトガニ保護センターの設立にも繋げることができました。

昭和 53 年には、カブトガニ保護の波を全国に展開するべく、日本カブトガニを守る会の結成に至ったものです。

現在は、全国に笠岡、福岡、伊万里、大分、四国の 5 支部があり、長崎や山口などカブトガニ繁殖地のある地域を中心に、約 1,000 人の会員がカブトガニの調査研究と保護運動を展開しております。

会全体の活動としては、年 1 回の会報「かぶとがに」の発行と、毎年総会とあわせて開催しているカブトガニ研究会や講演会、一般市民の方々にカブトガニを広く知ってもらうためのカブトガニ公開講座があります。

このほか、各支部や地域単位で、カブトガニの産卵状況や幼生、成体の調査や住民の方々とともに行う海岸清掃活動や産卵観察会、子供たちを対象にした海辺の学校などの各種講座、カブトガニ保護運動を盛り上げるためのカブトガニフェスティバル、干潟の環境保全のためのアマモの移植事業、海外の学術シンポジウムへの参

加など様々な活動を行っております。

この度は、身に余る賞をいただき大変光栄に存じます。

以前に比べると、カブトガニを取り巻く、海の環境は幾分改善の兆しが見られますが、この受賞を契機に、さらなるカブトガニの保護運動の展開と、海と干潟の環境保全活動に地域のみなさんとともに取り組んで行きたいと考えております。



▲ 海辺の学校



▲ カブトガニの幼生放流



▲ 海の生物観察

▼ 干潟のカブトガニの幼生



▲ つがいのカブトガニ



▲ アマモとカブトガニの脱皮殻



▲ 海辺クリーン作戦



The Association for Protecting the Japanese Horseshoe Crab

(Kasaoka City, Okayama Prefecture)

This organization was established in Kasaoka City, which, in 1978, as a breeding ground for the horseshoe crab, became the only place in Japan to be designated a natural national monument. The organization campaigns to protect the horseshoe crab, known as a "living fossil," which is threatened with extinction by ocean pollution; it also supports efforts to improve and maintain the environment of other marine organisms. It has five branches, including in other prefectures, and a total of about 1,000 members. Each branch conducts such activities as coastal cleanup, ecological surveys, egg production surveys, and eelgrass planting projects to regenerate seaweed beds. The organization holds a general meeting once a year; conducts research conferences, observation tours of the breeding grounds, and public lectures involving citizen participation; and, together with the public, promotes activities for protecting the horseshoe crab and the marine environment.

Nominator: Takagi Naoya, Mayor, Kasaoka City, Okayama Prefecture)

な とり かい 名取ハマボウフウの会



大橋 信彦



宮城県名取市

名取市閑上海岸で絶滅したと思われていた海浜植物「ハマボウフウ」が市民らによって発見。その株が地元農業高校に運ばれて実をつけた話を聞き、ハマボウフウの生息する美しいふるさとの海を取戻そうと平成13年に発足。100名近い会員を中心に、海岸に1,000㎡程の保護区を設置、育成に努めている。毎年6月に幼苗の移植会と11月には種まき会を実施。10年を経て「海岸のお花畑」の実現化を目指している。移植会や種まき会は農高生や小中学生、町内会が参加する協働作業にもなっている。

3月11日の東日本大震災の津波により、集落は壊滅、会員6名が亡くなり、1名の行方が不明、ハマボウフウの保護区も土砂で埋まっている。このような中で、亡くなった会員のためにもとハマボウフウの復活に向け活動を再開させている。

◇推薦者 / 宮城県 環境生活部 環境対策課

ハマボウフウに寄せて

平成12年5月、名取ゆりあげ閑上海岸で絶滅危惧種のハマボウフウが発見された。わずかに生き残っていたそれを、わたしたちは地域内にある農業高校に運び、育成をお願いした。学校の畑に移植されたハマボウフウは、間もなく根付き、翌年には白い花を咲かせた。そしてその年の8月、「名取ハマボウフウの会」が結成された。会員は20名でのスタートだった。



ハマボウフウは海岸の砂地に自生するセリ科の多年草で、光沢のある緑の葉と夏に咲く白い小花、垂直に伸びる根が特徴とされる。昔より季節の食べ物として土地の人に親しまれ、初夏、浜に出て新芽を摘み酢味噌和えにして食べるのが、どこの家でも習わしとなっていた。ある時、ハマボウフウの根が風邪によく効くことが知られ、乱獲された。レジャー用車両の走

行や護岸工事がそれに拍車をかけ、現在、宮城県では絶滅危惧種に指定されている。

名取ハマボウフウの会では、「美しく健康な海岸の再生」をスローガンに平成14年6月、海岸の一角に看板を立て防護柵を巡らせたハマボウフウ保護区をつくり、本格的なハマボウフウの育成に乗り出した。また、全国各地の海岸で活動する市民団体と連携して年1回の交流会を実施してきた。一方、名取市の北釜地区に借用した栽培畑では、季節の食べ物として地域の人々に親しまれてきたハマボウフウの生産・販売にも着手し、環境と経済の両立を目指す新たな仕組みづくりにもチャレン

ジしてきた。

以来10年、“海岸のお花畑づくり”と銘打ったハマボウフウの保護育成活動は着実に成果を上げ、毎年恒例の行事となった移植会や播種会には、農業高校の生徒をはじめ多くの市民が参加している。一方、“潮風のおくりもの”をキャッチフレーズとする栽培畑での新しい食材づくりも、それを調理し、提供してくれる料理店が広がりを見せ、ハマボウフウが「地域の特産物」として話題に上がる日が来るのも、夢ではないかもしれない。

今年6月、名取市では「第2回ふるさと海辺フォーラム」が開催された。海辺フォーラムも名称は、ハマボウフウ交流会をもっと広がりのあるものにしようと石狩市の皆さんが提唱し、昨年より名称を変えることになったものである。

二日間に亘る催しは、ネットワークを結ぶ全国12の団体の参加協力を得て、災害を乗り越える復興記念イベントとしての役割を立派に果たしてくれた。

3月の大震災で失われたものは決して小さくはないが、厳しい状況の中から生まれたものや得られたものもまたあり、それを力に、わたしたちはこれからも海岸での活動を継続していこうと考えている。



▲ 海辺フォーラムイベント



▲ 臨空公園栽培畑（震災後）



▲ 臨空公園栽培畑がれき撤去

The Natori Hamabofu (*Glehnia littoralis*) Association (Natori City, Miyagi Prefecture)

The seaside plant, hamabofu, thought to have gone extinct, was discovered on Natori City's Yuriage Beach by local citizens. Specimens were taken to the local agricultural high school, news that they fruited was reported, and this organization was then created in 2001, in order to restore the ocean of this beautiful region inhabited by the hamabofu. The organization's nearly 100 members and others are working to cultivate the plant in a protected area of about 1,000m² that has been set aside on the coast. They hold a gathering for transplanting seedlings in June and another for sowing seeds in November. They are aiming to create a "coastal flower garden" over 10 years' time. The gatherings for transplanting seedlings and sowing seeds are cooperative activities in which students from the agricultural high school, middle school students and neighborhood associations all participate. Due to the tsunami from the Great East Japan Earthquake of March 11, Natori City was ravaged, six members of the association died, one is missing, and the hamabofu protected area was buried in earth and sand. Nevertheless, for the sake of the deceased members, the association is resuming its activities to resurrect the hamabofu.

Nominator: Miyagi Prefecture, Department of Environment and Lifestyle, Environmental Countermeasures Division

社会貢献者表彰分野・年度別受賞者数実績表

表彰分野	1期 昭46	2期 47	3期 48	4期 49	5期 50	6期 51	7期 52	8期 53	9期 54	10期 55	小計
人命救助等	93	203	156	157	213	197	235	255	230	183	1922
国際社会への貢献											0
青少年育成・スポーツの振興	14	21	33	101	111	95	97	81	75	76	704
社会福祉への貢献	62	58	82	149	140	200	149	114	102	119	1175
文化の振興				3	7	11	5	9	11	11	57
地域社会への貢献	14	18	12	14	26	19	20	15	12	14	164
運輸交通への貢献	23	15	16	24		43	66	57	55	52	351
その他	34	35	87	97	114	95	105	135	139	105	946
小計	240	350	386	545	611	660	677	666	624	560	5319
式典月日	3/23	11/10	10/26	9/26	12/10	11/5	11/8	11/7	11/7	11/21	
式典会場	①ホテルニューオータニ					②笹川記念会館					

表彰分野	11期 昭56	12期 57	13期 58	14期 59	15期 60	16期 61	17期 62	18期 63	19期 平元	20期 2	小計
人命救助等	195	208	177	198	274	193	106	127	89	98	1665
国際社会への貢献										19	19
青少年育成・スポーツの振興	81	93	89	78	92	117	22	24	26	26	648
社会福祉への貢献	95	112	124	109	104	103	38	38	46	57	826
文化の振興	16	13	17	20	19	12	9	7	13	8	134
地域社会への貢献	15	12	12	15	8	13		3	7	11	96
運輸交通への貢献	42	40	38	45	35	31	55	54	69	76	485
その他	96	95	104	94	86	56	57	48	39	10	685
小計	540	573	561	559	618	525	287	301	289	305	4558
式典月日	11/5	11/30	11/16	11/6	11/20	11/21	11/10	11/8	11/8	10/9	
式典会場	② 笹川記念会館										

表彰分野	21期 平3	22期 4	23期 5	24期 6	25期 7	26期 8	27期 9	28期 10		小計	受賞者 合計
人命救助等	101	82	34	15	47	21	27	16		343	3930
国際社会への貢献	13	17	14	4	8	5	5	6		72	91
青少年育成・スポーツの振興	40	54	44	29	22	25	28	32		274	1626
社会福祉への貢献	64	75	68	28	36	37	34	42		384	2385
文化の振興	11	15	10	3	8	10	10	12		79	270
地域社会への貢献	12	9	4	7	14	20	19	19		104	364
運輸交通への貢献	83	80	49	18	14	18	16	20		298	1134
その他	13	7	7	0	0	0	0	0		27	1658
小計	337	339	230	104	149	136	139	147		1581	11458
式典月日	11/7	11/5	11/1	11/7	11/1	11/12	11/13	11/9			
式典会場	②		③ホテル海洋			④東京全日空ホテル					

社会貢献者表彰部門・年度別受賞者数実績表

部 門	29期 平 11	30期 12	31期 13	32期 14	33期 15	34期 16	35期 17	36期 18	小計	受賞者 合計
第一部門 緊急時の功績	6	5	6	8	5	4	5	2	41	11660
第二部門 多年にわたる功労	14	15	11	12	13	11	11	18	105	
第三部門 特定分野の功績		4	7	8	8	11	9	9	56	
(海の貢献賞)			2	1	3	3	4	2	15	
(国際協力賞)		2	2	1	0	2	0	0	7	
(ハッピーファミリー賞)		0	0	2	1	3	1	2	9	
(21世紀若者)		2	3	4	4	3	4	5	25	
子ども読書推進賞					3	3	3	3	12	
小 計	20	24	24	28	29	29	28	32	214	
式典月日 式典会場	11/10 ④	11/22 ①	10/29	11/19	11/4	11/15	11/16	11/20		
④東京全日空ホテル										

※平成11年度より個人推薦を受け付ける。
 平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする。
 平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する。
 平成15年度より子ども読書推進賞を新設する。

社会貢献者表彰部門・年度別受賞者数実績表

部 門	37期 平 19	38期 20	39期 21	40期 22	41期 23		小計	受賞者 合計
人命救助の功績	9	13	11	11	8		52	11900
社会貢献の功績	33	35	34	34	39		175	
特定分野の功績 (海の貢献賞)	1	2	3	5	2		13	
小 計	43	50	48	50	49		240	
式典月日 式典会場	11/13	11/17	11/24	11/16	11/21			
		④ ANA インターコンチ ネンタルホテル東京			⑤ 帝 国ホ テル			
子ども読書推進賞 ※表彰式：6/26 会場：虎ノ門バストラル	1							13
								11913

※平成19年度より部門名を変更する。子ども読書推進賞は最終回。

都道府県別受賞者内訳

県名	平成22年度までの累計	平成23年度の受賞者	受賞者数
北海道	637	2	639
青森県	175	1	176
岩手県	186		186
宮城県	308	4	312
秋田県	123		123
山形県	151		151
福島県	166		166
茨城県	192		192
栃木県	142		142
群馬県	239		239
埼玉県	451	3	454
千葉県	390	1	391
東京都	1105	10	1115
神奈川県	604	1	605
新潟県	252	1	253
富山県	143		143
石川県	143		143
福井県	202	1	203
山梨県	132		132
長野県	195		195
岐阜県	210		210
静岡県	305	3	308
愛知県	295	3	298
三重県	162		162
滋賀県	95	2	97

県名	平成22年度までの累計	平成23年度の受賞者	受賞者数
京都府	193	2	195
大阪府	469	1	470
兵庫県	498		498
奈良県	111		111
和歌山県	142		142
鳥取県	90		90
島根県	111		111
岡山県	303	2	305
広島県	404		404
山口県	271		271
徳島県	173		173
香川県	192		192
愛媛県	150		150
高知県	70		70
福岡県	529	3	532
佐賀県	116	1	117
長崎県	265		265
熊本県	224		224
大分県	119	2	121
宮崎県	70		70
鹿児島県	138		138
沖縄県	153	1	154
その他	70	5	75
合計	11864	49	11913

* 県名は、受賞者居住地の都道府県名。その他は、居住地が海外のみ。

* 受賞者数は、当財団設立の昭和46年からの都道府県別受賞者件数の累計。

* 受賞者数は、こども読書推進賞受賞者も含めている累計。

役員・評議員一覧

平成23年11月1日現在

会 長	日 下	公 人	公益財団法人 日本財団 特別顧問
副 会 長	内 館	牧 子	脚本家
専 務 理 事	天 城	一	公益財団法人 社会貢献支援財団
理 事	久 米	信 行	久米繊維工業株式会社 代表取締役社長
理 事	立 石	信 雄	オムロン株式会社 特別顧問
理 事	永 嶋	久 子	株式会社 資生堂 元取締役
理 事	三 谷	充	三谷産業株式会社 代表取締役会長
理 事	屋 山	太 郎	政治評論家
理 事	米 長	邦 雄	公益社団法人 日本将棋連盟 会長
監 事	篠 原	由 宏	篠原法律会計事務所、弁護士
監 事	竹 内	清 治	BORT RACE 振興会 元理事
評 議 員	石 井	宏 治	株式会社 石井鐵工所 取締役社長
評 議 員	尾 島	俊 雄	銀座尾島研究室 主宰
評 議 員	今	義 男	海洋政策研究財団 理事長
評 議 員	さかもと	未 明	漫画家、作家
評 議 員	重 村	智 計	早稲田大学 国際教養学部教授
評 議 員	泊	懋	東映アニメーション株式会社 相談役
評 議 員	中 島	健一郎	株式会社 シナプス・サポート 取締役会長
評 議 員	広 渡	英 治	財団法人 ブルーシー・アンド・グリーンランド財団 専務理事
評 議 員	藤 原	正 彦	お茶の水女子大学 名誉教授
評 議 員	三 宅	久 之	政治評論家

公益財団法人 社会貢献支援財団 (こうえきざいだんほうじん しゃかいこうけんしえんざいだん)

基本財産：20億5千万円
設 立：1971年5月1日
所 在 地：東京都港区西新橋 1-11-3
郵便番号：〒105-0003
T E L：03-3502-0910
F A X：03-3502-7190
U R L：<http://www.fesco.or.jp/>

社会貢献者の記録

2012年3月10日発行

発行者：公益財団法人 社会貢献支援財団
Published by Foundation for Encouragement of Social Contribution(FESCO)
<http://www.fesco.or.jp/>

印刷：株式会社 創美

